

910.25-N14㊦

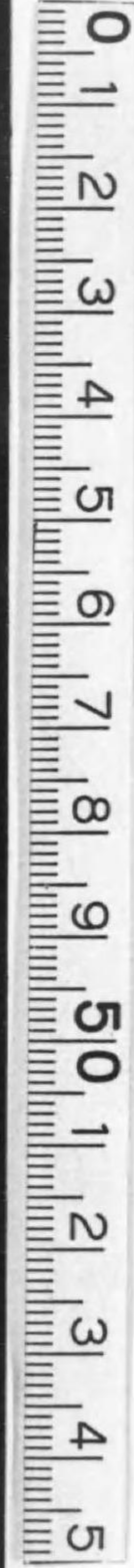


1200500754384

910.25

14

㊦



始



外 520-47

910.25
N14



早稻田大學教授 永井一孝著

江戸文學史

東京 敬文堂書店刊



617-262

緒言

一、本書は私が多年企圖しつゝあつた國文學史の一部として公にするものである。

一、文學史は、それが既に史といふからは、文學の史的考察を目的とすることは論を俟たない。文學が時世の流に隨つて如何に展開したか、現代の文學は如何なる徑路を経て今日あるに至つたかを考察記述すべきである。かの徒らに個々の作品の解題批評を羅列し、妄りに作家の傳記逸事を叙述したのみでは、縦令それが年代順に配列されてあつたとしても、未だ文學史の本分を完うしたものと云へない。文學史としては、須らくその間の關係を討究し、その展開の理法を闡明しなければならぬ。作家は時代が生み、作品は作家の個性の發露である以上は、作品の解説批評は勿論、作家の閱歷、境遇、時代の精神推移をも審かにせねばならぬ。私はかうした方針の下にこの國文學史の編述を企圖した。さりながら、この事たる容易の事業ではない。上代の事は文献の不備から事實の正確を期すること難く、現代の事は事件そのものゝ複雑なるのみならず、動搖常なきを以て的確なる批判を下し難い。然し、史としては、どこまでも事實の正確を期せねばならぬ。いかなる解説批評も正確なる事實の上に

立つて、そこに始めて價值は生ずるからである。かの事實の詮索を等閑視して徒らに批評の筆を弄するものゝ如きは所謂空中の樓閣、何の寄與する所があらうぞ。本書はこの故に主として事實の正確といふことに深甚の注意を拂つた。

一、私が國文學史に筆を執つたのは、早稻田大學發行の「文學講義」に掲載した「日本文學史」と題したのが始めて、明治二十八年一月であつた。爾來三十五星霜稿を改めること前後四回、今日も「國文學史」と題して猶連載してゐる。その第三回目の講義「國文學發達史」と題して掲載したものゝ一部に訂正を加へたのが、即ちこの江戸文學史である。

一、江戸時代は、明治時代を外にしては、文運の發展その極に達した時代であつた。明治時代の文學殊にその末期の文學の現實生活に即して智的要素を多分に含んでゐる現象を眺めた眼で、江戸時代の文學を見る時には、江戸時代の文學は餘りに教訓的勸善懲惡的である一面に、又餘りに享樂的耽美的であつたことに驚かされる。江戸時代の文學には實に二大流派があつた。曰はく儒教と武士道とを基調とする意志の文學、曰はく享樂耽美を本領とする感情の文學。かれを貴族文學といふべくば、これは平民文學、市井文學。この二大流派の氷炭相容れざるが如きものが、いかに交錯展開して江戸時代の文學を形成したか。これを解

説しようとするのが本書の眼目とする所である。上は他日公にせんとする上古中古近古の文學史を承け、下は本書と殆ど同時に公にする明治文學史に及ぼす時、そこに一貫した體系を具へた國文學史となつて、我國文學の今日あるを致せる所以の理法を明かにすることが出来るであらうと信ずる。

一、只慥むらくは私の微力と繁劇とは所期の半をも達することが出来ないのみならず、意外の思ひ違ひや誤謬があらうかといふことである。讀者諸君、幸に叱正の勞を惜しまざらんとを、こゝに私は衷心から之を懇請して置く。

昭和十年一月

著者識

江戸文學史

目次

總說	一
第一期 啓蒙時代	
第一章 時代の概観	三
第二章 漢學の興起	八
第三章 和歌革新の曙光	一六
第四章 貞門と談林の俳諧	二五
第五章 古淨瑠璃	三〇
第六章 假名草子	三五
第二期 元祿時代	
第一章 時代の概観	五〇
第二章 漢學の隆盛	五五

目

次

一

三

五

五

三〇

三五

一六

八

三

第三章	和漢混和文	七
第四章	和歌壇の廓清	八
第五章	蕉風の俳諧	九
第六章	狂歌の發達	一〇
第七章	淨瑠璃の活躍	一〇八
第八章	演劇の發展	一一九
第九章	浮世草紙	一二六
第三期 文運東漸時代		
第一章	時代の概観	一三六
第二章	詩文の勃興	一四〇
第三章	眞淵と蘆庵	一五四
第四章	俳諧の中興	一六六
第五章	川柳の消長	一七九
第六章	狂歌狂文の隆盛	一八七

第七章	草雙紙	二〇一
第八章	讀本	二一四
第九章	淨瑠璃の消長	二二六
第十章	東西の劇壇	二三七
第四期 化政時代		
第一章	時代の概観	二四五
第二章	寛政異學の禁	二六一
第三章	詞章の推移	二七五
第四章	歌壇の鼎立	二九〇
第五章	國學の大成	三〇六
第六章	飯盛と眞顔	三二七
第七章	俳壇の俗了	三三八
第八章	脚本の圓熟	三三八
第九章	讀本と馬琴	三五二

第十章 中本の二様式……………三六

第十一章 合巻物と種彦……………三六

人名索引

書名及件名索引

目次終

江戸文學史

早稻田大學教授 永井一孝著

總說



江戸幕府の治世三百年間は、明治の世を外に於ては、文運の發展が其の極に達した時代である。燦然たる文物は空前の隆盛を致し、我が國文學もまた大に其の光彩を發揮したのである。

文學がかやうに隆盛になつたのは、素より泰平安寧の然らしむる所であるとはいへ、また幕府の建設者である家康その人の方寸から出でたことを忘れてはならぬ。家康は學問の用を大なりとして、治國の要をば之に歸せんとしたのである。かくて儒學の

奨励となり、法律制度の制定となり、古書の蒐集及び出版事業の勃興となつた。而して家康の意志は幸に歴代將軍の體認する所となつて、中にも將軍綱吉の如きは自ら儒を以て任ずるに至つた。こゝに於いて諸侯もその旨を承けて、進んで文教のために力を盡した。されば、一國の文柄を掌るもの、江戸の湯島に聖堂があり、諸藩に藩學の設立があり、一般庶民のためには都鄙共に寺子屋があつて、日用必須の文字を知らしめた。平安朝の昔、京に大學があり、諸國に國學があつたとはいへ、それは指紳の徒の壟斷する所で、庶民の如きは遂に教化の一端にすらも與る事が出来なかつた。然るに、今や教育機關の施設は略、その途を得て、知識は普く下流社會にまでも及ぼうとする。我が江戸時代文學が、全國民の鑑賞する所となつたのは此の故である。かの平安朝文學が宮廷文學で終はつたのに比べると、その差は殆ど雲泥の稱に値する。

印刷術の發達は教育の弘布知識の普及と兩々相俟つて起つた。家康の奨励した典籍の蒐集、書籍の翻刻は、漸く出版事業の隆盛を促し、幕府の修史となり、また徳川光圀が彰考館の修史の擧となつた。加賀侯前田綱紀が孜孜として倦まなかつた古書の蒐集も、その眞意は亦こゝにあつたやうであるが、惜むらくは事の進行を見るに至らなかつた。民間の書籍刊行は年一年と多きを加へて、かの平安朝に於ける雄篇傑作も徒に轉

轉傳寫を以て行はれたのと同じ日に言ふべきものではない。

かくの如く文化は一般に普及し文學の鑑賞は上下に互るとはいへ、當代の社會組織は我が文學をして自然に二大流派を生ぜしめた。蓋し江戸時代は我國に於いて階級制度の最も整頓せる時代である。身を賤隸より起して關白を贏ち得たその人も、戰國時代の一たび終るや否や、刀狩の名の下に階級制度を立てようとした。徳川幕府は其の方針を繼承擴充して、遂に一大社會組織を構成するに至つたのである。即ち公卿あり殿上人あり、之に次いで武士あり、武士の間にもまた幾多の階級を生じ、大名に譜代、外様の別、幕府直參の士に旗本、御家人の別がある。第三位に神主僧侶、第四に百姓町人、最下級に穢多、非人がある。幕府は日常の業務は勿論、衣食住の末までも各自に其の地位を守つて敢て他を侵す事なからしめ、或は法律により、或は階級間の制裁によつて、この制度の鞏固を計らしめた。かくの如くにして、この制度は幕初より幕末に至るまで變る所がなかつた。果然趣味好尚も自然に二大潮流を成した。もし夫れ士分の家に香花茶湯、また圍碁の遊があれば、百姓町人の家には將茶花骨牌の戲がある。琴の調は三味線の音と相對し、能樂は歌舞伎と相抗し、謡曲は淨瑠璃節と相分る。狩野土佐は『伊勢』、『源氏』の堂上の儀容を描き、支那の景物を摸し、浮世繪、吾妻錦繪は遊女の粉黛と俳優の嬌

態とを畫く。文學に於いてもまたそれと同じく、漢詩文と和歌と擬古文とは一類を成し、狂歌俳諧と戯曲小説とはまた一類を成してゐる。前者を貴族文學といふならば、後者を平民文學と稱すべきである。

これを内容の上から考へると、貴族文學は意志の上に立ち、平民文學は感情の上に立つてゐる。貴族文學は武士道と儒教とを以て根本思想とし、平民文學は享樂耽美を以て本領とした。二者の性質は全く相背反して氷炭も管ならぬもの、されど若し幸に融和混淆させる事が出来たならば、典型を離れ傳承を捨て、平民文學を標榜する自由の筆致清新の風趣を發揚する事が出来て、しかも士君子に彈指されるやうな猥雜の虞がなく、また古の據るべき者を探つて、渾融進化し大に貴族文學の特色を發揮して、しかも模倣踏襲をこれ事とし、萎靡沈滞に陥るの醜を見る事なく、完美の域に達したことであらう。然るに二者は遂に融和するの期がなく、しかもなほ融和の狀を裝ふに至つた。平民文學が往々教訓の假面の下に隠れたのは著しい其の一例である。これ實に文藝以外の原動力の壓迫が然らしめたので、即ち武士道と儒教との勢力及び幕府が執つた消極的方針がかくあらしめたのである。

當代に於ける社會の原動力は儒教であつた。素より佛教は大徳高僧の出でてその

欠

欠

學の神髓は平民文學にあり、生命は感情本位の文學にある。

幕府の當事者は治國の政策上遂に唯美の文藝を許すことが出来なかつた。町人が豪奢放逸の風は其の執る所の儉約質素の主義と相容れざるものであつた。元祿の華美に對する將軍吉宗明和安永の遊蕩に對する松平定信文化文政の所謂大御所様時代に對する水野忠邦是等の人々は皆綱紀の振肅を計つた明君賢佐である。而して儒教や武士道を以て町人の富の力の結果を壓伏しようとした。されば文學に對するにも往過酷に失した點が少なからで、西鶴の好色本の禁止以來その厄に遭ふものが相踵いで出でた。感情本位の文學は最も忌まれたのである。また幕府は自家の存立上、苟も威嚴を冒し基礎を危くする者があれば直に酷刑に處した。慶安二年出版の『古狀摘』はたゞ家康の書簡を録した一事を以て、その出版主は斬罪に處せられた。『太閤記』の類は家康の事蹟を記載した爲に屢、絶版の嚴命に接した。元祿七年『鹿の巻筆』の著者鹿野武左衛門が巷説を記した爲に罪を得て大島に流された如きは眞に人をして呆然自失せしめるものである。されば著作の徒は戦々兢兢として筆禍を避けようが爲に、現代を移して足利の世となし、江戸を轉じて鎌倉に托した。是等は深くいふを要せぬものであるが遂には烟華青樓の委曲を盡した洒落本であつて猶ほ教訓本と稱し、或は誨淫の書

を著はしながら自ら教訓亭と號するなどは、世上比々として目撃する事例であつた。純感情の作『源氏物語』も改作される時には、一種の道德的解釋と勸懲主義とに都合のよい脚色を加へられる程であつた。かくて、平民文學の本に竹を接いだやうな教訓主義勸懲主義は、要するに國家の權威が餘儀なくせしめた結果である。所謂戲作の徒は、その假面の下に隠れて、ひたすらに卑猥の筆を弄した。その愚は笑ふべく、その罪は憎むべきも、亦已むを得なかつたのである。されば、文學の眞價は遂に知られることなく、文學にたづさはる者をば道德の奴婢を以て目し、讀書の餘業と稱し、或は遊戯三昧たゞ玩弄物と同一視した。江戸文學が遂に人生の眞義に到達する事なく、深刻凄慘の趣なく、幽玄神祕の味なく、たゞ洒脫輕妙艷麗而して現世的雰圍氣の中に立つたのは、即ちこの故である。

以上の二大流派は時と共に消長がある、或は抗し、或は携はる。その跡を討ねれば、四大時期に分つ事が出来る。

第一期 自慶長八年(二二六三) 至延寶八年(二三四〇) 七十八年間

第二期 自天和元年(二三四一) 至元文五年(二四〇〇) 六十年間

第三期 自寛保元年(二四〇一) 至天明八年(二四四八) 四十八年間

第四期 自寛政元年(二四四九) 至慶應三年(二五二七) 七十九年間

第一期は啓蒙時代と稱する。幕府が漸く其の基礎を築かうとして實際的經綸に追はれた時で、到底未だ文學の發展を望むべき時ではなかつた。然しながら、この間啓蒙を經、智識開發を經て、始めて第二期の盛運に達したのである。故にまた第二期の準備時代とも稱する事が出来る。

第二期は元祿年間を中心として前後に互つた所謂元祿時代。江戸時代の中で最も豪興の氣風の瀰漫した時、平民文學の殆ど全く何等の抑壓を受けないで自由な發展をなし得た時代である。一に發展時代とも稱すべきである。

第三期は前期の盛況を受けて秋風落葉の感に堪へない時であつたが、また次期に於ける捲土重來の準備はこの間に成つたのである。故にこの時代を化政前期ともいふべきであらう。今は他の見地からして文運東漸時代と稱する。

第四期は文化文政を中心とした前後八十年直に移して化政時代と稱する。江戸時代の文明の最も爛熟した時代、泰平謳歌の絶頂に達した時である。平民文學が前の元

祿時代に比して自ら別途の發達をなした時である。
かやうに分つた四大時期は、更に他の觀察點から見ても行かねばならぬ、即ち東西の地理に就いてある。

第一期は京都中心の時代である。従來文權の存した歴史上からまさに然るべき所である。第二期は大阪中心の時代である。當時江戸は未だ殺伐の氣に充ちて、街頭には喧嘩辻斬の沙汰ばかり繁く、文藝としては纔に幼稚な金平節キンヘイノフシに喝采する時、大阪には西鶴セキゾウがあり、近松チカマツがあつて、人々はすでに人情の熾微に泣いて居た。第三期は文藝の中心がまさに大阪を離れて江戸に移らうとする時である。文運東漸時代とはこの謂である。上方文明の移植は家康が夙に企圖する所であつた。林羅山の召聘は勿論、狩野探幽カノノトクウが幕府御繪所となり、住吉廣通の子孫が土佐繪所ツクサノエドとなり、その他北村季吟キタムラキギンが綱吉に聘せられ、或は近衛基熙チカノノミキヒが家宣に招かれて京式の禮法を教授するなど、上方文明は漸次に江戸に移つた。第四期に至つて、文運の中心は江戸に於いて確立せられた。江戸特有の文明がその精粹を發現したのは此の時代である。この時京阪の文學は凋落してまた振はず、地を拂つたのである。然しながら、なほ一現象の注意すべきものあつたことを知らねばならぬ。江戸は泰平の春に心浮かれて行遊吟詠日も足らぬ時、京都には悲

憤慷慨の聲激しく、幾多の騷客は血涙の滂沱たる文辭をなした。かくては文壇の中心も再び京都に移るかと思はれたが、やがて尊攘開國の論囂々として起り、振古未曾有の大變革あるに及んで、文藝は暗黒の中に沈淪し、而して我が江戸時代の文學も此に終焉を告げたのである。

第一期 啓蒙時代

第一章 時代の概観

文祿二年(一二五三)徳川家康が未だ一諸侯に過ぎなかつた時、已に碩儒藤原惺窩を京から招いて『貞觀政要』を講ぜしめた。されば、その一度天下の覇權を掌握するに及んでは第一に力を極めたのは文教の復興といふことであつた。しかも家康の好學は尋常一様のものではなかつた。近藤重藏の『御代々文事年表』にいふ「天海僧正撰する『東照宮縁起』に、後陽成院の宸筆にも、新田大相國家康公は好勇恢武天下の名士なり、加之研精於文學發志於經綸といへり。宸筆に所謂研精とは、豈に尋常好書を謂ふの謂ならんや、深く御好學の厚きを嘉獎し給ふ所以なり。」と。家康はかゝる好學の人であつて、剩へ治世の要道を儒教に求めたので、まづ學者を發庸拔擢し、銳意民衆知識の向上普及を計らしめたのである。かくて林羅山は拔擢されて儒官となつた。儒學の勢力が大に扶植されて、さしも榮えた佛教の壘をも摩するやうになり、修身齊家の説が三百年の聖訓となつたのは此に始まる。

家康の招聘した重なる學者には、公卿では舟橋秀賢、山科言經がある、和學者では冷泉爲滿、飛鳥井雅庸がある、僧侶では相國寺兌長老、南禪寺三長老、東福寺哲長老がある。その中にも、金地院崇傳長老は最も内典外典に兼通して、羅山と共に幕府の施設に當つて獻策する所が夥しかつた。家康が是等の諸學者を擁して文教の爲に計畫したものが二つある。一にいはいはく古書の蒐集、二にいはいはく書籍の出版。

應仁の大亂以來兵燹にかゝつた書冊は果して幾萬であつたらう、その纔に災厄を免れ得たものでさへ空しく泥土に委し去つたのである。かの一條兼良が桃華坊文庫の慘狀は明かに當時の消息を語るものではないか。家康はすなはち之を恢復しようとして、公卿の篋底をも寺院の祕庫をも探索して古典籍を求めた。秘して出さないものはすべて廢紙とするとは、當時公卿等に對しての嚴命であつた。かくて蒐集せられたものは、江戸城内富士見櫓に文庫を設けて之を保存した。時は慶長七年(一二六二)である。これが後に寛永の末年に於いて紅葉山に移された紅葉山文庫である。家康は更に五山の僧侶に命じて典籍の筆寫をもなさしめた。時は恰も大阪の役に當り、兵馬倥傯の際であつたにも拘はらず、暫時も息むことなく、京都南禪寺に於いて謄寫に努めさせた。『舊事記』『古事記』『日本後紀』『文德實錄』『三代實錄』『類聚國史』律令格式等をはじめ

めとして、『百練抄』、『江家次第』、『北山鈔』、『西山鈔』等は、皆その折りに傳寫したものである。

このやうにして家康は典籍の散佚するのを防いだ。更に之を刊行して世に普及せしめようともした。家康は世に信長老と稱せられて夙に博識の聞えの高かつた足利學校第九世の庫主閑室を聘して伏見の學校の主宰とし、木活字十萬餘を刻して書籍刊行の事を管領せしめた。慶長四年に開版せられた『孔子家語』を以て幕府開版のはじめとする。『貞觀政要』、『武經七書』等の諸版が相踵いで出た。その後、開版事業を駿府に移され、羅山及び崇傳が代つて之が主宰となつた。慶長二十年に、『大藏一覽』、『元和二年に『群書治要』の開版があつたが二者共に新鑄の銅活字を以てしたのである。活字版は當時之を一字版と稱した。その法は、まづ支那から始まつて朝鮮にうつり、後に我國に傳來したるものである。『大藏一覽』刊行の際に使用した銅活字は、或は文祿の役に朝鮮で鹵獲したものであるとも傳へられてゐる。

これよりさき、朝廷には後陽成天皇がおはしまして、書籍を梓行なさらうとする叡慮が篤くあらせられて、つひに文祿二年侍臣に命じて、『古文孝經』を開版せしめられたが、これが我國に於ける木活字版の嚆矢である。『錦繡段』、『勸學文』、『日本書紀神代卷』、『職原鈔』、『五妃曲』等の諸版は、やがて引きつゞいて世に公にされた。世に所謂慶長勅版といふ

のは、これである。後、水尾天皇もまた先帝の叡旨を奉じて、銅活字を鑄造して、『皇宋事實類苑』を開版せしめられた。

印刷事業の發達は實に近世文運の母である。勅版と駿河版との外に、幾多の私版も出ではじめた。文祿五年の『補註蒙求』を始めとし、『易林節用集』及び直江本と稱されるものが世に出た。直江本とは上杉家の老臣直江山城守兼續が慶長十一年に開版した『六臣註文選』である。恐らくこれが我が國に於ける銅活字の權輿であらう。されど、國文學史上に於いて特筆すべきものは、角倉素庵の出版に係る角倉本ではあるまいか。『源氏物語』も『古今和歌集』も、これによつて世に知られるに至つたのである。慶長十三年に成つた『伊勢物語』の如きは、繪畫を挿みまた平假名を使用した點に於いて、書籍刊行上に一新紀元を劃して居る。近世の俗文學書は大方これが體裁を模倣して世に出たものであるともいひ得られる。しかも繪畫の挿入及び漢字の振假名は、活字版をしてまた舊時の整版に歸らしめた。角倉本が實にそれである。

かくて活字版であると整版であるとを問はず、印刷術は月に進んで、刊行書は日を逐つて續出した。漢籍には訓點を附して刊行したものが出来、また『源氏物語』や『大和物語』の古文學には幾多の註釋書が出来た。特に『徒然草』に至つては、廣く世に行はれた結

果、その註釋書甚だ多く、貞享五年に出來た『徒然草諸抄大成』に記するところだけでも、すでに十三種に及んでゐる。

我が文學がいかでか此の氣運に乗ぜないでをらう。その最も早くこれが潮流に棹したものが漢學である。この時林羅山は早くも『四書新註』を講じたが、その門に入るものは日一日と多きを加へた。是に於いてか博士舟橋秀賢は大に之を罵つて、古來勅許がなければ朝紳でも書を講ずる事は出來ないものを、處士の身でありながら新説を講ずるとは何事ぞ、斷じて許し難いものであるといひ、且つこれを家康に訴へた。その心事の頑陋な事は驚かさざるを得ない。然るに家康は「人各々好む所に従ふべきのみ、何をか傷むべき」といつて、却て舟橋の言を斥けてしまつた。

家康の此の言は、やがて因襲隨逐の弊を打破すべき曉鐘であつた。自由研究の精神は此に動きはじめ、まづ束縛の弱き箇所を破り、漸を以て廣く全般に及んだ。漢學は搢紳の手から處士にうつり、ついで俳諧は地下に榮え、小説もまた其の趨勢を逐ふに至つたのである。和歌は最も遅れたといふものゝ、亦革新のほのめきは隨處に見ることを得られた。

されど幕府は未だ創業の際である、物質的文明の發達を計つて日もなほ足らない時

である。文學もまたその發展の基礎を定めるがための準備に忙殺された時である。知識の普及は焦眉の急であつて、その期する所は一世を裨益し童蒙を啓發するにあつて、未だ純文學として見るに足るべきものを出すに至らなかつたのである。

かくて啓蒙時代の文學には、未だ特筆するに足るものがない。されど、そこには希望も見え、また期待すべき事も少なくはなかつた。その社會上の武弁粗暴の風俗は、また質素簡樸の風習と相まつて文學の上にも簡樸の風の却て稱すべきものがあり、隨つてその間にはまた一點清新の掬すべきものがないでもない。決して幼稚であるとのみいひ棄て、また實用的教訓的であるといふ一言の下に却け去るべきものではない。

第二章 漢學の興起

江戸時代の漢學は藤原惺窩を得て始めてその發展の途に就いたのである。惺窩二二二一—二二七九は名を肅字を歛夫といふ、惺窩はその號である。中納言定家が十二世の孫である。幼少の頃から京都相國寺に入つて佛典を學び、俊秀を以て稱せられた。後に宋儒の書を読んで、その性理の說に服し、遂に佛教の仁種を絶し、義理を滅するに憚らず還俗して儒に歸し、更に研鑽の爲に文祿二年明に渡らうとして途中風濤を薩摩山川港に避け、偶然にも學僧桂庵が遣した和點の經書を得て歸り、こゝに朱子の學說を主唱した。然しながら、未だ全く朱子一箇の見をのみ奉ぜず、なほ陸象山、王陽明をも容れ、また神道とも調和しようとした。その高節清操は一代の宗とするに足り、諸侯の就いて教を聽くもの多く、家康の如きは夙に信賴すること篤く、特に師禮を以て遇した。荻生徂徠は極めて狹量の人で容易に人に許さなかつた者であるが、しかも惺窩を稱して、「王仁氏ありて民始めて字を知り、吉備氏ありて經藝始めて傳はり、菅原氏ありて文史誦すべく、惺窩氏ありて後人々言へば則ち天を稱し聖を語る。斯の四君子は世々學宮

に尸祝すと雖も可なり。」と言つた。惺窩の文集は二種ある、一は林羅山及び菅得菴の選、一は孫爲經の編纂で徳川光圀の校閲したものである。その他『文章達徳録』『同綱領』『千代もと草』等、その識見を知るべきものがある。

惺窩の門人の數多ある中で世にかくれないものを數へると、林羅山、那波活所、堀杏菴、菅得菴は四天王の稱がある。松永昌三、吉田素菴、三宅寄齋等も、またその門から出たものである。その中でも最も名聲の藉甚したのは林羅山であつた。

羅山二二四三—二三一七名は信勝字は子信、後に薙髮して道春といふ、羅山はその號である。博覽多識に加ふるに豪俊の資、程朱の學は此の人を得て始めて確乎たる基礎を固め得たのである。十八歳の時すでに宋學を京に講じ、二十二歳の時惺窩の門に入つた。惺窩が羅山を見ることは頗る懇切で、稱して林秀才といひ、その蘊蓄を傾け盡して指導をした。後、惺窩の推薦で幕府の儒官となつた。時は慶長十一年(二二六六)かれが二十四歳の時である。爾來、羅山は力を盡して佛を排し、老莊を駁し、陸王を斥け、耶蘇教を難じ、一意専心に朱子學の擴張を計つた。かくて、その朱子學に忠なるの餘りには、時に褊狹の見に陥つて、その論旨に矛盾を來す事も少くなかつた。羅山の子の春勝といひ、孫の鳳岡名は信篤といつたが、共にまた父祖の後を嗣いで儒官となり、それ

い。これに反して兼山は事業家爲政家である。兼山(二二六五—二三二三)の名は止といひ字は良繼兼山はその號である。土佐侯に仕へて要路に居り、置兵の施設、藥草の栽培、蜜蜂の飼養、津呂の岬の開墾等、大いに國政に資する所が多くあつた。兼山はまた人を長崎に遣はし、舶載の書を購求し、或は更に翻譯して、後進の便を計つた事が頗る夥しかつた。闇齋が宋學に入つたのも實に兼山の懇懇によつたのである。

〔闇齋(二二七八—二三四二)に至つては名聲藉甚、南學中の一鴻儒を以て推すべきもの。その名は嘉字は敬義、闇齋は號である。京の人で、初は妙心寺の徒弟となつて佛典を修めたが、不羈の行動は衆僧の忌む所となつた。偶、土佐侯の公子に知られ、土佐の吸江寺に移つて學んだ。されど、三省及び兼山と交はるに至り、程朱の説の信すべきを知り、谷時中に師事するに及び、遂に著髮して儒に歸した。佛教の非を論じた先儒の言を輯録した『關異』はその際の著であつた。かくて後、江戸に、京都に帷を垂れて講説し、從學の徒數千を以て數へられる程で、中にも井上侯、會津侯の如き禮を厚くして師事した。著書に『經名考』、『仁說問答』、『文會筆錄』、『垂加文集正續』等があり、全集に『垂加草全集』及び『同附錄』がある。全集は門人の植田成章が編輯したものである。]

闇齋は凌厲の性質で敢て尊貴にも下らず、弟子に對しては嚴肅殆ど君臣に於けるが

如きものがあつた。彼は學究の態度をとらず、寧ろ力行を事とした。その朱子學を信奉することは甚だ厚かつたが、なほ能く國家を中心とする獨立思想を失はなかつた。

嘗て弟子に問、ゆていふ「孔子大將となり、孟子副將となりて我が國に迫り來らば如何すべき。」と。衆に敢て答へる者がない。そこで闇齋は弟子を諭して、「その時には我等は干戈を手にして國家を守護せん、これこそ孔孟の道なれ。」といつたといはれてゐる。舉世漢土に心酔した時に當つて此の言をなすは、實に一草見を具へたものといはねばならぬ。これぞ即ちその晩年に於いて、吉川惟足ユヅク及び出口延住ノブヅメの神道を傳へ、更に渾融して一種の神道垂加流を創めた所以である。その著『風水草』は神道説を述べた書である。

門人の玉木葦齋は師の説を祖述して『玉篋集』、『原根錄』等を著した。その他、板垣信直、梨木祐之等も之を傳へた。そしてまた、その朱學の説は淺見綱齋、佐藤直方、三宅尙齋等が之を傳へた。後に綱齋の門人三宅觀瀾は水戸侯に仕へて、修史事業に參與した。是に於いて、水戸學の基く所を顧みて、闇齋の學風の影響の大なるに驚かざるを得ぬ。

以上説く所はすべて朱子學派隆盛の概略であるが、こゝに一學派があつて之に對抗しようとしたものがある。近江聖人の稱ある中江藤樹が率ゐる陽明學派が即ちそれである。この學は明の王陽明(一一三二—一一八八)の主張したもので、朱子學の理氣二

元に對して理氣合一を説き、朱子の博識に對して德行を主とした。故に此の派の人に多く事功また力行の觀るべき者があつた。

藤樹(二二六八一—二三〇八)名は原、字は惟命といひ、藤樹は號である。祖父吉長は米子侯の臣、父吉次は近江小川村の農。藤樹は祖父と共に伊豫大洲に米子侯に仕へて居つたが、祖父の歿するに及んで、母に孝養を盡すがために私に祿を捨て、近江に歸つた。かくて定省の暇に徒を集めて程朱の學説を講じた。然るに、寛永十七年(一三〇〇)『玉龍溪語録』を得て稍心動く所があつたが、後四年に始めて『陽明全書』を讀破して大いに啓發する所あり、本心を存養するを以て務とした。これは彼れが三十七歳の時である。藤樹はたゞ論談講説を事とせず、なほ實踐躬行を主とした。母に對して至孝であつた事はいはずもあれ、温恭謙退一言一行をも苟くせず、至誠人を動かし、よく郷黨を導き、徳風今に流行するものがある。嘗て京師に赴く道すがら、轎中に心學を説いたが、轎夫もその言に感動して流涕やまなかつたといはれてゐる。その人を薫する大むねこの類であつた。當時稱して近江聖人といつたのも尤な事である。藤樹の歿するや、その家を祠堂として徳本堂といひ、常に祭祀を絶たなかつた。世に謂ふ所の藤樹書院は即ちこれである。藤樹の著書に『翁問答』、『鑑草』、『孝經啓蒙』、『論語郷黨翼傳』等があり、後人の纂

輯したものに『藤樹遺稿』、『藤樹先生全書』及び『藤樹全書』がある。

藤樹の門下で最も世に顯はれたものは熊澤蕃山(二二七九—二三五一)である。その名は良繼、字は了介といひ、備前の池田光政侯の臣で、學を藤樹に受けて之を事功に擧げ、一國の帷幄に參して大いに治政に力めた。後に致仕して京師に出でたが、從つて學ぶ者が日に多くなつたので、幕府に忌まれて遂に吉野に退隱した。晩年に松平信之侯に從つて古河に居つたが、封事を幕府に上つて罪を得、禁錮の厄にあひ、幽囚のうちに歿した。その著書は多くある中に『集義和書』及び『同外書』は重要なものである。

之を要するに、當期の儒者は啓蒙の人、講説の人、或は事功の人で、未だ純詩文學の發達を期する事が出来なかつた。然しながら、惺窩には猶ほ吟詠の誦すべきものがあり、羅山に至つては文辭の更に圓熟したものがあつた。その詩速吟、一夕によく百五十の次韻を得て、韓客を驚かしたといふ。されど、風韻の高逸なものはないのは、人格の然らしめる所であらうか。春齋は韓使の來朝ごとに贈答したものに、詩は一萬首、文は二千篇を數へたといはれてゐる。當時更に詩風の高いものを求めるならば、石川丈山と僧元政とを推さねばならぬ。

丈山(二二四三—二三三二)名は四、丈山はその字である。もと武門の出で、元和元年大

阪の役に東軍に属したが、獨り竊に營を抜け出でて敵を斬つた爲に、軍令に觸れて黜けられた。後、比叡山の麓一乗寺村に隱居し、詩僊堂にあつて、翰墨に親んで自ら娛んで居た。堂は漢晉より唐宋に至る間の詩人三十六人の像を寫し、またその人々の詩を一首づつ録して、楣間に掲げたので、かく名づけたのである。丈山はすべて交友を絶ち、塵外に超在して、交はる者としては、たゞ林羅山、堀杏菴、野士包、僧元政等があるのみであつた。丈山の詩を蒐めたものを『覆醬集』といふ中に、「白扇倒懸東海天」といへる一首の如きは、最も人口に膾炙してゐるものの一である。朝鮮の權式は稱して日東の李杜となし、荻生徂徠も亦東方の詩杰と稱した。されど、その詩は意氣の横溢を以てまされるのみで、閑雅の致に至つては殆ど之を缺いて居る。

僧元政(二二八三—二二三八)はもと江州彦根の井伊侯の臣、出家して京都深草の瑞光寺に隱棲したもので、故に時人は深草の元政と呼んでゐた。博覽彙記で學は和漢に互り、詞章を善くし、また茶法にも通じた。かつて明の歸化人陳元贊と方外の交があつた。二人の唱和したものは、之を收めて『元々唱和集』及び『聖風唱和』に載せてあるが、一世を擧げて之を喧傳推賞した。その他、元政の詩風は『谷口山詩集』、『草山集』に於て見る事が出来るが、天真流露の掬すべきものがある。これ一に陸放翁の高足袁中郎に私淑した

故であつて、元政が袁中郎のあるを知つたのは、陳元贊の教によるのであつた。元政はまた和歌にも長じて、その歌はすべて閑寂の趣に富んで居る。歌集を『草山和歌集』とす。

第三章 和歌革新の曙光

慶長十九年(二二七四)三月、冷泉爲滿が駿府に於いて家康に謁見した時、家康は之に『古今和歌集』の秘説を聴かうと思ひ、まづその事を羅山にはかつた。その時羅山は答へて、堂上の説は未だ知らぬけれど、大方は聴く甲斐もないものであらうといつたが、果して爲滿の所説は耳を傾くるに足らなかつた。越えて七月、爲滿が『古今』の講筵に際し、家康は爲滿に人麿の事蹟を尋ねた。爲滿の答は、人麿は神仙である、神祕で傳へるものがないといふことであつた。折柄羅山も座にあつたが、之を詰問して、『萬葉集』の中に人麿といふのが四人ある、柿本人麿は歌仙とはいへ、古書に就いて研究したならば必ずしも知り難いものではあるまい。斷じて神仙とのみいつて敬して遠ざくべきものではないといつた。この事實は最も適切に江戸時代の初期に於ける歌道の状態を示し、歌道の革新が如何に漢學の發達に遅れてゐたかを説明するものではなからうか。歌道の進歩のかやうに遅々として進まなかつたのは、一に歌道の傳授所謂古今傳授といふ一大難關があつたからである。その古今傳授は依然として堂上方の掌握する所であつた。

太宰春臺は少時和歌に志して、その詠四百首に及んだが、一度古今傳授といふ難關に想到して、堂上方の威壓を知るや、急に詩に轉じた。これは爲滿よりは遙に後年の事とはいひながら、なほ未だ和歌の權力のいづれに存してゐたかを推知し得られる。

されど、堂上家には流石にその人がないではなかつた。その中にも、名聲の世に隠れなかつたのは細川幽齋であつた。幽齋(二一九二—二二七〇)は名を藤孝といひ、三淵晴貞の子で、出でて細川元常の養嗣子となつた。織田信長に屬したが、本能寺の變あるに及んで、悲歎の極剃髮して幽齋また玄旨と稱した。天正十五年(二二四七)豊臣秀吉に九州の行營に従つた時、『九州道』の記があり、十八年小田原の陣には、『東國陣道記』の著がある。幽齋は夙に三條西實枝から古今傳授を承け、二條師範家の命脈を繋ぐべき責任を有して居た。慶長五年(二二六〇)石田三成のために居城なる丹後の田邊城を包圍せらるゝや、後陽成天皇深く古今傳授の絶えん事を慨かせられ、勅旨を以て兵を解かしめられた。その後、高野山に隱遁したが、家康に召されて京都に住し、歌學を諸公卿に授けた。その家集を『業妙集』といふが、題號は後水尾院の下賜に係るといふ事である。風調は堂上師範家の舊套を脱せず、清新の趣を缺いて居る。歌論の書には、家臣佐方宗佐が手録した『幽齋聞書』といふのがあり、また門人鳥丸光廣が筆録した『耳底記』がある。而も是

等の所説は三條西實枝の言か、さなくば『詠歌大概』『八雲御抄』等を祖述したに過ぎない。然しながら、當時の歌界は、この人を得て始めて光彩を發する事が出来たのである。

その門下には秀才が少くなかつた。中院通勝(二二一八—二二七〇)は天正十六年幽齋から古今傳授を承け、また『源氏物語』註釋書中の有数の書たる『眠江入楚』を作つた。その子の通村以下子孫も相嗣いで世々和歌の家を以て聞えて居る。烏丸光廣(二二三九—二二九八)は學識の高いので、師の推薦を得て幕府の歌學顧問となつた。歌學の書は傳はらないけれど、和歌の家集に『黄葉和歌集』といふのがある。光廣は歌學の才ばかりでなく、文才にも富み、『仁勢物語』また『竹齋草紙』の戲書も、その著と傳へられて居る。その孫資慶には『秀葉和歌集』の著があり、歌學の意見としては資慶卿口授がある。資慶の子光雄に、また光雄卿口授がある。

幽齋門下の中で一異彩を放つたものは、松永貞徳(二二三〇—二三一二)である。その傳は之を貞門の俳諧の章に譲る。この人は地下人の身であつて、早く幽齋の教を受けて歌學に通じ、詠歌に巧みであつたが、その最も力を盡したのは、新道を民間に傳へる事であつた。歌學の著に『歌林雜話』一名『貞徳戴恩記』といふのがあるが、幽齋實枝、里村紹巴等の行狀逸事を記述して居る。『歌林樸樾』は古歌の詞句を註したもので、當時至便

のものと稱せられた。その和歌の家集を『逍遊集』といふ。

貞徳の學風は、その門下に加藤盤齋(二二八一—二三三四)を起して、『三部抄増註』『新古今増抄』等數種の註釋書を著はさしめた。北村季吟もまた其の門下で、盤齋よりも傑出するものであつた。

季吟(二二八四—二三六五)は全力を注いで古典の註釋をした。『源氏物語湖月抄』『土佐日記抄』『枕草紙春曙抄』『伊勢物語拾穗抄』等、いづれも平易親切で、後進を益したところが少くない。されど師説の祖述の外には、創見の見るべきものがない。註釋に努力したのは、和歌をよくするにはまづ古語を知らねばならぬ、古語を知つて後に和歌の精神に接することが出来ると思つたからであつた。しかも季吟自らは遂に和歌の精神に接する事が出来なかつた。その詠には情熱もなく、氣骨もなく、たゞ功を歌學に收め得たのみである。

もしそれ、この頃に當つて眞情熱烈の詠を求めらば、それは後水尾院(二二五六—二三四〇)の『鴈集』であらうか。院は英邁の御性質であつたが、その幕府に對する憤慨の情は自ら迸つて、高風三唱に値するものがあつたのである。決して尋常一様の花鳥風月の詠ではない。『鴈集』以外諸臣の打聽の歌を輯集したものに『後水尾院御集』

がある。また延寶中諸臣に勅して二十一代集及び諸家の歌集から類題の歌一萬二千餘首を選ばしめられたものがある。これを『類題和歌集』といふ。爾後、歌集は之に倣つて相踵いで世に行はれた。

かゝる中にも革新の氣運は催され、その第一聲は木下長嘯子によつて放たれた。長嘯子(二二三〇—二三一〇)の名は勝俊といひ、豊臣秀吉の外族で、小早川秀秋の兄であつた。關原の役の起るに及んで、去就決せず、柔懦の行は一世の嘲笑を招いたが、亂後京都東山の麓靈山に隱栖し、長嘯子天哉翁と號して、風雅の月日を送つた。長嘯子は元來和歌の道を幽齋に學んだもの、されど遂に堂上家の拘束に堪へないで、

敷島の道すぐにも踏みわけん人はよもぎのあさましの世や

と絶叫するに至つた。家集を『舉白集』といひ、清新の風、自由の詞堂上派歌人の毀謗の中心となり、非難の聲が高くあがつた。尋舊坊の『難舉白集』の如きはその一例である。されどまた、辯疏の言をなす『舉白心評』があつて、『難舉白集』を難じ、かねて長嘯子退隱の事實を稱揚して居る。

長嘯子の後を遂つて出でた者は下河邊長流(二二八四—二三四六)である。長流は大和宇陀の人、中年から大阪の南波村に住して讀書に閑日月を送つて居た。學は和漢に

互り、しかも強記であつて、『萬葉集』『古今集』『伊勢物語』の如きは、一字一句をも誤らずに暗記して居つた。性質が狷介で、意に適はない時は來訪者にも會見せず、富豪の招聘にも應じなかつた。たゞ最も親交を重ねた者は僧契沖だけである。契沖がかつて、

我を知る人は君のみ君を知る人もあまたはあらじとぞ思ふ

といひおくつたのでも、その一斑を推すことが出来る。徳川光圀は彼れの名聲を傳聞して、幣を厚くして招いたが、遂に従はなかつた。そこで、光圀は更に紙筆を賜つて、『萬葉集』の註釋を乞はれたが、それすらも意の向くまゝに執筆したので、業を果さずに歿した。後に契沖がその志をついで之を完成した。長流の著に『歌仙抄』『葦水和歌集』『續歌林良材』『林葉累塵集』等がある。

長流は長嘯子の主張を追慕し、その堂上家師範家に對する態度に擬せようとした。實に『林葉累塵集』の編も、『葦水和歌集』の撰も、その意は堂上家歌人の固陋の弊風を破り、これが廓清を計らうとするにあつた。即ちまづ和歌を堂上家より奪つて在野の土に移さうとするのであつた。

世につかさ位ある人は我ともがらにあらざれば、その人々の歌に於いては稀にも之をのすることなし。たゞ位なき武夫の八十氏人を始めとして、あるは市に荷ふ

商人あるは山田に作る農夫あるは木の下岩の上にありか定めぬ桑門の言の葉に、
さるべき一ふしこもれるをば之を尋ね求む。

これ『累塵集』の自序に於いて記した所である。故に集中には堂上派の詠を斥け、主として武家以下庶人の詠を収め載せてゐる。長流は堂上派の歌風を觀て、これ末流の混濁したるに比すべきもの、今は宜しく源流の清きを汲むべきであるといつて、力めて上代の和歌を研究した。その『萬葉』『古今』を誦んじて、片言をも錯らなかつたのも、これに資せんがためであつた。然らば、その詠は如何果して、『萬葉』素朴の調を再現し得たらうか。その家集『晩花和歌集』また『自撰晩花集』に就いて之を見るに、大方

つひにわが着ても歸らぬ唐ころも、立田やなにのふる郷の山

下野やなす野にしげる篠をとりて東男子は矢にぞはぐなる

の如く、たゞ『古今』『伊勢』の風貌を髣髴せしむるのである。之を堂上派に比して、纔に清新を許し得るに過ぎない。長流の識見は蓋し遠く時流を抜いた、しかも歌人たるの天稟あるにあらず、その詠は期する所になはなかつたのである。然しながら、功を歌界覺醒の第一歩に占めたといふ一事は、遂に忘るべきものでない。

要するに、この期に於いては、和歌は未だ覺醒の域に達せず、たゞ革新の曙光のほのめ

きを認むるに過ぎなかつた。眞の革新は長流の友契沖を得て始めて期待されるのであつた。また戸田茂睡の呼號に負ふ所も多かつた。茂睡の『梨木集』は元祿十一年の撰に係るもの、すなはち之を次期に繋ぐべきである。

第四章 貞門と談林の俳諧

天文十八年二二〇九荒木田守武卒し、二十二年山崎宗鑑歿した。さらぬだに卑陋猥雑に陥り果てた俳諧道は、今やこゝにその指導者を失つて、遂に世に捨てられようとする悲境に陥つた。松永貞徳が世に出でて之が振興の衝に當り、所謂中興の主を以て推されたのは此の時である。その俳風を古風の俳諧と稱し、また貞門の俳諧ともいふ。

貞徳は宗鑑の歿後十八年元龜二年二二三一京に生れた。父を永種といひ、連歌師宗養について連歌を學んだ人で、また里村紹巴と同門の友であつた。貞徳はまた若い時分から歌學を九條玖山公、細川幽齋等に學び、父と紹巴とについて兼ねてまた連歌をも究めた。早くから連歌の執筆などをしたが、人々が連歌の席の後でいひ捨ての俳諧などをするのを聞き覺えて、いつか之に心を専らにするに至つた。傳へいふ所によると、慶長三年八月、前攝政久前公から俳諧一道の宗匠花咲翁といふ名を與へられたといふ事である。これは二十七歳の時である。これによつて見れば、當時かれは已に堂々たる一家をなしてゐたものと思はれる。かくてその風は漸く世を風靡し、寛永十年二二九

三門人松江重頼が『犬子集』を編した時には諸國から集つた句は千五百に及んだといふ。貞徳は多才多能の人で、往くとして可ならざるはない。随つてその著述も少くない。俳諧に關するものには『新增犬筑波集』一名『淀川』がある。宗鑑の『犬筑波集』に批評を加へたものである。また『油糟』といふのもある。『犬筑波集』の前句に自家の附句を加へたものである。これによつて、宗鑑と貞徳との俳風の異同を知る事が出来る。

霞の衣すそはぬれけり

宗鑑

さほ姫の春立ちながら尿をして

おほぶくやのみ過す神達

霞の衣すそはぬれけり

貞徳

天人やあまくだるらし春の海

大ぶくを座敷うちへやこぼすらし

春立てふむ雪汁やあがるらん

げに貞徳は宗鑑宗武の滑稽を取り奇智を取つた。しかも連歌の用語の優美且つ雅致あるものを取つた。貞徳はもと和歌の人である。されば當時の歌人の生命たる言懸け、縁語は、また貞徳が慣用手段の一つであつた。故に、その滑稽も畢竟言語上の遊戯、洒落

に過ぎない。されば未だ守武宗鑑を距ることが遠くなかつた。然し貞徳の俳諧史上の功績はこの方面ではなくて他に存する俳諧『御傘』の著がそれである。格を連歌にとつて俳諧の法式を定め、天下の俳人をして其の歸趨する所を知らしめた。貞徳はいふ、俳言を用ひよ、即ち和歌連歌の用語以外の語を用ひよと。またいふ、一句に理あれよと。その意は、一句々に獨立の意義を有せよ、前句附句相倚りて始めて何の意なるかを知るが如きものたる勿れといふにある。またいふ前附同意を禁ぜよと、俳諧の變化をば多種多様ならしめんとの義である。貞徳の説く所はたゞに俳諧の上のみ止らず、一般文藝の上に貢獻する所も實に多大であつた。

併しながら貞徳が歌學に通達せる事が遂に俳諧の法式をば煩瑣に陥らしめた嫌がないでもない。蓋し貞徳は俳諧を以て面白き事あるとき興に乗じていひ出し、人をも娯ばしめ、われも樂しむ道であるとはいつて居るものゝ、その深意は人を驅つて歌道に入らしめようとするのである。俳諧を學ぶには『徒然草』『三代和歌集』を参考とせよ、進んで中古の物語をも研究せよといつたのも、その謂である。これやがて貞門を自縛し、萎靡はざるに至らせた所以である。

されば貞門の俳風は天下を靡かした。貞徳が八十三歳の長壽を以て歿した承應二年(二三一三)の頃には門葉諸國に遍く、明曆三年(二三一七)の刊行に係る高瀬梅盛撰の『鶴集』には句數九千九百九十九、作者千二百九十四人の多數を載せ、その作者も西は九州東は奥羽の邊陲にまでも及んでゐる。これ實に貞門に幾多の秀才が輩出して師説を繼承し、その普及に努力したからである。その中で所謂貞門の七俳仙といはれるのが、最も世に聞えてゐる。

七俳仙とは誰か。『俳諧噺草』の著者野々口立圃(二二五九—二三二九)俳才縱横遠く師の上に出で、また『犬子集』を編して貞門の興隆に盡力した松江重頼(二二六七—二三四〇)、「これはこれとはばかり花の吉野山」と詠じ、その調が後の蕪風に近いことを以て知られた安原貞室(二二七〇—二三三三)、守武の『獨吟千句』に擬して千句を聯ねた鶴冠井令徳(二二四九—二三三九)貞徳の殊寵を得てその秘傳を受けたと稱せられる山本西武(二二六六—二三三八)幕府から連歌道を以て招聘の命をうけた高瀬梅盛(二二七三—二三六六)博學洽聞師の歌學説をついで古文學の註釋に努力した北村季吟が、即ちこれである。その他、江戸には齋藤徳元があつて、はじめて江戸に於いて俳書を刊行した。『俳諧初心抄』といふのがそれである。かゝる状態にある以上は、直に貞門は衰微に傾いたといふ事は出来ぬ。然しながら、時勢の推移は遂に大阪に於いて一新體を起さしめた。談

林風の俳諧と呼ぶのが、すなはちそれである。

四〇

談林とは何ぞ。田代松意が『談林十百韻』の序によれば、もと松意等同人が俳諧會合の筈を以て俳諧談林と稱したのに始まり、やがて佛教の講學所の稱たる梅檀林に附會して檀林とも書くのであるといふ。その祖は即ち西山宗因である。宗因(二二六六―二三四二)は名を豊一といひ、肥前八代の城主加藤正方の家臣で、正方と共に連歌を里村昌琢に學び、寛永九年(二二九二)正方が奥州に貶せられるに及んで、致仕して京都に來り、剃髮して宗因と改め、連教師となつた。たゞ、當時は貞門の俳風が盛んな時で、宗因も亦その風體を學んだが、寛永十三年松江重頼に相會してから俳諧に精進するに至つた。併しながら、京都は到底宗因が羽翼を張るべき地ではなかつた。そこで、宗因は京都を去つて大阪に移り、連歌の判者、天滿天神の月並の宗匠となり、梅翁と號した。貞門の缺點を看破し、旗幟を新にして、滑稽を標榜したのは此の頃からである。その著に『千句集』『釋教百韵』『五百韵』『天滿千句』『阿蘭陀丸一番船』等がある。宗因は法式を墨守しなかつた。俳言は必ずしも用ゐなければならぬものではない、また前附も同意も時に應じては用ゐることを妨げぬといふのが、かれの主張であつた。かゝる主張の中にも、殊に自由の詩趣と不羈の用語とを專にしたのは發句であつた。

申し申し六藏が申し女郎花

花むしあ一見せばやと存じ候

頭巾寒うして北に峨々たる青山なし

白露や無分別なるおきどころ

かくて、その句は俳門が言語上の遊戯をもつて足れりとするのとは、稍趣を異にしてゐる。人生を詠じ、自然を吟じて、ともかくも其の機微を穿たうとするに近い所のあつたことや、古句の運用、漢語俗語を使用してその語彙を豊富にならしめたことの如きは、貞門に比して遙に傑出せる點である。

宗因の門下の多士儕々たる中に、大阪には井原西鶴が居り、縦横の俳才を以て、大矢數とて、一日に千六百句また四千句を詠じて世人を驚かした。京都には菅野谷高政が居り、新調の鼓吹に力めた。江戸には田代松意が居り、延寶三年に宗因の東下を請ひて談林十百韵を連ね、爾後頻りに斯道の發展に就いて計畫する所があつた。

談林の勢がかやうに盛なるにつれて、貞門との争端を生ずるに至つた。延寶六年(二二三八)高政が『俳諧中庸姿』を出して頻りに貞門の法式を罵ると、貞門の中島隨流は『破邪顯正』を出して之に對へた。岡西惟中の『破邪顯正返答』が出づると、隨流はまた『猿とり

もち』を出して之に拮抗した。この論争は延いて元祿にまで及んだ。元祿五年(二三五二)隨流が『貞徳年代記』を出すと、弄松閣只丸は『只搦』を著はして之を罵倒した。其等の論旨の如何はともかくもあれ、創作に於いては、貞門は遂に談林の敵ではなかつた。勝利は談林の掌中に歸して、その俳風は一世を率ゐた。併しながら、談林の末流に至つては、粗放の修辭、難澁の風調、殆ど見るに足る者が無い。天和貞亨の交には、その蕪雜を厭つて、竊に他を欲する者も少くなかつた。加之、談林には早晩衰微すべき他の理由が存して居た。即ち此の派は確たる法式を有せず、多少の才氣ある者は何人も直に判者たる事が出来、随つて點者の數益、多きを加へ、その收入愈、減少して、はては富有の子弟に附して、幫間然たる者とならざるを得なかつたことである。宗因の歿後程なく、西鶴が他の方面に轉じたのも、この間の消息を傳へるものではなからうか。談林の末流の墮落し行くも、之を救ふの策がなかつたのである。

第五章 古淨瑠璃

淨瑠璃はもと『平家物語』を基とし、これに歌祭文等を撮合して作りなした叙事詩をいふのである。その歌祭文といふのは、謡曲、舞曲、また佛説を題目とした一種の謡物なる説經及び山伏の祭文から一轉化したものであつた。淨瑠璃の濫觴は、室町時代の末葉に於いて、『平家物語』に擬して作つた『淨瑠璃十二段草子』であるといはれてゐる。

『十二段草子』は源義經がその名を舍那王丸と呼んだ頃、鞍馬を出でて奥州に下らうとする途中、三河國矢矧の宿の長者の家に宿を取り、長者の女の淨瑠璃姫といふものに相逢ふ事を、十二段に綴つたものである。その十二段に分けたのは、即ち『平家物語』の十二卷に倣つたものであるといはれてゐる。作者は織田信長に仕へた小野阿通であるといふ説があるが、信すべき證據があるのではない。

天文九年(二二〇〇)の守武千句の中に

いとゞだに座頭まがひの杖つきの

淨瑠璃かたれともしびのあと

今宵はや時はうし若ふけはて

とあるを見、また『宗長日記』享祿四年(一一九一)の條に、駿河國宇津の山の旅宿にて小座頭の歌淨瑠璃を歌つたのを聞く記事があるので見ると、淨瑠璃の名稱は遠く天文享祿の頃から存し、且又その流行は遠く邊鄙の地にも及んでゐた事が知られる。

そのはじめに於いては、淨瑠璃を語るには、只扇を叩いて拍手を取るのみであつた。そしてその餘風は遠き後までも陸奥淨瑠璃として残つてゐた。然るに、永祿中であらうか、三絃が傳來し、文祿の頃に至つて石村檢校が本手破手の詞を定め、更に慶長の頃澤村檢校が琵琶の平家に倣つて之を淨瑠璃に合せて弾くに至つた。この頃から詞章の如何を問はず、三絃に合せて語るものをすべて淨瑠璃といひ、やがて洽くこの音曲の名とはなつた。この三絃を使用した一事が、その詞章をして韻文の方面に大いに進歩せしめる所のあつた事は、忘るべからざることである。

されど、當時はなほ詞章には未だ一の獨立したものでなく、舞の本の中の『那須與市』『四國落』『元服會我』『小袖會我』『夜討會我』『和田酒盛』『景清』『大織冠』『伏見常盤』『堀川夜討』『敦盛』『滿仲』『高館』『百合若』『大臣』『八島』『入鹿』の如き、或は御伽草子の『御曹子』『島渡』『文正草子』『酒頭童子』『鉢かつぎ』『物臭太郎』『子敦盛』の如き、或はそのまゝに或は多少の改削修正

を施したものを取つて之を語つた。殊に『梵天國』の如きは御伽草子に出でたものであるが、貞享元祿に及んでもなほ淨瑠璃の祝言には必ず之を語つたのである。

澤住の門人に目貫屋長三郎といふ者があつた。攝津の西宮の傀儡師引田某を語らひ、淨瑠璃に合せて人形を操る事を始めた。これが操芝居の濫觴である。はじめ散文的であつた詞章が、さきに三絃を得て韻文的となり、今また操を加へて戲曲的に發達する事を得た。この新文藝は大いに時好に投じ、女流にも六字南無右衛門左門よし高等出でて、四條河原に芝居を興行し、能狂言と駢馳し、その太夫は受領し、禁闕にまでも召される者があるに至つた。されど、未だ作者を以て稱すべきものなく、從來の如く舞曲御伽草子を反覆するのなれば、太夫等がその時々、に自分々々で作り出したものばかりであつた。『都めぐり』は長三郎の作といはれ、『阿彌陀の胸割』は南無右衛門の作といはれてゐる。

この新興の文藝は、新興の地である江戸に據つて、はじめて特殊の發達をなすべきものであつた。澤住の門人で出藍の聞えのあつた薩摩淨雲は、寛永の頃京から江戸に下り、中橋廣小路に於いて一流を語りはじめた。十二段を折半して六段となしたのは、その創意である。これより從來の新曲たる短い端淨瑠璃は、いつかその影を收むるに至

つた。淨雲の語る詞章は、多く北條宮内の筆に成つた。慥むらくはその正本が今は傳はらない。たゞ當時の状況から推して、素朴の風體であつたことを知り得るのみである。その門に四天王の稱ある杉山丹後、櫻井丹波、薩摩長門、虎屋源太夫の名手があつた。櫻井丹波は初名を和泉太夫といつた。その語るところのものは江戸の剛健素朴の風尙に伴つて、節も振りも勇壯を極めたものであつた。二尺ばかりの鐵の棒で拍手を取りながら語つた。『親丹波毎日岩をたゞきわり』といふ附合の句に、その狀を髣髴する事が出来る。その子の和泉太夫も、また毎日人形の損失を厭はず、人形の首をひき抜き、また打割り打ちつぶして語つた。これ等の語る所は、荒唐無稽の英雄談で、その多くは坂田金時の子の金平（金平）といふ勇武絶倫の武士を主人公とし、之に配するに渡邊綱の子の武綱を以てし、それ等が謀叛人又は變化怪異のものを取り、拉ぐ武勇の行爲を叙述したものである。されば、その正本を金平（金平）本といひ、その節を金平（金平）節といふ。『金平化粧問答』、『金平千人切』、『金平法問答』、『金平黒能』等はその傑作である。その作は千篇一律で、清趣の優しい所がなく、誇張の跡の人をして厭はしめるものがあつた。金平本の作者は岡清兵衛重俊であつた。清兵衛は詞才があり、また戦記の類を殆ど皆がら暗記せるので、古事の引用に得意であつたといはれてゐる。貞享四年（二三四七）の頃には、已に病歿し

てゐたやうである。四宮彌四郎もまたその執筆者の一人であつた。實に當時、豪放の關東氣質は、なほよくこの金平本に血を躍らし、群衆相争つて鼠木戸におし寄せて來た。元祖市川團十郎の荒事は、金平節を模したもので、また金平牛旁、金平糊等はその武張つたことや或は強味のあることから取つた稱であつた。この趨勢は、杉山丹後の子肥前掾の門弟江戸半太夫の江戸節（江戸節）、また半太夫の門弟十寸見河東（十寸見河東）の河東節（河東節）など、優柔暢美の曲節を起す時までつゞいてゐた。

保守的な京都は、かくも江戸の淨瑠璃が隆盛を來せる間にも、なほ微々として振はなかつたが、虎屋源太夫が寛文元年（二三二一）に江戸から上るに及んで、こゝにその流行を見るに至つた。大阪も之につれて漸く盛になつた。源太夫の弟子に井上播磨掾（井上播磨掾）、二二九二―二三四五があつた。通稱を市郎兵衛といひ、京の人で、音聲が大きくて、謡曲に通じ、江戸萬歳の節から悟入して一流を立て、寛文中大阪に下つた。『頼義北國落』、『源氏筑紫合戦』、『頼光跡目論』等に喝采を博し、大阪人でその口眞似をせぬ者はなかつたといふ。正本には文辭の未だしい所もあるが、天稟の音聲でよくそれを補ふことが出來た。さきに淨雲によつて六段物となつた淨瑠璃は、この人に至つて五段物となつた。或はいふ、之は能の番組に擬したものであると。近松門左衛門もまたこの人のために、『天鼓』

『甲賀三郎』『頼朝七騎落』等の諸作をした。

源太夫の門に伊勢島宮内があつた。その宮内の門弟に宇治加賀掾二二九五―二三七一があつた。初名は嘉太夫といひ、當時流行の播磨節と謡曲の節とを折衷し和けて、一流を立てた。即ち加賀節、また嘉太夫節といふのがそれである。その織巧婉美の曲は大いに京の嗜好に投合した。評する者はいふよはくたよくとして美しいと。加賀掾はまた浄瑠璃正本を刊行し、始めて節譜を附けて上梓した。近松門左衛門も加賀掾のために『徒然草』主馬判官盛久『當流小栗判官』世繼曾我の作をした。この三人は實に元祿期浄瑠璃隆盛の基礎を開いたものといふべきである。

延寶五年(二三三七)正月加賀掾が脇として抱へたものに五郎兵衛といふものがあつた。『西行物語』の二段目藤澤入道夜盜の修羅物を語つたが、生得の大音で、甲乙相揃ひ、場内に響かぬ隈もないので、聴衆の歡喜は大方でなかつた。この五郎兵衛こそは後に名高い義太夫であつた。義太夫はかくして立ち、近松門左衛門も已に立つた。幼稚であつた我が浄瑠璃の作、たゞ叙景道行にのみ稍苦心の跡を認むべき拙劣の正本は、こゝに漸くその趣を改めようとした。場所の變化時間の變化の急激で不自然であつた浄瑠璃は、近松門左衛門を得て始めてその面目を改めて、見るべきものがあるに至つた。故

に近松を以て一時期を劃し、その以前の作を古浄瑠璃と總稱するのである。

第六章 假名草子

泰平の時に際して、しかも印刷術は發達した。室町時代以降筐底に漕められた幾多の草稿は、かくて相踵いで世に出でた。御伽草子の類は大概その初期に於いて刊行せられた。正保三年(二三〇六)には『十二段草子』、明暦元年(一三二五)には『文正草子』及び『舞の草子』、萬治元年(二三一八)には『鉢かつぎ』の刊行を見ることが出来た。新なる小説もこれにつれて世に起るに至つた。こゝに小説とはいふものゝ、純文學としては未だ許し難い所のあるもので、たゞ趣向と構造とを小説に假りた教訓史實地理弘法傳道の書に過ぎない。

その中にて最初に現はれたのは軍書の類であつた。興亡成敗の跡は未だ新たであつて、しかも當時に於いて多大の興味を催すべき織豊時代の史實は、追憶回顧のために又毀譽褒貶のために、幾人かの筆に載せられた。小瀬甫庵の『太閤記』、太田一牛の『信長記』の如きは、その一例である。これ等は皆史實に忠ならうとするよりは、寧ろ世間の耳目を娛ますべき巷説を取り、想像を以て潤飾したものである。たゞし、純粹の實歴談

には石田三成の臣山田志摩の女の見聞を録した『おあん物語』、田中章徳といふものゝ祖母で豊臣氏に仕へたおきくといふものゝ見聞を録した『おきく物語』があつた。

地理に關するものには、中川喜雲の『京わらべ』がある。烏丸光廣の著と稱せられる『竹齋草紙』、淺井了意の『東海道名所記』、江戸名所記』がある。風土景物を叙すると共に、輕妙なる滑稽をも交へてゐる。殊に『東海道名所記』には、樂阿彌陀佛といふ一僧と、その道連の旅の男とを設けて、諧謔の言辭行動をなさしめてゐる。蓋し當時に於ける巧妙な脚色であつたらう。これらが後の『膝栗毛』等に於ける粉本となつたことは注意せねばならぬ。

滑稽を主とした作の中で最も優れてゐるものは、安樂庵策傳の『醒睡笑』である。四十餘類の下に、各數條の笑話を載せてゐる。これが即ち後の滑稽本の鼻祖ともいふべきものである。著者の自序及び板倉重宗の奥書によれば、徳川時代に於ける小説刊行の嚆矢であると思はれる。その他『枕草紙』に擬した『當世尤の草紙』がある、また『伊勢物語』に倣つて記した『仁勢物語』がある。『仁勢物語』は烏丸光廣の作といはれてゐるが詳かでない。

そして當期の小説の珍とすべきものは、『イソップ物語の翻譯』、『伊曾保物語』である。こ

の書は頗る世に行はれたものと見えて、慶長活字本以來數種の板本がある。しかも鎖國の方針は遂にこの書をして西歐文學移植の絶筆とせざるを得なかつた。翻譯者の氏名も翻譯の由来も不明であるのは遺憾に堪へぬ。またこの物語の影響の點も尋ねるよしがない。たゞ爲永春水の『繪入教訓近道』の中にこれに取材したと思はれるものがあるのみである。

もしそれ一部の小説たる趣向を具へたものを求めんか、それは物語草子の脉をひいたものである。その著しきものに『恨之介草子』があり、『藻屑物語』があり、『薄雪物語』があり、『堀江物語』がある。『恨之介草子』は葛のうらみの介が人目の關の繁さにおのが思ひ人雪の前に逢ひ得ぬことを悲んで悶死したのを雪の前が傳へ聞いて自刃した顛末を脚色したものである。『藻屑物語』は男色の意地を旨としたもので、井原西鶴の『本朝若風俗』卷三の四と同一取材に出でてゐる。『薄雪物語』は園部左衛門が薄雪姫と契をこめた事、また姫の死後左衛門がその菩提を弔ふために佛門に入つた顛末を記してゐる。結構は平板であるが、記述の體裁は男女往復の書簡を以てしたのを特色とする。この書の世にもはやされた事は非常なもので、刊行本の種類も多く、また模倣の書も少なからず出た。『新薄雪物語』、『錦木』、『小夜衣』、『雲の梯』などはそれである。『堀江物語』は月

若丸が悪龍に助けられて、父の讐を報い得た顛末を叙述してゐる。これ等は皆その行文こそは優美な中古文の脉を逐つて絢爛ではあるが、結構の平板なものと情熱の缺乏してゐるのとは、甚だ飽きたらない。されど、これ等を以て當時に於ける小説の特有なものといふ事は出来ない。實に當期小説壇の代表者を以て目すべきものは假名草子である。

假名草子は最もよく時好に投じ、また風潮に觸れたものである。若しその内容取材を以ていへば、教訓また佛法宣傳の書である。併しながら啓蒙を目的とするこの書も、さすが文辭の優美なことをつとめて、趣味の煥發を求めたので、とにかくに小説として取扱ふ事が出来る。その名稱は、學問の無い當時の民衆をして讀み易からしめるやうに、通俗平易な假名文體をもつて書いてあるから、附けられたのである。

この先驅をなしたものは、寛永十九年(一三〇二)刊行の『可笑記』である。作者は如備子といつて、本名を湯津式部といひ、武士のなれの果といはれてゐる。この書は幾多の短篇の説話を集めたものであるが、その中には筆鋒の鋭利な諷刺を含んでゐる。この種類の書は、もとより他にもないではないが、後の作者は多くこれに模範を取つたので、近世戯作の祖と稱せられるに至つた。

之について、鈴木正三の『因果物語』と『一人比丘尼』とがある。正三(二二四九—二三一五)はもと三河の武士であつたが、世を遁れて著述に隠れた人である。『因果物語』は因果の纏綿たることを示すために、世上の事實めかして數多の事例を作爲し彙集したものである。『一人比丘尼』は夫を失つた一女性がなげきの餘りに、夫の戦歿した跡を尋ねて、はしなくも骸骨の歌を聞き、また一庵に同棲してゐた女が死ぬる間もなくその遺骸が變り行く様を見て、眞に世の無常を悟り、孤庵の老尼のもとに走り入つて念佛修行をするに至つた事を記したものである。作者の意は蓋し人生の如夢如幻の觀念を示すといふことにあつたと思はれる。

これ等よりもやゝ後れて、『誰が身の上』、『小さかづき』が出た。これは共に山岡元隣の著である。元隣(二二九一—二三三二)は伊勢の商賈であつたが、篤學の人で、夙に儒學の研鑽に心を盡し、また北村季吟の門に入つて國學を學び、殆どその堂に入つた。著述は甚だ多いが、大方は古文學の註釋書である。たゞ文學的作物としては、前記の二書があるばかりである。この二書はいづれも隨筆的な古いものであるが、その世にもてはやされるに至つたのは、主として寓意によつてである。即ち神儒佛の三教の一致を説ける點にある。そして『誰が身の上』には『可笑記』に私淑した痕跡が歴然として見え

てゐる。『小さかづき』では、その巧妙な比喻談を取るべきであらう。

この種の諸作家中で、更に高く群を抜いたものは、淺井了意である。されど、その傳は詳かにする事が出来ぬ。たゞ諸國を流浪した一事は、『東海道名所記』の著述を以て推すに足りる。了意は別號を松雲また飄水子といつた。元祿四年に八十歳前後で歿したものと思はれる。その著述の多い中にも、啓蒙書としては『孝行物語』、『堪忍記』、『本朝女鑑』、『大和二十四孝』、『新語國』、『法林樵談』等が聞えてゐる。また隨筆體のものに、『浮世物語』といふのがある。その體裁が已に小説を以て許し得るものとすれば、それは一篇連關の方便として、主人公浮世坊といふ架空の人物を設けた點にある。即ち人生のあらゆる境遇を経験し盡した一侏儒が諸大名の間を遊説して、滑稽諧謔の中に諷刺し教訓する有様を記述してゐる。要は世人が運命の定つてゐることを知らず、逸樂に耽けることの愚を諭すにあるやうである。蓋し、その趣味の存する所は、同じ人の作である『曾呂利狂歌咄』と同一のものである。

なほ了意が小説壇上に於いて重きをなす所以を考へると、それは『御伽婢子』の著があるからである。この書は『剪燈新話』中の幾條を翻譯して、また交へるに同一様の怪談巷説を以てしたものである。その旨とする所は、勸懲の舊套に陥つてゐるとはいふもの

の趣向の巧妙であるのと行文の流暢であるのとを以て、俗に文學的作物として推稱することが出来るのである。されば、當時世人の喝采を博すること一とほりではなく、随つてこの種類の書物の流行を來し、種々の模倣書を出し、その風は元祿以後にも及んでゐる。かの『新御伽婢子』『古今百物語』『諸國新百物語』『拾遺御伽婢子』などは、かくして出たのである。文化文政度に於ける京傳馬琴の怪談小説の如きすら、こゝに起つたかの如き形跡が認められるのである。また明治の落語家として有名であつた圓朝の十八番の一であつた『牡丹燈籠』も實はこの書の一話説を取つたのである。

啓蒙時代に於ける小説の叙述は、これを以て終らねばならぬ。要するに、教訓に累を及ぼされた傾向小説は、決して小説の上乗なものではなかつた。就中、内容の蕪雜を極めた事は、厭忌すべき極である。しかし、これが浮世草子を起さしめたことに思ひ及ぶならば、その陳吳たるの功は忘れることが出来ない。

第二期 元祿時代

第一章 時代の概観

啓蒙の時代はすでに終つて、一般知識の普及は漸くその實を擧げる事が出来た。これを典籍の上に見れば、幾多の講義物が出て、字彙が出て、節用集の類が相踵いで出でた。黄楊版は早くも用ゐられて、袖珍本も行はれた。通俗平易を以て聞えてゐる宇都宮遜菴の著書も、標注家を以て知られてゐる松下見林、毛利貞齋、黒川道秋等の著書も、少なからず世に流布された。かくの如く、いまや文藝は發展の素地をなし得た。しかも上にはまた文藝の保護者その人をも得た。その第一に指を屈すべきは將軍綱吉で、將軍は自ら毫を揮つて大成殿の扁額をしるし、また林鳳岡をしてその道服を脱せしめて儒者の體面を保たしめた。されば諸侯にも文教に力を致すものが相ついで輩出した。その中にも特筆しなければならぬのは水戸侯徳川光圀である。

光圀は家康が基を開いた當代初期の學術を大成したものともしはうか。修史局即ち後の所謂彰考館を設けて、『大日本史』及び『禮儀類典』『扶桑拾葉集』等を編纂した。その

『大日本史』を編するや、標榜するに大義名分の闡明を以てしたのである。かの神功皇后を皇妃傳に加へ、弘文天皇を本紀に收め、また南朝を正統とした所謂三大特色の如き、傳承を事とした世に、しかも幕府の近親たる地位にあつて之を立言したのは、實にその卓絶せる識見に驚かざるを得ぬ。光圀が『大日本史』編纂の動機は、林春齋が著した『本朝通鑑』の中に、我が皇室の始祖は吳の太伯の後であると記したのを見て、大いに發憤したのであるといはれてゐる。實にこれは國民的自覺といはうか。我が國體の尊重すべき所以を知つた國民の自覺は、やがて後の國學を興起せしめ、また元祿文學のすべてに互つて踰如たるものがあらしめたのである。

光圀はまた『萬葉集』が高閑に束ねられて顧られないことを慨き、下河邊長流に囑し、ついで契沖に託して、その注解を作らしめた。『萬葉集代匠記』はかくして成つたのである。が、和歌界に於けるこの一現象は、たま／＼以て元祿文學の最も重きをなす特色の一を示してゐる。習慣の打破、束縛の脱却、その創意的で建設的な事が、即ちこれである。これを事例に於いてすれば、伊藤仁齋、疾生、徂徠の漢學に於ける、契沖、荷田春滿の國文學に於ける、松尾芭蕉の俳諧に於ける、近松門左衛門の戯曲に於ける、井原西鶴の浮世草子に於ける、皆その顯著なるものである。

元祿文學の他の特色は、平民文學といふ事である。前期の文藝は過去の殘影を以て京都に現はれた。今や移つて大阪のものとなつた。江戸は八百八町たゞ、整頓の緒に就きそめたに過ぎぬが、大阪は商業の中心地、富有商賈の集れる所、周防山口と交通して夙にその趣味性を涵養せる堺町民の移住せる地、わが平民文學はこの地を得て大いに發達するに至つた。されど、大阪のみか、元祿の世は遂に町人の世である。誰か紀文奈良茂の豪奢、淀屋の分限に驚かぬ人があらう。清水の舞臺に石川六兵衛の妻が難波屋十右衛門の妻と衣装競をしたる、嵐山に緒形光琳が蒔繪をした竹の皮を惜しげもなく河水に投じたる、すべて肝つぶれる業ではないか。入生の享樂はこの時に極つたともいふべきものがあつた。それ唯現世であつた、これ唯今様であつた、それ唯浮世であつた。浮世繪、浮世草紙などはいふまでもない、楊枝にも、囊にも、笠にも、藏にも、住家にも、皆浮世の名を冠せない者はなかつた。されば平民文學たる元祿文學は、現代謳歌の表現にして、現實讚美の象徴であつたのである。

その謳歌の聲が三ヶ津に溢れたことはいふまでもない。中にもその焦點たるものは二つ、その一は劇場で、他の一は遊廓である。

京に坂田藤十郎、芳澤あやめが出でて優婉の藝をもつて鳴り、江戸に市川團十郎、

つて剛健の技を以て聞えてゐる。定紋うつた櫓の美々しさ、かの四條橋畔の莖張屋掛は昨日の夢となつた。操座もまた極度の發達をなして、これに對峙してゐる。形のひく手さす手に、人は恍然として酔心地の中に在つたのである。もし元祿文學にして、近松門左衛門を缺いたならば、その寂寥はどんなであつたらう。

京の島原、江戸の吉原、大阪の新町は、今や宛然たる喜見城を現出してゐる。抑、武士道は意志の鍊磨から來るものである。その峻烈秋霜のやうな制裁の下を暫し遁れて思ふがまゝに嬉遊する事が出来るのは遊廓である。京の女郎に江戸の張を持たせ、長崎の衣裳着せて、大阪の揚屋に遊びたしとは、誰しも口にす所であつた。何時も何處も變らぬ誠こそ戀の道、されば當代文藝の源泉は、大方こゝから發したのである。

しかもなほこれ等粹客が、或は大門を打ちたる、或は蕎麥を買ひ占めたる、或は幾百の小さい蟹に金泥で比翼紋を描いたなど、豪興自ら喜んで他に負けじ劣らじとする廓の懸引き、即ち通客の意氣地や、また千金を顧みず權貴に屈せざる傾城の意氣地や、これ等元祿世相の一特徴であつて、また當代文藝を活躍せしめる所以であつた。(げに元祿文學は同じ平民文學とはいふものゝ、天明のそれに比べると、かの柔弱はなくて能く豪健に、かの技巧に陥るの弊もなく、能く眞情を吐露してゐる。優美のうちにまた雄偉の

面影をやどしてゐるのは、實にこの平民の氣魄の然らしめる所である。

(元祿文學の他の特色は、感情の横溢といふ點にある。元祿は感情の世であつた、少くとも平民文學に現はれてゐるものは感情偏重の世相であつた。否、さらに將軍綱吉の初年と晩年とに於ける政事の激變を思ひ見ると、遂にこれ感情の時代であつた。こゝに吾等は尙武と勤儉とまた法律道徳とを以てせる禁壓の力にも屈せず、撓まざる民衆の生々活躍の聲を聞くことが出来た。自由の行動をとる人生の喜悅の聲を聞くことが出来た。されど、その聲は感情の解放によつてのみ放たれたのであつた。それも、教養僅に八十年知識の活動のこれに伴はなかつた故とはいへ、眞に遺憾の極であつた。されば、予輩は元祿文學によつて人生の光明に接し、歡樂に酔ふものゝ、その歡樂の極といふ哀傷の如きは、深い自省を缺く當代の人の到底與り知らないこと、まして人生の矛盾、社會裏面の疑問の如きは、すべてこれ風馬牛であつた。西鶴の如きは、おもふに筆おのづと、その一端に觸れたに過ぎなかつたのであらう。

これを要するに當代の文學は、活動的な點に於いて、積極的な點に於いて、創意的な點に於いて、その眞價を見るべきである。されば、各自個性を展開して、幾多の新様を見た。その弊は知識の未だしくて、隨つて内省の淺薄な點、深刻を缺いてゐる點に存してゐる。

されど、この弊はひとり當代の缺陷であるばかりではなく、我が國の文學全般に互つてあるものである事を記憶せねばならぬ。

第二章 漢學の隆盛

五代將軍綱吉は儒狂をもつて目せられた程の好學の君であつた。されば、學者の優遇登庸はいふまでもない、自ら諸侯を召して殿閣に經書を講ずる事も少くなかつた。上の好むところ下これより甚しきはなく、諸侯も亦これに倣ふものが多くあつた。折りから明客朱舜水と陳元贊とがたま／＼來朝歸化した。舜水字は之瑜、明の衰微するに及んで我邦に投じたのであるが、やがて水戸侯に聘せられて賓師の禮をもつて遇せられた。その文集二十八卷は皆水戸侯光圀父子の編輯に成つたもの、しかも光圀は毎卷署名をして門人といつてゐるが、世にいみじき美譽であると稱せられた。元贊字は義都、尾張侯に徵されてその學政に當り、後また京でも、江戸でも、諸名士にして風雅の交を結んだものが多くあつた。中にも僧元政と唱和した『元々唱和集』は夙に世に傳唱せられた。上にも既にいふ如く、元政が袁中郎に私淑するに至つたのは、蓋し元贊が誘導した故であつたらう。かくの如くにして、二客の流風餘韻は、暗にまた我が元祿に於ける漢文學界の一勢力をなしたのである。

この時林家には鳳岡二二〇四―二三九二があつた。鳳岡は名を信勝といひ、羅山の孫で、春齋の子である。これよりさき、羅山は私に書院を忍岡シノガタに建てて弘文館と名づけ、孔子及び十哲の像を安置して奉祀して居つたが元祿四年に至り鳳岡は幕命を奉じて之を湯島ユヅリに移して官祀とした。同年鳳岡はまた命をうけて髪を蓄へ、大學頭タムケとなり、名をも信篤と改めた。これ鳳岡がかつて、儒は人の道人の外に儒の道なし、さるを制外の徒となすは非理であると主張した言の嘉納されたのである。惺窩羅山の徒にして、なほ圓顛であつた積弊は、こゝに於いて始めて息むことが出来た。鳳岡は銳意「武徳大成記」を修め、服忌令を定めるなど、官府の纂輯に力める所があつた。されど、林家は學權の壟斷をこれ事として、敢て新研鑽に入るものではなかつた。故に談論の旺盛はこれを他に求めねばならぬ。

一代の通儒に木下順菴二二八一―二三五八があつた。順菴は名を貞幹といひ、號は錦里、また慎齋とも呼んだ。講書堂下の出で、朱學を信する事が篤かつたが、なほ進んで古註をも併取した。或は順菴は常に「十三經註疏」を手にし、また自ら之を熟讀するにあらずば經に通ぜりとなさずといつたといはれてゐる。加賀侯に聘せられて江戸の邸に居り、後また幕府に召されて修史にたづさはつた。順菴はひとり識見の高いばかり

でなく、辭藻にも富んでゐる。「錦里文集」は以てその醇正の風格を知る事が出来る。韓人の對馬に至るものは、必ず順菴の文を求めたといふ事である。かの倨傲な荻生徂徠でさへもなほ、錦里先生出でて扶桑の詩皆唐なりといつた程である。

その門下には俊才の士が甚だ多かつた。桃李門に満つといはれた。その中にも、五先生十哲二妙の稱を得たものがあつて、何れも實用の才である。柴野栗山のいふやう、「盛なるかな錦里先生の人を得たるや、大政に參與するは源君美在中、室直清師禮、外國に應對するは雨森東伯陽、松浦儀禎卿、文章には祇園瑜伯玉、西山順健甫、南部景衡、博該には神原玄輔、翊皆瑰奇絶倫の材なり。その他、岡島達の至性、岡田文之の謹厚、堀山輔の志操、向井三省の氣節、石原學魯の靜退、また得易からざるものにして、師禮の經術在中の典刑、實に曠世の偉器一代の通儒なり。夫れかくの如き數子の資を以て終身先生の訓を奉遵服膺して、敢て一辭も異同あらず、先生の徳と學とを想ふべきなり。」と。

木門キドの正統を繼承したものは室直清師禮二三一八―二三九四である。直清は鳩巢と號し、師禮はその字である。はじめ加賀侯に仕官したが、後に同門の新井白石の推舉によつて幕府の儒となり、八代將軍吉宗の優遇をうけた。「六論衍義大意」「五倫五常名義」は皆その命を奉じて撰じたものである。享保中、徂徠が古文辭學を唱へて一世を風

靡した際、これと相對峙して學界の重鎮であつたのは、京の伊藤東涯と江戸の鳩巢とがあるのみであつた。鳩巢は堅く朱學を信じた。されば當時異説の紛々として起るを見て、これを憤慨し、みづからも「かやうの中に、翁が道德もなく材力にも拙き身をもて是を支へんとするは、誠に大厦の一木といふべし。」といひ奮つて名教の維持につとめた。その詩に至つては、よく醇正の風を保ち、中にも五言排律は豪健を以て擬せられた。その文集に前篇十四卷後篇二十卷補遺十一卷がある。この外にまた『駿臺雜話』の著がある。蓋し和漢混和文の上乗であらう。それに就いては次節に説くこととする。

當時貝原益軒(二二九〇—二三七四)もまた博洽をもつて聞えてゐた。益軒は名を篤信といひ、字は子誠、筑前の人で、黒田侯の臣である。はじめは陸王の學を好み、やがて朱陸兼用の意もあつたが、寛文五年三十六歳で、陳獻章が『學蔀通辨』を讀むに及んで、陸氏の非を悟り、盡くその舊學を棄てて朱學に専心し、『近思錄備考』『小學備考』の著述をなした。されど、正徳四年(二三七四)八十五歳の時、『大疑錄』を著はし、朱子の學説に對する疑惑を録し、朱子の理氣二元論を斥け、理氣合一を主張した。さはいへ、益軒の偉大な點は、訓蒙にあり、社會教育にあつた。諄々と説いて倦まず、淺俗また避けざる態度にあつた。所謂十訓の書は、この意味に於いて和漢混和の文體を取つてゐる。

かくの如く、順菴は新古註の併取を志し、益軒も亦朱學に對して疑を懐くとはいへ、なほ朱子學の統を繼承するものである。而して、その朱子學の堅壘に堂々として迫つたものは、實に伊藤仁齋と荻生徂徠との二人である。

さはれ、仁齋を説くに先だつて、まづ山鹿素行に就いて一言しなければならぬ。素行は(二二八二—二三四五)名を高興といひ、字は子敬、因山と號し、軒を素行と號した。陸奥國會津の人。寛文六年『聖教要録』を著はし、漢唐宋明の諸説を論破して、古學の取るべきことを唱へ、はては舊師家である林家の學風にも反抗しようとする色があつた。この學説の衝突により、遂に素行は播州赤穂に配流されることとなつた。されど、それは寧ろ素行が兵學者として名聲の世に藉甚し、その門に弟子の禮を取るものゝ無慮二千人の多數に及んだので、はしなくも幕府の忌憚に觸れたからであつた。素行はもと兵學に精通してゐるが故に、儒教を以て武士道を闡明し、前人未發の言を『要録』中に載せてゐる。これ實に『山鹿語類』と共に武士道の聖典と稱すべきものである。かの大石義雄の義舉も、素行が赤穂に於ける謫居の十年間と、その以前に賓師として仕へた年數とを合せて、前後十九年の久しきに互る、薰陶の結果、その流風餘韻の發して此處に至らしめたのである。かくの如くにして、素行は古學の祖を以て目すべきものであるが、その説く

ところは未だ断片の論述に過ぎない。その一系統を具し、一學派を樹立したのは、伊藤仁齋を以て嚆矢とする。

仁齋二二八七—二三六五名は維禎字は源佐、京の人である。處士を以て居り生涯仕へず、堀河に古義堂を開いて子弟を教養した。はじめ「李延年問答」を熟讀した餘りに思を性理の學に潛めたが、後にその説が孔孟の眞面目を去ることの遠きを疑ひ、大いに考究に力め、遂に一系統を具へた一學説を成して古學の一派を開いた。まづ朱子學説の理氣二元論を破して一元論を取り、宇宙は一元氣の活動から成つてゐる、即ち宇宙の間死なく、靜なく、惡なくして、生あり、動あり、善ありといつて、今の所謂活動主義に近い言をなした。さらに道を以て仁義とし、禮智は仁義より出づるものとした。この四者に就いては、宋儒の之を性となすを排し、性は人毎に異なるけれども、道はすべてに互つて通ずる人は孟子の所謂四端を具へてゐる故に、之を擴充すれば即ち仁義禮智に至ると説いた。仁齋はまた「大學」は後人の著、「中庸」は後人の筆の攙入せる者が多いといつて、遠ざけ、言辭を極めて「論語」を揚げ、「孟子」は「論語」を敷衍せるものであるとし、まづ「論語」「孟子」を讀破して天地間の理を知り、後「五經」によつてその應用を領すべし、これ實に直に孔孟に接する所以であると説いた。或は仁齋の説を以て剽竊に出づるとする人もあ

るが、その人となり知らぬものゝ見である。仁齋は寛仁溫和の君子、人に接するには一に至誠を以てした。母の病に侍すること三年、諸侯の招聘にも應じないで、一日も奉養を廢することがなかつた。その生徒に教へるにも實踐躬行を以てし、許氏月旦評に擬して、その人物性行を評して之を獎勵するなど、専ら徳行を琢磨するに力めた。隨つて深く意を辭藻に致さしめる事がなかつた。されば、みづからの文章に於いても、正大見るに足るものもあるけれど、大方は平穩に過ぎ、時にはまた和臭に堪へぬものもある。されど仁齋はまた譯文會を創めた事もあつた。古文を假名交り文に書き改め、更にそれを原文に復して、文辭の鍊磨に資するのであつた。

その子の東涯二二三〇—二三九六名は長胤、字は原藏といつて、父の所説を守つて銳意堀河古義堂の經營に當つた。かくて、爾後子孫世々家學を繼承して、敢て家聲を失墜することがなかつた。されば、太宰春臺、かつて師の荻生徂徠と對比して、「仁齋に及ぶべからざるもの三あり、學師傳に由らざる一なり、仕へざる二なり、子東涯ある三なり、物先生此に一あらず」といつた。

東涯は文辭の巧妙を以て實に父を凌ぐものがある。されど、溫厚の資性は遂に氣魄乏しく、たゞ文に疵のないのを以て足れりとせざるを得なかつた。その著に「紹述先生

詩文集『紹述遺稿』がある。また初學の便をはかつた『用字格』和漢の熟語を収録した『名物六帖』文字音訓の異同を記した『操觚字訣』等の著がある。これらは皆行文の資料たるべきものである。

〔京學が仁齋東涯を得てまさに盛んな時江戸では荻生徂徠があつて古文辭を唱へ始めた。徂徠二三二六―二三八八名は雙松、字は茂卿徂徠はその號である。その社號を藍園といふのは萱葉町に住居した故の稱である。その姓は物部であるので自ら修めて物氏といつた。はじめは兵學を以て柳澤吉保に仕官した。徂徠かつて仁齋が説く所の古學を駁し『藍園隨筆』を著はして朱學の回護に力め、大いにその名を知られた。後、その學風は一變して古學を唱道し朱學を斥けたが、しかもなほ常に仁齋に挑むところがあつた。蓋し學說の異同によるといふよりは、寧ろ個人としての憎惡が然らしめたのであつた。徂徠が仁齋の説に服して書を贈つた時、如何なる故か、仁齋は答へなかつた。傲岸なこと徂徠の如きものが、如何でか之に堪へ得られやう。爾來徂徠は機ある毎に、つねに仁齋に對つて攻撃の矢を放つた。』辨道『辨名』論語徵』は、即ち仁齋の『童子問』論孟字義』論語古義』に對抗しようがための著述であつた。もとより徂徠は溫厚篤實な經學者ではない、縦横辯難の論客である。故に滿腔の霸氣到るところに論争を

欠

欠

承けたけれど、修養の點に於いては寧ろ仁齋に私淑して居つたのである。服部南郭は前者の覇、その徒甚だ多く、次期に於いて詩文の精彩を發揮した。

第三章 和漢混和文

漢學は幕初以來徳川氏歴代の獎勵を蒙り、我が國未曾有の隆盛を極めた。されども漢學は専門家でないものが容易に解せらるべきものではない、故に文教を弘布する必要に迫られた漢學者は、いしくも一種の特殊の國文を草してその需に應じた。國語に漢語を混和せる文章が即ちこれである。文法上多少の疵瑕を有してゐるに拘らず、亦好箇の國文である。縦横自在な筆勢、跌宕雅健な文體を以て、深遠な學理を闡明するところ、往々國學者の散漫に失した文章に優つてゐることが多い。

一體和漢混和文とは、文學の特殊の種類ではなくて、文體の上から見た名稱である。されば前時代に於ける軍記物も亦一種の和漢混和文に相違ない、されどかの軍記物にあつては、ひたすら修辭の絢爛なことを求めて、對句疊句を重ね、範を四六俳體文に取つてゐる。こゝに所謂和漢混和文はさうではない。その骨法は多く唐宋の文體に求めて、必ずしも詞藻の美を要めなかつた。

前期に於ける林羅山の著書の中に、『大學和字鈔』の如き混和文體の述作があつた。そ

の文章はいまだ生硬を免れなかつたが、彼の道春點と唱ふる『四書』の訓點が、後に出でた後藤點または一齋點に比して、遂に國語の格に合つてゐるのを見ても、如何に國文に通じてゐたかを知る事が出来る。

熊澤蕃山の著書三十餘種、悉く混和文を以て記してゐる。『集義和書』『集義外書』等を主要なものとする。蕃山の文章は暢達にして明瞭である、しかし惜いかな平板無味である。

伊藤東涯の『鄒魯大旨』『訓幼字義』『學問關鍵』『唐官抄』いづれも和漢混和文を以て記述したものであるが、『輜軒小錄』『秉燭談』が混和體の文章として最も勝れてゐる。

『東涯』と時を同じうした荻生徂徠は、もとより文辭に富んでゐた。『政談』『南留別志』『蘭園談餘』等は混和文を以て記したものである。その高足たる太宰春臺の著『經濟錄』『獨語』も亦混和文を以て書かれてゐる。

その他學者雲の如く起り、儒學の隆盛眞に空前絶後を極め、古學者あり、朱子學者あり、陽明學者あり、政治家あり、操觚者あり、著書に、編述に、仁義道德を叙し、經世治民を説いたので、隨つて和漢混和文も亦大いに發達した。その中で、貝原益軒、新井白石、室鳩巢の三人は最も傳ふべきものがある。

貝原益軒については前章すでに之を叙した。その著書一百餘種、皆實用を主として平易な和漢混和文を用ゐ、婦女童幼にも理解し易からしめた。さればその文は謹嚴にして懇切であるものゝ、また冗漫重複に失する嫌がないでもない。『初學訓』『童子訓』『大和俗訓』『養生訓』『家道訓』『樂訓』『君子訓』『武訓』『文訓』『五常訓』の所謂十訓の如きは、處世の道を説いて周到を極めてゐることは、さながら老人が兒孫を捉へて諄々と説く趣がある。益軒の所説は、個人の徳性涵養の必要をいふと共に、完全な人格の養成を旨としてゐる。教育者として偉大な益軒は、家庭教育を重んじ、世務の通曉を主眼とし、悟性の開發を主とし、思想の獨立を求めた。その識のいかに當代思潮の東道たるべきものあつたかゞ知られる。益軒はまた暇さへあれば名所舊跡を探つたが、足跡を印しないところは殆どなかつた。『大和廻り』『京廻り』『岐蘇路の記』等は雅醇を以て聞えてゐる。『日本釋名』と題せる書は、わが國語の性質根源を説明したもの、もとより牽強附會の辯が多いとはいへ、實にわが國に於ける言語學に關する書典の先驅であつた。

新井白石(二三一七—二三八五)通稱は勘解由、初の名は瓊、後に君美と改めた。幼にして岐嶷聰敏、長するに及んで大志を抱いた。曰はく、大丈夫生きて封侯を得ずんば、死して將に閻羅王となるべしと。順菴の門に入つて經史を攻究し、努力衆に超えた。天和

二年古河の堀田侯に仕へたが、志を得ずして退き、元祿六年徳川家宣がまだ甲斐にある時に徴されて儒員となり、その將軍職を拜するに及び隨つて幕府に入り、累進して從五位下筑後守となつた。その待遇は一侍講たるに止まらず、内外政務の顧問として獻策するところが多くあつた。朝鮮の來聘使接見の際に、彼我の名分を正せる、惡貨鑄造の改善について勘定奉行萩原重秀を彈劾せる、さては林信篤と將軍家繼の服喪の事を論じたる、いづれも世に名高いものである。將軍吉宗が統を承けるに及んで、致仕して老を明窓淨几の間に養ひ享保十年に卒した。

白石は博學洽聞であつて、識見甚だ高く、その施すところは専ら實用の方面であつた。木門に居た時から、師の問に答へて、天下有用の學をなすといつてゐた。嘗て儒の本義を説いていふやう、

聖人の道は人道なれば、人間日用常行の外に出でず。人とは何ぞ。君臣父子夫婦兄弟朋友より天子卿大夫士庶人なり。道とは何ぞ。孝悌忠信禮義廉耻理世安民等の道なり。智仁勇といふも、仁義禮智といふも、語かはりて實は同じ。この外に出でて道を行はば、廣大微妙を極むといふとも、徒らに無用の論にして、實行といふべからず。子思孟子より以下、いまだ此の弊を免れ難し。

と。されば白石の所説は飽くまで功利實用にして、心性理氣の説の如き、宗教の如き、形而上の考察は、全く無用の論として看過したのである。故に、白石は政治家として、外交家として、また理財家司法家として、よく幕府の諮詢に應じて、一々之を『六經』に質し、史乘に照らして應答した。さはれ、文學上に於ける白石の偉績は、なほこれにも勝つてゐるものがあつた。著書實に二百餘種、巧妙な和漢混和文を以て記述したものが多し。年の若い時分には俳諧にもたづさはつて、桐蔭といふ俳號があつた。詩は盛唐詩人の風格を摹して、詩趣溫雅にして華麗、頗る清新の趣に富んでゐる。江村北海は彼れの詩を評して、「天受敏妙、ひとり藝苑に歩ず、錦心繡腸、咳唾珠を成し、嚶語韵に諧ふものといふべし、これを異邦の古詩人中に索むるも、未だ多く得べからざるものなり。」といつた。その著書の中國文學史上に於いて重要な位置を占めるものは、『藩翰譜』『讀史餘論』『古史通』『折焚く柴の記』である。

『藩翰譜』は白石が甲府にあつた時、君命を奉じて撰んだもの、慶長五年から延寶八年に至る八十餘年間に於ける列侯三百三十七家の史實を詳述してゐる。その文章は遒勁で明瞭、よく錯綜した事實を從横に描寫してゐる。川田蕪江は嘗て『藩翰譜』を評して、叙事の明晰奇雋、司馬遷の壘を摩すと言つた。これわが國に於ける叙事文の上乗にし

て、また混和文の至粹といふべきである。

『讀史餘論』は正徳二年春夏の交、將軍家宣の命によつて、わが國古今の治亂興廢を論じた講本である。文致は『藩翰譜』よりも劣つてゐるが、論旨燃犀能く史論の體を得てゐる。或はいふ、北畠親房の『神皇正統記』を模するところが多いと。されど、わが國の大勢九變して武家の世となり、武家の世又五變して徳川氏に及ぶ所以を論明したるは、治亂興廢の機微に通ずるものでなくては、到底なし能はぬことである。『藩翰譜』に於いて、その史眼を具する事を認めたものは、この書を見るに及んで、いよく、その感を深くせざるを得ない。頼山陽が『日本外史』を著はした時、その所論に於ては、『讀史餘論』を参考したことの少くなかつたのも、畢竟これが爲であつたらう。

白石の史眼の高いことは更に『古史通』があつて之を證してゐる。『古史通』は語源を本として我が古史の事實を闡明したものである。「神代を知るには、まづ古語に通ぜよ、しかも史實は『古事記』をもつて信憑せよ、なほし神名地名のみは、しばらく風習に従つて『日本書紀』によれ」と。『古事記傳』以前に於いてこの言のある、加賀侯松雲公をして本邦第一の書を以て推稱せしめたのも、ことわりといはねばならぬ。

『折焚く柴の記』は白石の自傳を叙した書である。その記事波瀾多く、また變化に富め

るもの、惜しむらくは叙述の冗漫を避け得なかつた。しかし混和文體の中に雅文の趣を具へてゐる故に、流暢で誦するに足るものがある。

その他『東雅』が國語の歴史及び語源を述べ、『東音譜』が綴字法を述べ、『同文通考』が假字を述べたのは、語學上の意見を知るに足る。『采覽異言』『西洋紀聞』等は外來語研究の先驅をなせるものである。これ等の所説は、たとひ幼稚なるものとしても、なほ白石が言語學者として貢献するところの少くなかつたことを認められる。

白石と同門の儒に室鳩巢のあつたことは已に述べた。鳩巢は幕府に仕へたが享保十二年以來脚疾を患ひて、再三老を養はんことを乞つたが遂に允されず、邸宅を駿河臺に賜はつて、そこに住居した。世の人之を駿臺先生と呼んだ。その著『駿臺雜話』『鳩巢小説』は混和文として有名である。

『駿臺雜話』は病間に門人弟子を集めて講論したものを録した隨筆で、やがて將軍吉宗に奉つたのである。記する所は正道を明かにし、邪説を辨じ、すべて學問の大綱に係り、又世俗の諺卑近の語といへども、平生の事に通じて、觀省の益ともなるべき事どもを探りあつめて述べたものである。その文章は和漢の故事を引用することが多きに過ぎ、ために意味の晦澁を招いた跡はあるが、要するに森嚴で而も興味に富んでゐる。著者

が本書の例言に於いていふやう「國語大やう古雅に従ひ世俗の卑しき語を避くると雖も事情近く人聽に切なれば、たとひ鄙語にても、そのまゝ取用ひて擇びすつるにいとまあらず」と。本書は實に雅俗の語をかきつらねて、流暢な筆致である。『鳩巢小説』は『鳩巢逸話』ともいひ、その見聞録である。文章は『駿臺雜話』と同様である。

雨森芳洲二二八一—二二三八は、また此の頃の人で、木門五先生の一人であつた。師の推薦によつて對馬侯に仕官した。芳洲は支那音及び朝鮮音に通達し、その使節に應對するにも自在を極めたといはれてゐる。また詞藻に富み、辭章明晰優麗である。師の順菴はその才藻の卓絶せるを稱して、後進の領袖といつた。芳洲はまた八十一歳で始めて和歌に志し、『古今集』を讀むこと一千回、三年の間に詠するところの歌一萬首に及んだといふ。著書の中に『橋窓茶話』及び『多波禮具佐』がある。混和體の文章を集めたもので、雅文の調を帯びてゐる。

これ等の人々の外、中井覺庵の『とはすがたり』、柳澤洪園の『雲萍雜誌』等も、亦世にその名の聞えてゐるものである。

元祿時代の和漢混和文は、かくの如き状態であつた。今叙述の便に隨つて、こゝに天明寛政以降の状態に就いて記さうとおもふ。文運東漸時代に入り、化政時代に入るに

及んでは漢學者はます／＼出でて、漢詩漢文に堪能な者はいよ／＼多くあつたが、和漢混和文に巧みなものは比較的によくはなかつた。たゞ僅に、中井竹山の『草茅危言』、湯淺常山の『常山紀談』、菅茶山の『筆のすさび』、成島司直の『徳川實記附録』、太田錦城の『梧窓漫筆』、朝川善庵の『善庵隨筆』、橋南谿の『東西遊記』、藤田東湖の『常陸帶』等の數種があるのみである。おもふに、これは國學者と漢學者との間に漸く溝渠が穿たれて、二者相反目詆排するに至り、漢學者は國文の長を棄てて破格反則の文をなし、國學者は漢文の雄健を顧みずしてひたすら軟弱臆臆に走つた故であらう。

漢學者以外に於いては、伴嵩蹊の『近世時人傳』、閑田次筆『富士谷御杖の』、『北邊隨筆』、山崎美成の『名家略傳』、『提醒紀談』、『耽奇漫錄』、『三養雜記』がある。

化政時代の戲作者中には、學識の豊富と共にこの文體にも長ずる者が少くなかつた。曲亭馬琴の『燕石襟志』、『玄同放言』、『烹雜の記』、また種彦の『用拾箱』、『還魂紙料』等は、この文體を以てせる隨筆書である。皆縦横の筆致を見ることが出来る。

第四章 和歌壇の廓清

前期に於いて、木下長嘯子や下河邊長流などが既に和歌の革新を唱へはじめたことは、曩に詳述した通りであつたが、江戸に出でた戸田茂睡も亦それら先覺者の一人であつた。

茂睡(二二九五—二二六六)は、初名を恭光といひ、長流に後れること六年、契沖にさき立つこと十一年に生れた。最初本多家に仕官したけれど、天和貞享の際に老を告げて世を遁れた。梨のもと、またもとめぬ橋と號するのは、その居所によつて呼んだ號である。性質は淡泊で、名利を外にし、みづから詠じて、

塵の世と思ふ心のつもりては世のかくれ家の山となるらん

といつた。これより時の人はかくれ家の茂助と稱した。元祿五年に當時の詠を集めた和歌集『鳥の迹』を撰び、十一年に世に有名な『梨本集』を出した。これ即ち江戸に於ける劈頭の歌學書で、所説悉く中世以來の歌學傳授の弊風を論じて痛快を極めてゐる。その中にいふ、

何れの比よりか歌の詞に制といふことを云ひ出し、五點の詞主ある詞よむまじき詞遠慮すべき詞俊成の好み讀むべからずと宣ひし詞定家の不慮幾と宣ひし詞にくしといふ詞いとしからずといふ詞を云うて、詞に多く關をするて人赴き難きやうに道を狭くすることは、以ての外邪道、歌の零落すべき端かと思へども、歌の道不案内なるに、善き師もなければ、斯様に人のおもむきぐるしき關にをさへられて通りにくく、たま／＼心指のあるものも中がへりするやうなる事にて、道の正しく廣く行はるゝわけも知らねば、覺束なきに此の一冊を思ひ立て、不審をしるすものなり。

またいふ、

歌は大和言葉なれば、人のいふといふ程の詞を歌によまずといふ事なし。萬葉集を見るに、今の歌の難に俗語といふ詞幾程もあり。

その論旨は一に師範家の説を打破しようとするものであるが、これよりさき寛文五年にも茂睡はすでに同一の論を宣言したことがある。されば『梨木集』は實はそれを布衍したに過ぎないのであつた。茂睡はかくの如く師範家の説にむかつて論難の筆をば揮つたものゝ、未だ歌はかくあるべきものぞと教へる事はなかつた。その意見の實現

は、これを長流と契沖とに待たねばならなかつた。されど、これは彼れに聞いたのでもなく、彼れも亦これに學んだのではない、氣運が彼此を驅つて、東西相應するに至らしめたのである。鎌倉時代以降沈淪した詞壇は、かくして復興の端を發くに至つた。

契沖(二三〇〇—二三六一)は姓を下河といひ、十三の歳に高野山に登り、學行具さに至つて、遂に兩部大阿闍梨の僧正となる事を得た。下山の後は大阪生玉の曼陀羅院に住してゐたが、幾程もなく去つて諸方に行脚し、還つて後は妙法寺に住した。晩年は大阪の高津にかくれて、圓珠庵といふに餘生を送つた。

佛典に通曉せる契沖は、もとより悉曇學に達してゐた。その學の知識を以て我が國語學を見るものは、誰か所謂定家假名づかひの杜撰なのに驚かないものがあらう。契沖が假名遣の研究はかくして起り、その結果として『和字正濫抄』は成つた。契沖はまたその友長流が徳川光圀の囑をうけて完成するに至らなかつた『萬葉集』の註釋をも試みた。『萬葉集代匠記』はずなはちそれである。わが『萬葉』の高調はこゝに始めてその光彩を發し、わが古典の學はかくして漸く復興の緒に就くことが出来たのである。契沖はなほまた『萬葉』を註釋した餘力で、『古今餘材抄』をも著はした。これはたゞ『古今集』の註釋書としては精緻を極めたものゝ一である。その他、『勢語臆斷』があり、『源注拾遺』があ

り『百人一首改觀抄』があり、また『厚顔抄』がある。

八六

その事業を見るに、契沖は實に一代の學匠であつた。しかし直に和歌の天才と稱することは出来なかつた。その家集の『自撰漫吟集』は四十三歳の折りの自撰に成つたものである。また後人が編したものに『漫吟集』二十卷がある。今これ等の家集に現はれた風體を見ると、まづ才氣の活躍してゐるのを知ることが出来る。才氣の極は纖巧に陥り易く、技巧の見るべきものはあるが、燃えるやうな情熱は遂に求め難い。或は一片の詩趣をも認め得ないもの、平語らしいもの、或は滑稽に近いものも少くはない。併し、之を堂上派の歌人に比すると、感想に於いても、格調に於いても、用語に於いても、異彩を放つてゐることが見出される。要するに、契沖は學者として理論的に斯道に入つたもの、『萬葉』學者として、而もその詠はなほ『萬葉』の堂に入らず、たゞ纔に『古今』の風貌を傳へるに過ぎない所以である。しかも堂上家がひたすら三十一字の短歌にのみ心慮を焦す時、『漫吟集』中に六篇の長歌を収めたのは實に當代の珍とするに足りる。その中にも、無常歌の如きは三百十三句をつらねてゐる。眞淵が長歌の復興に對して、契沖は既に一步を先立つたのである。

契沖の國文學研究の動機は、一に和歌革新の氣運に促された故であつた。しかし契

沖の幾多の研究の結果は、實に我が國學發達の最良の武器となつた。蓋し、幕初以來、幕府の官學はすべて漢學の獨舞臺であつた。ために一般國民とは未だ殆ど全く没交渉であることを免れ難かつた。然るに、一方に於いては早くも支那心醉の徒を生ぜしめ、荻生徂徠の如く自ら姓名を修して支那風に物茂卿と稱するものや、或は我が國語を卑んで保偏駄舌と罵るものも出づるに至つた。かくては如何でかその反動のないことがあらうぞ。まして元祿の世は國民が自覺の端を發した時代であつた、こゝに於いてか水戸學は起り、我が國學は勃興の運に至つたのである。當時また漢學界には伊藤仁齋の復古學があり、荻生徂徠の古文辭學があつた。我が國學と彼の古學と、その復古尙古の點に於いて互に提携して進まうとする、これ一に氣運の然らしむる所であつた。かゝる時代に於いて、かゝる反動のもとに、この氣運に導かれて起つたのが荷田春滿である。春滿(二三三〇—二三九六)は山城の稻荷山神社の祠官である。歌文・國史律令格式に精しく、その聲名は一世に高くあつた。春滿は諸侯の聘にも應ぜず、將軍の召にも従はず、ひたすら和歌の革新を以ておのが任とした。されど、その詠むところは其の説く所にはかなはないで、風體は未だ高古の趣を具するまでに至らなかつた。その家集の『春葉集』を繕いて見ても、採るべき歌の多くないのを惜しまざるを得ない。さはれ、

柔弱な長袖者流の間に立つて、生涯戀歌を詠まなかつたといふが如きは、一異彩のあつたものといはねばならぬ。

春滿はかつて詠じていふ、

ふみわけよ倭にあらぬ漢鳥の跡を見るのみ人の道かは

と。この聲は實に漢學がわが國民性を破壊しようとした。また我が古道が世に顧みられないのを慨いて、放たれたのであつた。これより先ずでに垂加流の神道はある、しかしそれも正しくは邪道であり、異端である。わが神ながらの道は、つひに闡明すべき時がないのであらうか。國體を明にし、古道を明にする、これまで第一に着手すべきものではないか。國史と歌文との研究の如きは、畢竟これに到達すべき手段に過ぎないと。この趣意で春滿は『皇學創啓』を草して幕府に上り、京都に國學を建設しようとして請願した。その事は幸に許されたが、その運びに至らないうちに春滿は病歿してしまつた。

春滿の養嗣子に在滿(二三六六―二四一一)があつて家學を繼承した。『國歌八論』といふ歌學の書を著して、歌壇の積弊を極論して堂上家に對抗した。八論は歌源論、歌論、論、擇詞論、避詞論、正過論、官家論、古學論、準則論より成つてゐる。その『古學論』にいふ、

定家卿といふ人出で來りてより後は、今の世に至るまで、かの歌學者流の人のいかな

る故によりてか、かの卿を歌の聖の如くに尊信す。然れども、かの卿歌學を得たりとも見えす。いかにとなれば、古學の意を得ず、古語の義を誤ること、かの卿の歌及び記せるものにて見つべし。

堂上派が神と仰ぐ定家を嘗り得て痛切を極むともいふべきである。在滿は和歌を以て詞花言葉の翫びであると見る故に、まづ詞を擇ぶべきことを説いた。その理想とするところは、瑰麗幽艶な新古今風であつた。この論は當時の和歌壇に少なからぬ動搖を起して、幾多の論難辯疏の書を出すに至つた。田安宗武の『國歌八論餘言』、賀茂真淵の『國歌八論餘言拾遺』、國歌應説、大菅圭の『國歌八論斥非』を始めとし、後には本居宣長の『國歌八論評及び八論斥非評』、伴蒿蹊の『國歌八論評』等を出した。

この論難は、遂に在滿をしてその仕官してゐた田安家を辭するの止むなきに至らしめた。在滿が辭する際に薦めたのが賀茂真淵である。真淵は春滿の門に出でたものである。その田安家に召聘せられたことは、少なからず文運東漸に與るところがあつた。この事は次章に於いて説くことにしよう。

これらの外にも、當時かくれない歌人が多くあつた。田安宗武はその一人である。かれは吉宗將軍の第二子で、松平定信侯の父である。有職聲律に精通し、また歌道に堪

能で、『天降言』、『國歌八論餘言』、『歌體約言』等の著がある。眞淵召聘の後、かれは萬葉風の雄渾な歌風を學んで、之をよくする事を得た。似雲といふものも當時世に聞えた歌人である。西行が遊歴の跡をたづねて居住を定めず、時の人に今西行と呼ばれて、西行に姿ばかりは似たれども心は雪と墨染の袖と詠じた風流僧であつた。有賀長伯も亦その頃の歌人である。この人は和歌八重垣、初學和歌式、歌枕秋の寢覺等の著者として聞えてゐる。

女流では井上通女が、『東海紀行』、『歸家紀行』、『往事集』などによつて、その名を知られてゐる。祇園梶子は京都祇園南林茶店の女で、家集『梶の葉』の著者である。十四歳の折、『歳暮戀』と題して「戀ひく／＼てまた一年も暮れにけり涙の氷あすや解けなん」と詠じて、一代の感賞を博した。その女の百合子もまた和歌に巧で、『百合家集』といふ家集が廣く世に行はれた。

第五章 蕉風の俳諧

延寶の末、貞門の俳諧はすでに廢れものゝ中に加へられ、談林派も末流が輕佻に流れ、佶偲艱澁に陥り、また漸く世人の倦厭を招いた。こゝに於いてか新俳諧は遂に興らざるを得なかつた。

攝津の伊丹に上島鬼貫(二三二—二三九八)といふものがあつた。はじめは談林の俳人松井宗旦に學んで、その吟は幽奥自然の趣を捉へ得たものであるが、貞享二年の春に及んで、まことの外には俳諧はないといふことを悟入するに至つた。さはれ惜しいことには、この人はたゞ一人醒めたのみで、他に及ぼすところがなかつた。いふ所は芭蕉の標榜する所と略、同一様であつたが、二者は師弟の關係があるのではなく、相知相識の間柄でもなかつた。その契合は一に風潮の然らしめたのである。

松尾芭蕉(二三〇四—二三五四)は通稱を忠左衛門、名を宗房といつた。芭蕉は號である。伊賀の人で、最初藤堂家に仕へたが、主君の歿するに及んで出奔して京都に赴き、北村季吟に就いて國學連歌及び貞門の俳諧を學び、傍ら伊藤坦庵に隨つて漢籍を講習し、李白

を追慕して桃青と號した。寛文十二年に京を去つて江戸に下り、同門の一友小澤卜尺の家に寄寓し、後に深川の鯉屋杉風の芭蕉庵に居住した。芭蕉といふ號はこの時に始まつた。時は延寶三年である。當時西山宗因はなほ世にあつて、談林派の勢力は甚だ盛であつたが芭蕉の句調もまた大いにそれに類するものがあつた。

あら何ともなや昨日は過ぎて河豚汁

の如きは、その一例である。されど、宗因の歿後談林派の詩材が枯渴して徒に怪奇に流れるを見て、遂に幽玄閑寂の想を旨とする蕉風の一派を創始した。蕉風はまた一に正風ともいふ。天和元年(二三四一)に、

枯枝に鳥のとまりけるかな秋の暮

といふ詠のあつたのは、すでに談林から蕉風にうつる過渡時代であることを示し、貞享三年(二三四六)に、

ふる池に蛙飛び込む水の音

と詠するに至つては、全く蕉風にうつり得たのである。この風格がその空に入つたのは、元祿四年(二三五一)に京都嵯峨の落柿舎に於いて撰んだ『猿蓑』について見る事が出来る。古池の句は敢て何等の奇なる所があるのでもないが、たゞこれを芭蕉が清淡の閑

歴に照し更に蕉風が閑寂の發展の上にあはせ見てはじめて一味の妙が湧くのである。これ芭蕉が老莊の學を修めて虚無恬淡の極意を解し、また妙心寺派の高僧佛頂禪師について臨濟に參し禪味を會得したに因るのである。かくて貞享以後は、暇があれば杖を四方に曳き、一蓑一笠足跡殆ど全國にあまねく、到る處に吟詠を残した。これは一に西行に私淑してゐた故である。かゝるうちに、その風格はまた一轉し、高く悟つて俗に歸るべしとて、高遠の思想を卑近の題材の中に求めようとするに至つた。その傾向は元祿七年に成つた『炭俵』に於いて著しい。これこそ蕉風の最も圓熟した境に到達したものであつた。人生を以て旅と觀じた芭蕉は、つひに旅で歿した。時は元祿七年十月十二日、處は大坂の客舎。遺骸は江州粟津の義仲寺に葬つた。芭蕉にはまた風蘿坊天軒是佛坊等の別號がある。

芭蕉の俳諧は、はじめ貞門の優麗から、中頃談林の滑稽に入り、終に出でて幽玄閑寂の一派を成したのである。そも、幽玄閑寂とは如何なるものであるか。幽玄とは露骨淺薄でなく、餘韻の翳々たる趣のあるをいふのである。芭蕉は古風の俳諧との差別を説いて、

發句は昔より様々變はり侍れども、附句は三變なり。昔は付物を專にす。中比は

心付を専とす。今はうつりひゞき句位を以て付るをよしとす。附句は大木倒すが如し、鋸もとに切こむべし、西瓜きるが如し、梨食ふ口つきの如し、付心は薄月夜に梅の匂へる心こそめでたけれ。

といった。付物心付の露骨なのを斥けて、うつりひゞき句位といふ如き、又は薄月夜に梅の匂へるといふ如き、幽玄な附方を採るべしといふのである。

句は七八分にいひつめてはけやけし、五六分の句はいつまでも聞きあかず。

といふも、亦露骨淺薄を排して餘韻の多からんことを欲したのである。閑寂とは、句の材料骨子たるべきもの、閑適清寂なるの謂である。蕉風が老佛の虚無恬淡さては禪味から來た所のさるといはれるのも理である。

そして幽玄と閑寂の趣は、寂と槩と細みと、この三のものが相よつて、始めて達せられるといふ。芭蕉の弟子去來はこの三のものを解して、

寂は句の色にあり、槩は句の餘勢にあり、然れども趣向も詞器共に選ばずんばあるべからず。

といひ、また、

槩は句の姿なり、細みは句意にあり。

といつてゐる。その意のある所は大體これにても察することが出来る。

芭蕉はまた不易流行といふ事を説いて居る。

萬代不易　り、一時の變化あり。この二個究る、その本一なり。その一といふは風雅の誠なり。不易を知らざれば實に知るにあらず。不易といふは新古によらず、變化流行にも拘はらず、まことによく立たる姿なり。

一はこれ永劫不滅の美にして、一はこれ隨時推移の風尚である。人情悲喜の至極を歌ふのは不易である、清新奇抜の辭を以てするのは流行である、即ち一は内容に、一は外形について云ふのであらう。この二者相具して花實は兼ね備はるのである。蕉風の一體はこのやうにして成立した。しかも蕉風の重きをおくのは、寧ろ萬代不易である。

それは芭蕉その人の個性が然らしめる所であつたらう。その幽玄閑寂はつひに新町、島原吉原にあこがれ行く人々の趣味とは全然反する所である。蕉風に遊ぶの士が多く士林桑門の騷客たるは、蓋しこれがためであつた。

今や口を黙して容易に聞くことのなかつた芭蕉が言論の方面を去り、その實際の吟詠を觀察して、その一斑を見よう。

梅が香にのつと日の出る山路かな

芭蕉

處々に雉子の鳴き立つ
野坡
家普請を春のてすきにとり付て
野坡
上のたよりにあがる米の直
芭蕉
宵の内はらくとせし月の雲
芭蕉
藪越はなす秋のさびしさ
野坡

花の雲鐘は上野かあさ草か
夏草やつはものどもの夢の跡
墳も動け我がなく聲は秋の風
荒海や佐波に横たふ天の川

或は斬新穩健、或は織巧艶美、或は豪壯、いづれもそれ／＼の趣がある。されど、ひとへに感興にまかせて實境をさながらに吟詠してゐるので、その集中の句は巧拙相混淆してゐる。これその餘弊といふべきも、また生氣潑刺たるものゝある所以である。

著書に『冬の日』『春の日』『曠野』『ひさご』『猿蓑』『炭俵』『續猿蓑』等がある。世にこれを『七部集』といふ。蕉風の神髓は一にこゝに存して居ると稱せられる。また『笈の小文』『奥』

の細道『初懐紙』等がある。

芭蕉は多く言はず、語らず、また書かなかつた。その法式の如きも深く意を留める事はなかつた。嘗て門弟千那の請にまかせ附句の方法十ヶ條を記して與へたが、やがて後學をあやまる事を恐れて、強ひて取り戻して破棄したといふ。その俳諧に關する言論は、たゞ門人の間に答へて意見を展べたに過ぎなかつた。されば門弟は各その聞く所に泥み、互に異を樹てて一家をなした。それらの門弟の中で、越智越人、向井去來、内藤丈草、榎本其角、服部嵐雪、河合曾良、森川許六、立花北枝、各務支考、志田野坡等が最も聞えて居り、世に蕉門十哲の稱がある。十哲をはじめとし、その他の門弟中に各一家の流風を立てたものが少くない。今その主要なものを擧げると、其角の江戸座、嵐雪の雪門、支考の美濃派、去來の落柿、舍杉風の探茶庵、北枝の加賀連、中川乙山の伊勢風等があつた。

其角二二二―二三六七は江戸の人で、豪放を以て自ら任ずるもの、その俳風は江戸の人士のいはんと欲する所をいひ盡して餘蘊のないものである。

鐘一つうれぬ日はなし江戸の春
と。芭蕉も華やかなことは其角に及ばないと言つたことがある。その闊達の性は、人を驚殺させないでは置くまいとする趣が見える。

曉のへどはとなりか時鳥

されど、修辭彫琢を旨としなかつたので、放縱に走り難解に陥るものが多くあつた。かの世に洒落俳諧といふのはその流を汲んで起つたのである。其角の著書に『元々集』及び『續元々集』等があり、大いに時好に投じた。

嵐雪(二三一四—二三六七)も亦江戸で一派を成した人ではあるが、その風は大いに其角と異なる所がある。温順な性質は、またその温籍な吟詠に現はれてゐる。最もよく蕉風の正傳を繼承したものとといふべきであらう。世に或は評して、芭蕉翁の骨肉を得て其角は花を咲かせ、嵐雪は實を結び、花實相對して芭蕉翁と共に大に行はるといつたものゝあるのは至言である。

黄菊白菊その外の名はなくもがな、

武士の足で米とぐあられかな

などは、今に傳誦する所である。その詠をあつめた書に『玄峰集』があり、その撰に『其袋』がある。

許六(二三一一—二三七五)は近江彦根の士で、蕉風の擴張に最も努力した。「予短才未練なりと雖も、一派の俳諧に於いては、大敵を受けて一方の城を固め、大軍の眞先かけて

一番に討死せむとする志、鐵石の如し」と、自らも豪語した程であつた。その著『歴代滑稽傳』は俳風の變遷を説き、俳人の略傳を叙して、氣焰の當り難いものがある。別著『風俗文選』は蕉門の俳文を輯めたもの、大いに世に行はれた。

去來(二三〇三—二三六四)は京の俳壇の牛耳を執つてゐた。不易體の句は多いけれども流行の句は少い、たとへて言ふ時は衣冠東帯の正しい人が遊女町に立てるが如しと評せられた。その高古の風體であることを見るべきである。句をあつめた書に『去來句集』があり、俳論を載せたものに『去來抄』がある。

丈草(二三二二—二三六四)は近江湖南の風光を愛して、栗津の龍ヶ岡に佛幻庵を結んで住んでゐた。玉堂和尚の禪意を傳へて、その風體冲澹清雅なものがあつた。『寐覺草』一編はその超俗の感慨を見るべきものである。

鶯や茶の木島のあさ月夜

時鳥啼くや湖水のさゝ濁り

蹄子のかへり來ぬ夜や葦

以上五哲は蕉門の雄。されど當期の俳壇にあつては、なほ忘るべからざるものが二人あつた。一は俳論家支考、一は鳴立庵の開祖大淀三千風である。

支考(二三二五—二三九一)は、美濃の人、霸氣に富み、傲然として人の上に立たうといふ事に力めた。越人、露川と論争して、自ら晦冥して假死を装つたことなど、性行が殆ど狂人に近いところがあつた。されど、縦横の奇才は元禄五年に「葛の松原」を公にしてから、「續五論」「西華集」「東華集」「南無俳諧」「夏衣」「白馬奥儀解」「俳諧十論」「發願文」「十論爲辨抄」「俳諧古今抄」等の刊行相踵いで出で、殆ど送迎に追なからしめた。中にも「續五論」は滑稽華實、新古旅戀の五論に分つて説いてあつて、自らも一字一涙と稱した。「俳諧十論」は俳諧の傳、俳諧の道、俳諧の徳、虚實の論、姿情の論、俳諧の花、修行地、言行論、變化論、法式論の十論から成り、支考が俳諧に對する意見を餘蘊なく披瀝したもの、その所説の往々牽強附會に流れてゐる所はあるが、また實に俳諧書の白眉たるものである。

支考はまた美濃派の開祖であつたが、その俳風いつしか四隣を靡かし、遂に乙山の伊勢風をも併合した。世にこの格調を上方風カミカタといふ。それは江戸座が雪門を蠶食して江戸風といふに對しての稱であつた。

大淀三千風(生死未詳)はなほ葛飾風カツシカの祖、山口素堂と同じやうに蕉門の出でなく、また談林の流でもなく、特有の風體を有してゐる。もと伊勢の人であつて、遍歴の志を抱いて諸國を行脚したが、仙臺に卜居すること十五年に及び、その風大いに東北地方に行は

れた。後年西行の舊跡、鳴立澤を再興し、鳴立庵の開祖となつた。その著に「日本行脚文集」「仙臺大矢數」「松島一色兩吟集」がある。三千風の後は漸く振はなくなつて、鳴立庵を繼ぐものは依然としてあるけれど、俳風はつひに蕉風に合はせられてしまつた。

第六章 狂歌の發達

101

狂歌の淵源は、これを『萬葉集』の戲歌『古今』以降の俳諧歌、また諸軍記物に現はれてゐる落首に於いて見ることが出来る。されど、狂歌の漸く盛になつたのは、室町時代の末葉からであつた。永正五年正月に成つた『永正狂歌合』、また土佐光信畫と傳へられてゐる『七十一番職人盡』など、相踵いで出たのである。

徳川時代に入つては、俳諧の流行と共に狂歌も亦行はれた。細川幽齋、烏丸光廣、木下長嘯子などは、皆狂詠があつた。松永貞徳も其の多才多能を以て狂歌にも長じ、よく温雅の一體を得た。『貞徳百首』『貞徳狂歌集』等は、即ちその詠を集めたものである。

涼しさを巻きこめて來る文月は一葉の風の散らし書きなり

など、その風體を見るに足る。その頃また淺井了意の編纂せる『狂歌咄』といふのがある、曾呂利新左衛門の手記した狂歌を蒐めたものである。

貞徳について、寛永年中京都男山八幡の社僧に豐藏坊孝仍、瀧本坊昭乗があり、大阪に淀屋介庵といふがあつた。それから稍後れて、京都建仁寺の住僧で永雄といふがあつ

た。世に雄長老といふのは此の人で、家集に『雄長老百首』がある。江戸に貞門の俳人で石田未得といふもあつた。その家集を『吾吟我集』といひ、よく諸題をそなへて、またよくよみかなへたりといはれてゐる。後の唐衣橋洲カラフネカシラが私淑した人である。かつて逢繼とて、

だきしめて今宵は我をしめ殺せ逢ふにかへんといひし命ぞ
と詠んだのが最も人口に膾炙してゐる。

未得が同門の半井ト養といふのも、また縦横の狂才に端倪すべからざるものがある。即吟即詠多く推敲を経ることがなかつた。橋洲の著『狂歌初心抄』に半井ト養風とて、

布袋殿しんかんしんとして御座る内にははいもひもしんも有り
を擧げてゐる。『ト養狂歌集』『ト養狂歌集拾遺』の家集がある。

明暦萬治のころには、豐藏坊信海といふもの孝仍の子で、昭乗の門に出で、出藍の聞えがあつた。その風體をば世に玉雲流と稱したのは、その別號を玉雲翁と呼んだからである。この人の詠が、當時に於いては最も傑出してゐる。

何にやら似たもの人のあだ口はまこと浮世の嵯峨の松茸

といつたのは、よくその體を説明するものである。その家集を『狂歌鳩杖集』といふ。

信海と殆ど同時に、浪花に生白庵行風といふがあつた。その詠は拙くて傳へられる程の者はないが、『古今夷曲集』及び『後撰夷曲集』の撰があるので知られる。『古今夷曲集』は蓋し狂歌撰集の先驅たるものゝ一つで、寛文六年(一三二六)に刊行してゐる。俳諧歌をはじめ當時の狂歌を撰び、和歌撰集の體裁に擬して編纂したものである。寛文四年良純法親王に狂歌を奉つた縁故で、靈元帝より「夷曲のさまあるまじきにあらず、夷歌なれば詠人の名乗の事もおのが心にまかすべし」との勅許を得て編輯し、やがて寂覽の光榮に接した。これ實に當時に於いては、狂歌の價値を高からしめたものであつた。

以上は元祿以前啓蒙時代に於ける狂歌界推移の概観である。要するに、未だ微々たるもので、到底俳諧の敵ではなかつた。その作に於いても、言語上の遊戯以外には思想の滑稽を認め難く、随つて價値は頗る低いものである。然るに、信海行風の歿後、京都に正親町公通が出で、大阪に鯛屋貞柳が出でて、始めて光彩の陸離たるものとなつた。これ正に元祿の盛時で、かくの如くにして元祿文學に狂歌の一章を設けることを得たのである。

正親町公通(一三一三—一三八三)は權大納言で、戲號を風水軒白玉と呼んだ人である。また俳句をよくし、狂句をよくし、狂詩をもよくした。

夕がほにかけし言葉の露よりやひかるの君の名めで聞えん

晝がほの花は宰予が夢のうち蝶となりても見るやしら露

その詠多くは典故あり、譬喩あり、題名も亦おほく古歌古詩の題名を襲用した。その家集を『雅遊醉狂集』といふ。各詠皆旁註を加へ、字義を説き、詠意を明かにしてゐる。その巻頭の歌に、

天地のひらけそめしを大根にて國歌さかゆく花の春かな
これに附記していふやう、

狂歌神國の道を第一とし、或は物理を感じて讀みぬ。又させるふしもなければ、その體いやしからず、古歌古詩故事を用ひてもけやけからず、大方によみなしたるもあり。又巧過て理窟らしきもあり。又一座の逸興輕口にて狂の狂なるもあり。讀人よく／＼心をつけて見分給はれかしこ。

されば、その滑稽未だ極致に達せず、いまだ解頤の境に至らず、たゞ博學の面影を見るに過ぎない。これまた遂に公卿の狂歌たるを失はぬものである。

松尾芭蕉また狂歌を詠じた。

などてかくいそがしいとて二階から落ちての後は隙になりけり

風になびく富士や三里に炙すゑて行衛も知らずありく西行。
 など即吟の一例である。されど、これはもとより一時の座興にて、深く意を留めたのではない、たゞ俳諧の滑稽を暫し他の形式を假りて詠じたまでであつた。

鯛屋貞柳二三四―二三九四は永田氏また榎並氏といふ。名は良因、大阪御堂前に住し、代々製菓を業とした。鯛屋はその屋號である。かつて信海に狂歌と書法とを學び、二世信海と號した。その友の奈良古梅園が、大さ二十斤餘の墨を造つて靈元上皇に奉つた時、貞柳が

月ならで雲の上まですみ登るこれは如何なるゆえんならん

と詠んだので、油煙齋（一）に由縁齋（二）の號を得た。『難波家づと』『續家づと』は、その著書の中でも最も多く人に知られてゐるもの、『置みやげ』『拾遺家づと』なども、皆その狂詠をあつめたものである。

散ればこそいと櫻はめでたけれ、けれどもさうぢやけれども

ふじの山夢に見るこそ果報なれ路銀もいらすくたびれもせず

この二首だけでは未だその一面をだに知るに足らぬが、かれは狂歌を見ることは猶ほ和歌に對すると同一であつた。かれは師信海の教を奉じたのである。その教にいふ

「箔の小袖に繩帶したる姿に作れ」と。そは優なるも戯を離れず、狂なるも賤なるべからず、雅俗の混用よろしきを得よといふのである。換言すれば、優美な言語の間に粗野な言語を混ぜよといふのである。即ち、貞柳の狂詠は、時に内容上の滑稽を有すといへど、未だ全く弄語の域を脱する事が出来なかつたのである。されど、貞柳に至つてこの道の基礎は始めて完成することを得、後の安永天明を待つて一箇獨立の文學をなすに至つた。

貞柳の門には傑れたものが少くなかつた。その中にも、桃緣齋貞佐があつて、玉雲翁三世と稱した。また栗柯亭木端（三）といふものもあつた。この人には、『狂歌眞寸鏡』『狂歌拾遺笑草』『貞柳狂歌訓』等の著があつて、世に知られてゐる。されども、つひに先師の遺詠を傳へるまでに至らず、狂歌壇上は徒らに朔風の吹きすさぶに任せて荒涼たる觀を呈した。

第七章 淨瑠璃の活躍

近松門左衛門(二三一三—二三八四)は本姓を相森、名を信盛といひ、號を巢林子また平安堂ともいふ。その経歴は未だ的確に知ることは出来ないが、しばらく世に傳へる所をしるすと、長州萩の人で、幼少の頃に肥前唐津の近松寺に入つて剃髮し、古調と號した。然るに、程なく京都に出て、還俗して一條家に仕へ、位階をも賜はつて従六位となつた。博く朝典に涉り、かねて古學をも修めた。その後また幾もなく職を辭して、名を近松門左衛門と改め、淨瑠璃歌舞伎狂言の作者となつた。

延寶五年(二三三七)に京の歌舞伎芝居萬太夫座に於いて、藤壺の怨靈が藤の花から忽ち大蛇と變ずる趣向を立て、喝采を博した。また淨瑠璃太夫井上播磨掾宇治加賀掾のために淨瑠璃を作つた。貞享二年に兼て相識である義太夫即ち後の竹本筑後掾が大阪道頓堀に操座を起すや、かつて加賀掾のために作つた舊稿を興へたが、三年(二三四五)二月に始めて『出世景清』を作つてその開運を祝した。この時に門左衛門は三十四歳であつた。その淨瑠璃の革新は此に始まり、斯界も亦こゝに空前絶後の偉觀を呈す

るに至つた。これよりさき、加賀播磨のためにせる數種の作は、所謂古淨瑠璃と同一様のものか、或は金平本の跡を襲つたものに過ぎなかつたが、今や『出世景清』は體裁大いに改まり、全篇を五齣とし、首尾一貫して脚色整然たるものとなつた。かつては怪力鬼神を語つたものが、今は専ら題材を人事に採つて、時に人情の機微に觸れようとするものがある。されど、この作は辭想共に未だ傑出したものではなかつた。

元祿三年に門左衛門は京都を去つて大阪に下り、竹本座に入つた。竹本座は操人形を演ずる劇場である。操人形の演技に合わせて語る淨瑠璃の作者として劇場裡の人となつたのは門左衛門にとつては如何ばかり便宜の事であつたらう。蓋し、かれが述作上の工夫は、これによつて得る所が少くなかつたのである。この頃から諸作漸く圓熟の境に入つたが、爾來専ら義太夫のために淨瑠璃を作つた。その數は積り積りて、およそ百餘種に及んだ。その中でも、『雪女五枚羽子板』、『國姓爺合戰』、『曾我會稽山』をば世に三傑作といひなしてゐるが、『冥途飛脚』、『心中天網島』、『女殺油地獄』などが却て稱すべきものがある。

門左衛門が始めて淨瑠璃に筆を執つてから、享保九年十一月に、その最後の傑作たる『關八州繫馬』を遺して此の世を去るまで、前後四十有餘年、就中後の三十年間は、かれが

獨特の技倆を發揮した時期であつた。

門左衛門の淨瑠璃はこれを二種に分けることが出来る。その材料を史上の事實に採つたものを時代物、當時の出來事に採つたものを世話物といふ。門左衛門もはじめは専ら時代物にのみ筆を執つたが、晩年に至つては多く世話物を作つた。時代物の材料は『源平盛衰記』『平家物語』若しくは謡曲などから採り、就中謡曲から採つたのが最も多い。時代物の諸作は事件の變化を主とするので、その人物は只普通性を有するのみで、個性の發展を認め難く、隨つて人物の行動も、事件の變化もすべて宿世の運命によるのである。然るに、世話物は大いにこれに異つて、人物が主因となつて一篇を成してゐる。故に、世話物の人物は普通性を具へてゐる中に、その人物に特殊なる個性の發展するを見る。吉凶禍福幸不幸は皆人物の性情によつて生ずるのである。かくて世話物の人物は活躍し、時代物の人物は拘束される。世話物の人物は現實的、時代物の人物は模型的である。現實的な人物は一擧手一投足に境遇を作爲し、模型的な人物は境遇に應ずるやうに作られてゐる。同じく門左衛門の作でありながら、著しき運庭の存するのは、畢竟この理に基くのである。吾人は門左衛門の上出來な世話物を見る時は、常に一小天地に遊ぶ想がある。時代物の諸作も亦結構が壯大で、想像が縦横自在で、行文の

圓熟してゐることを認めるけれども、世話物の作の全體に於いて完備してゐる所のあ
るのには到底及ばない。

されど、今日でこそ吾人は左様には評するものゝ幼稚であつた當時の看客聽衆は却て變幻の無限な時代物を喝采したのである。當時の見物は、未だ人嚮の機微に觸れるよりは、寧ろ耳目の驚駭を欲した。世話物の哀しさに泣かうよりは、寧ろ切狂言の餘興として、たゞその機敏な變化を喜ぼうとした。わが門左衛門は決して看客聽衆に阿附したのではなかつたけれど、辭想共に苦心を重ねたのはこの時代物である。かの『雪女五枚羽子板』では、寶器の靈驗雪中の生埋、女子の勇戦、變生男子を取り來つて、俗衆と共に歡呼の聲をあはせ、『天智天皇』にあつては、金輪五郎今國の首を他人の體について再生せしめ、逆賊を滅さしめて、觀客の同情を棄てなかつた。更にまた『日本振袖始』の如き、遠く題材をば神代の昔に取つてゐるものゝ、未だ時代の特色を描寫するに至らないで、元祿の世相そのままを現はしてゐる。義経、曾我兄弟、名は古きを假りてゐるけれど、そのなすところは當時の遊冶郎と異なることがなかつた。さる中でも傑作として推すべきものは、『曾我會稽山』『國姓爺合戦』『傾城反魂香』『關八州繫馬』等である。

門左衛門の世話物を作つたのは、元祿十三年(二三六〇)に、竹本座の『長町女腹切』に始ま

る。すなはち彼が四十八歳の時であつた。蓋し、かれが是までに經來つた浮世の辛酸と社會の觀察とは、漸くその詩才を圓熟せしめたのであらう。

世話物の材料は多く下層社會にとつてゐる。傾城遊女と放蕩兒とであるか、さもなければ性格のこれ等に類した武士の上である。かくて、その寫すところは義理と人情との衝突である。乃ち人間各自の性情に基く外界との衝突を描いたのである。門左衛門は、この二者の調和をば心中を以て表はした。げに、世話物にあつては『女殺油地獄』一篇を除く外は、大概獻身熱烈の戀愛をうつした。嚴肅な社會制裁のもとに、なほ戀愛の遂行を求めようとする。さすがに時代の道德を守つてゐる門左衛門は、直に戀愛の勝利を唱へることが出来なかつた。心中を拉し來つた所以も一にこゝに存してゐる。即ち情死の已むなきに至つた男女は、形の上の失敗者で心の上の成功者である。兩々相抱擁して、莞爾として死に就く時、彼等の眼底には此の世はなく、一蓮托生の慰安、これのみが、かれらの心に輝いたであらう。されば心中は戀するものの眞の勝利であつたのである。これは一面に於いて、當時行はれた淨土信仰の觀念が與つて力であつた事を記さねばならぬ。而して、かれの心中物は『曾根崎心中』に始まる。それは元祿十六年(二三六三)五月の興行であつた。『天網鳥』の如きは、事は十月十五日に起つた出來事であ

つたが、淨瑠璃は已に十二月六日に操座に於いて興行された。されば觀客總衆は皆恍然として酔へるが如きものがあつた。故に、世には門左衛門の心中物が出でたので、當時情死する者の數を増加したといふものさへあつた。情死を誘致したものは、必ずしもかれの淨瑠璃には限らなかつたことであるが、如何にその時流に歡迎されたかを知るに足りる。世話物の中では『曾根崎心中』、『堀川波の鼓』、『冥途の飛脚』、『槍權三重帷子』、『心中天網鳥』、『女殺油地獄』、『心中庚申』等が最も傑出したものである。

世に或は西鶴は觀察し、近松は同情すといふ。河内屋與兵衛は『女殺油地獄』に於ける兇暴最も憎むべきものである。されどもなほ讀んで行くうちには、憫察の涙に堪へなくなり行く。『天網鳥』に於ける治兵衛は一個の痴漢である。されどもその胸裡に入ればなほ同情同感を禁ずることの出來ないものがある。實に門左衛門は罪惡を罪惡と視ることがなかつた。罪惡に即して人生を觀、現實の世相を察し、然る後これを醇化して理想の眞相に接しようとする。現實に即してしかも超世し、生死榮辱を眼下に瞰ようとする。吾人が門左衛門の諸作に接して、光明喜悅の感が湧くのはこれがためである。よしやそれが深い省察を缺き、内觀の未だしいものがあるとはいへ、耽溺蕩逸な元祿の世にこの人のあるのは、眞に文壇の一大異彩といはねばならぬ。

門左衛門の文章は謡曲などから學んだところが多くあつた。天爾乎波を省き、俗語を用ゐる情景兩ながら缺けてゐる所がなく、縦横自在眞に非凡の才筆であつた。靈元上皇が嘗て「最明寺殿百人上藤」を讀まれて、石曼卿が「蝶遺粉翼輕難拾、鶴墜霜毛散未轉」といつた句を翻譯して「蝶の翼のおしろいを草にこぼして梢には、鶴の霜毛をぬぎかくる、雪は花より花多き」といつてあるのを、嘆賞されて、かくの如き才智を以て和歌を詠じたならば、定めて秀逸の多いことであらうと宣はれたのは、その一斑を説明するものである。實にその文辭は流暢にして、音律の妙がある。就中道行の條の如きは、婉轉滑脱にして才華の煥發する趣が見られる。「難波土産」に「近松が道行は何となく句がらげだかく、やゝもすれば歌書の體「源氏」などのうつりありて、優美なること格別なり。それに目なれて今時の道行は一向評議に及ぶべからず」と記されてゐるが、誠に適評である。「曾根崎心中」の道行に、

この世の名残り、夜も名残り、死に行く身を譬ふれば、あだしが原の道の霜、一足づつに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ。あれ數ふれば曉の、七つの鐘が六つなりて、残る一つが今生の、冥途の鐘の聞きをさめ、寂滅爲樂と響くなり。

といへる一節がある。荻生徂徠はこれを見て「門左衛門が妙この中にあり、外はこれに

て推測るべし」といつた。

門左衛門と同時に錦文流といふがあつた。この人は、小説壇上に縦横の筆を揮つた外に、また淨瑠璃にも數種の作がある。「仁徳天皇萬年草」「男色加茂侍」等がそれである。門左衛門の流風をうけたものには、竹田出雲、松田和吉、長谷川千四三、好松洛があつた。皆竹本座附屬の作者であつた。

出雲二三五―二四一六は千前軒と號し、竹本筑後掾退隱の後をついで竹本座の座主となつた。享保八年に始めて「大塔宮職鑑」を作つて門左衛門にその添削をうけ、又折その教を受ける事もあつたが、門左衛門の歿後は遂に淨瑠璃作者の霸王となつた。出雲の著作中で著名なものは「蘆屋道満大内鑑」「平假名盛衰記」「菅原傳授手習鑑」「義經千本櫻」「假名手本忠臣蔵」等である。その中でも、「假名手本忠臣蔵」は赤穂浪士の義舉を題材としてゐる淨瑠璃中の最も傑出したもので、初興行の寛延元年から天明五年に至る三十八年間に、三ヶ津の劇場で興行する事が四十一度に及んだといふ。以上の所作は、皆門左衛門が晩年にものした時代物の體裁に倣つて、専ら意を趣向に用ゐ、新奇を競つたものである。作中の人物に個性の認むべきものなく、辭品にもまた及ばぬところのあるは言ふを待たない。然れども、趣向の新奇であることが能く觀譽を誘つて、その

作の上場毎に太く喝采を博した。

出雲を叙しては必ずや合作の事を忘れる事が出来ない。そして出雲が合作の筆を執つたのは享保十三年(二三八八)に『加賀國藤原合戦』に長谷川千四と名を連ねたのを嚆矢とする。この風は年と共に愈々盛につひには場割を定め、受持を分ち、每場技巧を争ひ、ひたすら人目を驚かす事を企てた。かくて全篇には首尾の一貫なく、秩序の整然たるものもなく、支離滅裂に陥り、やがては一幕毎に性格の轉變を見るなど、不自然を極めるに至つた。脚色の巧妙は或は門左衛門にまさるものあり、舞臺上の効果もまた多いものもあるけれど、つひに部分の美をのみ致して、全部に互つては前後撞著の醜を來さざるを得なかつた。かの『菅原傳授手習鑑』はその雄篇の一である、されどもその推稱されるのは全體の構造によるのではなくて、作者等が力を盡して描寫した部分々々の上である。世に傳へる所によると、『楠音嘶』の當り振舞の折、三好松洛が立てた筋により、各關引をして、松洛は刈屋姫と道眞、並木宗輔が白太夫と櫻丸、竹田出雲が松王と小太郎との三様の子別れをうつしたとの事である。これ等の各段は今に愛誦されてゐるに拘はらず、他の段の毫も顧られないのは之が爲である。

松田和吉(文耕堂)は出雲千四松洛と合作した。是れらの作では、『御所櫻堀川夜討』、『鬼

法眼三略卷』、『壇浦兜軍記』等が世に持囃されてゐる。松洛はまた出雲竹田小出雲近松半二等と合作した。それからの作では、『源平布引瀧』、『敵討檻襖錦』、『小野道風青柳視』等が有名である。千四には別に『京土産名所并筒』といふのがあつて聞えてゐる。

これよりさき、西澤一風、紀海音、並木宗輔等が出でて、大阪豊竹座のために筆を執つた。豊竹座といふのは、筑後掾の門弟豊竹若太夫が元祿十五年(二三六二)創設したもので、爾來竹本豊竹の二派に分れ、竹本を西豊竹を東といつて、互に隆盛を争つた。蓋し、門左衛門が鑿筆を鼓して以來、淨瑠璃界の氣運大いに動いて、作者輩出し、音節に、人形に、舞臺道具に、大いに力を傾注したために、こゝに二派の對峙となり、二派の對峙は却てまた斯界の發展に寄與する所が少なくなかつた。

海音(二三三—二四〇)は姓を榎並といひ、狂歌師鯛屋貞柳の弟で、はじめは和泉柿本寺の僧侶となつたが、後に還俗して醫を業とした。國學を契沖に學んで契周と號し、淨瑠璃作者となつて紀海音と改めた。その處女作は『傾城懷子』といひ、元祿十二年の作である。名残の作は『傾城無間鐘』といつて、これは享保八年の作に係る。この二作の間の年月は二十五年で、著はす所は四十餘篇に上り、その中で『心中二つ腹帯』、『鎌倉三代記』等を傑作とする。『堺土産心中泪玉井』は若太夫が堺に下つた時に偶然起つた事件をと

つて一段物に作つたもので、未だ傑作を以て許すことは出来ないけれど、豊竹座に於ける心中物として世に知られてゐる。海音の豊竹座にあるや、元禄十六年竹本座に『曾根崎心中』が出づれば、之に對して豊竹座では翌年『八百屋お七』を出し、寶永二年かれに『明天皇職人鑑』があれば、之に應じてこれでは翌年『播州曾根松』を作り、正徳元年かれに『冥途の飛脚』が出づれば直にこれでは『油屋お染袂白絞』を以て應ずるなど、頷頷して下ることがなかつた。されど才識も用筆も共に門左衛門と比肩することは出来なかつた。

西澤一風は安田蛙文並木宗輔と合作を出すこと十餘種『北條時頼記』が最も稱すべきものである。並木宗輔は初名を田中千柳といひ、『刈萱桑門筑紫樫』『夏祭浪速鑑』『二谷嫩軍記』等の秀逸の作がある。その門に丈助永助があつたが、是等は後に多く演劇脚本の方向に走つた。

第八章 演劇の發展

演劇は江戸時代に於いて發現した特殊の藝術である。演劇の形式上に於ける設備の多大なものと、技藝の練磨に長年月を要することとは、太平の時をまたないでは此の藝術の發達を求めることが出来なかつたのである。これまでに能樂もあつた、狂言もあつた、されどもそれらは室町時代の貴族間に於ける特有の藝術であつた。この時代に於ける平民の勢力の隆盛は、つひに古典藝術を棄てて、新趣味の表現を待つた。淨瑠璃は即ちそれである、演劇もまたそれである。

吾人はいま元禄時代の花と呼ばれた演劇について述べようとする。それを叙するには、まづその起原に溯り、しばらく筆を前時代に起して阿國歌舞伎から始めねばならぬ。

室町時代の末期、出雲大社の巫女に阿國といふものがあつたが、京都の北野のほとりの舞臺にやい子踊といふ一種の念佛踊をはじめた。慶長に入つて、阿國が名古屋山三郎と相結ぶに及び、男装して山三郎所作の歌曲にあはせて男舞をなし、また滑稽の動作

を混じ、樂器の演奏をも加へた。曲に「猿若大名」があり、「新發意太鼓」があり、「花笠踊」がある、皆能の狂言から脱化したもので、これを歌舞伎と稱した。歌舞伎の流行は、殿上にも、諸國にも及び、後には遊女を以て一座を組織するものも出でた。傾城、歌舞伎が即ちこれである。その主とする所は歌舞であり、容色の艶冶妖美であつた。かくて遂に寛永六年の禁令によつて停止された。

これに代つて更に進歩の跡を認むべきものは若衆、歌舞伎である。技藝は前者と異なるところは無いが、たゞ三味線の演奏の加はつたことと、女形の創められたことを記憶せねばならぬ。當時傾城事が大に行はれた。島原遊廓の實況を演ずる狂言がそれである。さては島原即ち芝居の異名とまでになつた。三都各劇場があり、諸座漸く整頓の域に近づいたが、若衆歌舞伎の主とする所は技藝ではなくて、不倫の媚色を以て觀客を誘ふのであつた。その風教に害のあることが世に認められるに及んで、若衆の容色に於いて唯一の生命とたのんだ前髪を剃り落させて野郎頭とならしめた。野郎歌舞伎はかくして出で來つたのである。

この酷令は藝術としての演劇には却て幸を與へた。根本であるべき技藝の發達は始めて期待されるのであつた。これよりさきに、江戸に作者都傳内があり、史劇「今川忍

び車」と稱する續狂言を創めたが、こゝに至り一齣一曲の切狂言は大概續狂言に移つた。寛永四年大阪には福井彌五郎衛門の「非人仇討」が出來、五年江戸には森田座に於いて曾我の三番續狂言が演ぜられた。それ等の趣向は單純であり、幼稚であつて、いまだ藝術として取るべき點は少ないが、兎に角に時代世話二様の發展を來すに至つた。

わが演劇史はこゝに元祿時代に入つて一段の光彩を放つた。豪奢華美の世は劇場をばいつまでも席張小屋では置かないで、その設備は大いに見るべきものとなつた。江戸に中村市村守田の三座相鼎立し、京に南北兩側の三座があり、大阪には道頓堀の三座及び堀江市の側の一座が出來た。名優の輩出することは眞に端倪に遑のない程であつた。京阪には坂田藤十郎があり、濡れ事を以て海内無雙と稱せられた。また山下京右衛門があり、大和甚兵衛があり、敵役を以て聞えた片岡仁左衛門があり、折紙道具と呼ばれた芳澤あやめがあつた。江戸には荒事の開山、よく金平物の勇壯の風をうつした市川團十郎があり、その暫不動辨慶等は一代の絶技でいはれた。また意氣を以て知られた中村七三郎があり、女房の開山水木辰之助があり、朝比奈の型を今にとゞめた中村傳九郎があつた。當時の俳優は各分業を以て特有の技を磨いた。立役といひ、敵役といひ、親仁方といひ、若衆方といひ、道化方といひ、或は花車方があり、若女方があつた。

これは實に技藝の進歩に大いに寄與する所のあると共に、一面その性格の表現に於いては一階級一類屬の普遍性を主とするに至り、遂に型に入りはてて生氣のない者ともなつた。當時また劇評が大いに發達し、技藝の巧拙を論じ、評判記に於いて盛に位附を作つて毀譽褒貶することとなつた。たゞ惜しむらくは、正徳四年大奥の老女江島事件がはしなくも累を斯界に及ぼして一大打撃をうけた。されども大勢の歸趨は既に決してゐたのである。群衆は擧つて堵の如く鼠木戸に迫つた。さらば即ちこれ等演技の基礎であるべき脚本は、果して如何の状態にあつたであらうか。

脚本とは、演劇の臺詞を始め、舞臺の模様俳優の動作服装等の注意をも記したものをいふのである。脚本はもと根本といつた。戯財録に、

往古は定まりし作者なし。役者の立者寄合ひ筋立して、白は出合より言うて見るをならしといひ、そのうちに定まれるゆゑ、根本といふものなし。

とある如く記載した脚本なく、又脚本家もなかつた。津打治兵衛は當代狂言作者の雄なるものであつたが、而もなほ言つてゐる、

もとより作者は役者の氣がねをするが家業にて、皆々の氣に入るやうに作つてやるが即ち作者なり。

げに脚本界は幾多の事情のもとに不幸な境遇にあつた。當時の劇壇に於いて重ぜられたのは俳優である。作者は唯々諾々としてその命に應ずるに過ぎなかつた。されば作者として一かどの見識をそなへ、曲筆に堪へ得ないものは、大方その位地を去らざるを得なかつた。かばかり技藝の發達したに拘らず、脚本の文學上に於いて評價すべきものの少なかつたことは、まことに遺憾であつた。

そのはじめは俳優であつて作者を兼ねたのである。都傳内福井彌五左衛門の如きはそれであつた。延寶八年に俳優富永平兵衛が顔見世の番付に、狂言作りと肩書したのが、とにかく脚本家の名の起つたはじめである。また金子吉衛門といふがあつて脚本の記載をはじめた。その後、立役であつて作者をかねた水島四郎兵衛親仁方であつて作者たる福岡彌五四郎、道化方であつて作者たる吾妻三八といふがあつた。三八の當り狂言に、寶永三年嵐座書卸の『お七歌祭文』といふのがあるが、かれは世話物に最も長じてゐた。

以上は京阪の作者である。されど、江戸も亦俳優兼作者の状態にあつた。河原崎權之助はすでに曾我狂言の二番續きを作つたが、その後市川團十郎も亦作者として三升屋兵衛と呼び、不被鳴神の自作があつた。中村七三郎は『淺間嶽』を自作し、中村傳九郎も

モサ詞を創始したといふ。中村傳七郎は最初は俳優で、後は専門の作者となつた。引き道具セリ出し押出しブン廻しなどの大道具を以て人目を驚かすことを力めた。

かゝる中に津打治兵衛(二三四四—二四二〇)は起つた。世に江戸作者中興の祖と稱せられたものである。その作の廣く知られてゐるのは「一心二河白道」に始まる。爾後『式例和會我』大角力藤戸源氏『忠臣いろは軍談』寶會我女護島臺『初誓通會我』等の作があつた。その作風は大方時代と世話とを折衷混淆するものであつた。門人に二世治兵衛があり、後に鈍通與兵衛と改めた。『矢の根』『帯引』『石橋』等がその作である。

今この節を終へるに臨んで一言しなければならぬのは脚本家としての近松門左衛門の事である。延寶五年、門左衛門は二十五歳の折、京都の都萬太夫座の作者となつて、藤壺の怨靈が藤の花から大蛇と變ずる趣向を立てて、大いに喝采を博した。その後、阪田藤十郎のために『傾城佛原後日』を作つた。元祿元年に萬太夫座で演じた、今源氏六十帖も、同四年の『水木辰之助餞振舞』も亦その作であつた。門左衛門が脚本家として世に聞えたことは、芝居の看板及び正本に名を記した事を以ても知ることが出来る。

殊に門左衛門が演劇史上に功績をとどめたのは、淨瑠璃と相提携せしめた事である。たとひかれが狂言作者としての期間は短くあつたにもせよ、この一事は斷じて忘るべ

きものでない。嵐三右衛門が喝采を博した丹前狂言に藤内太郎といふものがある。門左衛門は之によつて『雪女五枚羽子板』を作つた。三右衛門所演の丹波與作は、また門左衛門の淨瑠璃『丹波與作』の扮本であつた。『攝津夫婦池』は村山平十郎所演の『傾城石山寺』をさながらに踏襲し、『百合若大臣野守鏡』は竹島幸左衛門所演の『今用百合若』を模倣した。門左衛門が自作『傾城佛ヶ原』の梅房文藏をば『天鼓』の吳服中將に、さらに『驅山姥』の八重桐に重用した。これ等は皆門左衛門が歌舞伎からその題材と趣向とをとり來つたものである。かくあるうちに淨瑠璃はいつしか歌舞伎にその勢力を分ち始めた。たとへば『國姓爺』は、まづ萬太夫座に於いて、ついで大阪の三劇場に於いて、江戸の三劇場に於いて興行された。『會根崎心中』は二世團十郎によつて演ぜられ、後また『女夫星浮名天神』となつた。『心中宵庚申』は江戸に於いて、『花毛氈二腹帯』と改題して上場された。その他の諸作も亦大方演劇に移植された。紀海音竹田出雲等の諸作も亦さうであつた。並木宗輔の門流は、はやく淨瑠璃作者から一轉して、狂言作者となつたものが多くあつた。後の並木と名乗るものは大方演劇に係るものである。中にも宗輔の門人正三は最もよく聞えてゐる。されど、その活動時代はこの時代よりもやゝ後れてゐる。

第九章 浮世草紙

浮世草紙とは今様ぶりの草紙の謂である。現代の世相を描寫する小説の謂である。井原西鶴が彼の假名草紙の後を承けて之を始め、八文字屋物が更に之を承けて流行の絶頂に至らしめたのである。

西鶴(二三〇二—二三五三)はその傳を詳にする事が出来ない。大方大阪の町人であつたらう。西山宗因に従つて俳諧を學び、その奥儀を究め、談林派錚々之士として談論攻争よく貞門に當り、椎本才磨と共にその振興に努めた。されば貞門の俳諧『破邪顯正』に於いては、かれを罵つて阿蘭陀西鶴と稱するものさへあつた。かつて住吉の社頭に於いて一日に二萬三千句を吟じたので、二萬翁また二萬堂の號を得たのは著名な事實である。

天和二年(二三四一)師の宗因が歿した年、浮世草紙の最初の著である『好色二代男』の作があつた。これは西鶴の四十二歳の時で、俳諧の振興者はこゝに一轉して浮世草紙の作者となつたのである。越えて三年、貞享元年には『好色二代男』が成り、三年にはまた『好

色一代女』『好色五人女』(當世女容氣)『本朝二十不孝』(一名新因果物語)の作があつた。この種の作の流行は一方ならず洛陽の紙價を高くしたが、西鶴の筆はまた更に一轉した。四年に『男色大鑑』(本朝若風俗)『武道傳來記』(武家義理物語)等を出した。蓋し前年好色本に對する禁止の命令があつたからであらう。これ等は大概武門の譏諷を旨とせる話説か、さもなくば情緒の纏綿たる男色談であつた。しかも是等は亦いたく時好に投じた。かくて題材は三度革つて町人物となつた。貞享四年に出來た『日本永代藏』(元祿五年に出來た『世間胸算用』などがこれである。皆題材を町人の榮枯盛衰にとつたのである。

西鶴はかつて行旅の間に幾星霜を過したのであらうか、その事は其の著『一目玉鉢』に於いても、また各浮世草紙に於いても知ることが出来る。されど、それは芭蕉の一向に自然の美を咏歎讚美するのとは、おのづからその軌を異にしてゐる。その眼はまづ風俗に觸ひ、更に多く三都及び諸國の遊里に放たれた。かくてその蘊蓄を傾注したのが好色本である。世相と人情と、とりわけて人間本能の衝動、すなはち性慾に對して、その犀利な筆鋒の觸れておのづから成つたものが、即ち好色本である。好色本は實に西鶴獨特の壇上であつた。かれが半生の閱歷見聞はすべて之に集中せられたのである。

かく西鶴は観察家であつたが、それと共にまた讀書の人でもあつた。「源氏物語」は、の讀破したものでなくとも、當時俳諧家の間に行はれた數多き「源氏」の梗概をば必ず熟覽したのであらう。或はいふ「好色一代男」は「源氏物語」の模倣であると。

主人公世之助は七歳から戀を知りそめて、それが一生の間に戯れた婦女少年の數は幾千人放縱淫奔の限りを盡したが六十歳に及んで好色の友と共に船路遠く女護島へと向つたのである。げに篇中には明かに「源氏物語」に類似を求め得られるものがある。「口舌の事ぶれ」は源氏の君と空蟬との關係の如く、「形見の水桶」は夕顔の物の怪に似かよひ、「夢の太刀風」は源氏が河原院に於いて變化に逢つた話に類してゐる。かゝる例はなほ之を漁り求めたならば多々あるであらうが、更にまた「源氏物語」と「一代男」との間に大なる別の存することを知らねばならぬ。「源氏物語」は終始一貫してゐる一部の小説である。「一代男」は關係のない群小話の彙集である。「一代男」の世之助は畢竟たゞ無關係なる群小話を申貫にするための假設人物に過ぎない。源氏の大将は一方では感情のまにまに行動しながらも、他面ではまた道義の一念と苦悶する煩悶がある。世之助は蜜の甘きに酔つてゐる狂蝶の生涯で、些の悔恨もなければ道念もない。かの書には盛者必衰の世相がある、悲痛の極心身を腐蝕する「幻」の巻、または厭世悲哀の情調の溢

れた「宇治十帖」がある。この書には此の地の歡樂になほ飽き足りないで、更に遠く女護島の理想郷に赴くの結末がある。「一代男」に見るものは、たゞそれ快樂ある耽溺である沈湎である。二代男の内容もさうである。三代男も亦これに洩れない。

『二代女』は『一代男』にまさつた傑作、好色本の髓腦を以て目されたものである。北山陰に隠遁した老女が、その宮仕へ遊女世間寺の大黒などと移り行く身の上を語るに託して社會の裏面を描寫してゐる。「五人女」は當時の巷談に隠れのなかつたお夏清十郎お七吉三おさん茂兵衛樽屋おせん源五兵衛の情事を叙述したもので、西鶴の著作中最も小説的趣向に富んでゐるものである。これを近松門左衛門の「源五兵衛おまん薩摩歌」『五十年忌歌念佛』に比較したならば直に二者の別を知ることが出来る。「近松は道義の上に立ち、西鶴は社會の制裁を超絶してゐる。痴男痴女の行爲にも同情の涙を惜しまぬのは近松、冷かに文明の闇黒面と人間の罪惡とを抉出するのは西鶴であつた。西鶴は實に奇警の觀察と精透な眼光とを以て、極端な寫實の態度に出たのであつた。放漫な時世でもやがて緊縮するのと同様に、さきの遊蕩兒は今更めいて勤儉呼ばはり身代のやり繰り家業の才覺などを記して精緻を極めてゐるに驚かされるが、しかしなほこの種の著作にも西鶴獨特の觀察と筆致とを見ることが出来る。

西鶴はもと俳人であつた故に、その文體も俳諧から出でて、雅にも俗にもあらぬ自由奔放の一體を成した。突如として語句の轉變し、又は繼續する所に、遑勁の見るべきものがある。たゞその省筆は時としては度を過して、或は文意の朦朧を來たした跡が認められる。

西鶴の模倣者は漸くその數を加へ行く中に、よくその風體を傳へて能文の譽を得たものは西澤一風、錦文、清都の錦である。共に寶永享保頃の人。また西鶴の門に北條團水があり、青木鷺水がある。

都の錦は、穴戸鐵舟の別號とある事を以て、遠島に處せられたが、その京にあるの日、「御前御伽婢子」「元祿會我物語」の著があつた。その「會我物語」は蓋し浮世草紙に傳奇物の趣向を加味したものの先驅である。

一風と文流とは共に長ずる所は淨瑠璃であつて、小説家としては聊か後れて出でた自笑、其磧にその名聲を邁つた。されど、其磧の脚色を具へて一篇の首尾一貫するものは、一風文流に始まつた。この點に於いて、自笑等は正しく承繼者の位置に立つのである。一風に「御前義經記」があり、「風流今平家」があり、「町人身の手鑑」がある。文流に「榮大門屋敷」があり、「熊谷女編笠」がある。後者は寶永三年京の下立賣、堀河東へ入る民

家にあつた女仇討を骨子としたもので、同年に刊行したのである。當時最近事件に取材する事は、漸次行はれ始めた。上に列擧した書は皆一部一條の結構を有してゐる續き物で、讀本に近い性質と脚色とを具備してゐる。

團水には西鶴の「日本永代藏」を模倣した「日本新永代藏」がある。この種のものに月尋堂の「世間用心記」がある。團水にはまた怪談の書「一夜船」があり、之に類するものに青木鷺水の「お伽百物語」及び「近代因果物語」がある。鷺水には又假名草紙の「堪忍記」等の教訓物を踏襲した「本朝新堪忍記」がある。これに屬するものに林文會堂の「武家堪忍記」があり、月尋堂の「武道眞砂日記」がある。かくの如く新著相踵いで出でて、應接に追のない中に、八文字屋物の聲望がひとり高かつた。

八文字屋は京都の書肆である。店主は安藤八左衛門といひ、自笑と號した。淨瑠璃の正本及び芝居評判記を發刊して世に聞えてゐた。芝居評判記はもと遊女の細見に基き、その位附もまた遊女の位附に模したものであるが、自笑は更に之を遊女の上に轉用して「傾城色三味線」といふ作を出した。時は元祿十四年である。

「色三味線」はすべて五冊、島原吉原新町鐘木町室津等の遊女の名寄を載せ、それに毎冊五條づつの小話を附録としたものである。文辭内容共に西鶴の浮世草紙に似てゐる。

が三味線の題號が甚だ時好に投じたので、その後『曲三味線』、『繪三味線』、『友三味線』、『二挺三味線』、『歌三味線』、『連三味線』など、かの『色三味線』と合せて所謂八文字屋の七三味線といふものを世に公にした。この時に於いて、さきの名寄はいつか客となつて、附録の小話が却て主となつた。

花柳の巷話も篇を重ねてはいつしか陳腐に歸する。されば作者は此に趣向を一轉して當時行はれた『贅歎記』に附會して『傾城禁短氣』を出した。宗論談義に事よせて、男色女色の優劣を事例をかしく叙述したものである。この書が世に行はれて、作者の名も次第に高くなつた。さはれ、今まで作者と思はれてゐた自笑は眞の作者ではなかつた。正徳四年に『役者目利講』が書肆江島屋から刊行されるに及んで、世人は始めて眞の作者に接した。江島其磧といふのが眞實の作者であつた。其磧がいふには、

この作者其磧、松本治太夫方へ淨瑠璃を作り遣はし、その語り本を八文字屋へ遣はし板行させ候てより、年々の評判本は申すにおよばず、傾城色三味線又は曲三味線禁短氣傳受紙子、色情あひ雛形御伽會我的類なくさみの書、年々數多遣はし候處に、各々様の御意にいり、八文字屋八文字屋とはより浮世本評判本の名取のやうに罷りなり候事、八文字屋の功にて候や、作者其磧のにて候や、此段はゞかりながら世上の人さま御

了簡被下候。

其磧二三二七―二三九六は通稱を市郎右衛門といひ、放縱のために家産を蕩盡した後、小説に筆を染めて口を糊した。即ち八文字屋物の代作をなしたのである。八文字屋物の名利ともに盛なるに及び、兩人合作の署名をなしたが、後更に利益上の紛擾から、斷然八文字屋と斷ち、その子に書肆江島屋を出させ、『役者目利講』に於いた内情を曝露した。自笑は大いに狼狽し、『役者色景圖』に於いて抗辯し、爾來刊行書上に於いて論争をつゞけ、更に多田南嶺を聘して代筆をさせた。其磧もまた筆力を鼓して大いに力める所があつたが、八文字屋の從來の名聲に壓せられる傾きがあつた。しかし、その後自笑も其磧をば勁敵侮り難しと見て再び相和し、また合作の署名で出版を續けた。その競争の位置に立つたことは前後六年。

その競争の期間に於ける八文字屋は依然たる舊様を守つて野郎遊女の小話をくり返すに過ぎなかつたが、其磧は常に新趣向を出すにつとめた。その最も注目すべきものは『世間息子氣質』である。これは奇警の觀察を以て浮世草紙に一生涯を開いたもので、所謂氣質物の嚆矢である。『世間娘氣質』が相ついで出でた。これもまた其磧が傑作の一つである。

かくて自笑との和成るや、其磧は八文字屋及びその他の版元の爲に筆を執つて、多作の驚くべきものがあつた。その中に『風流軍配團』『義経倭軍談』『商人軍配團』『渡世身持談義』等が傑出せるものである。其磧の歿後、自笑はその子の其笑と連署して著述を出した。しかし其等は南嶺の手によつて成つたものである。

南嶺(二三五八—二四〇六)は名を義俊といひ、壺井鶴翁について有職故實を學び、博識を以て稱せられたが、素行の修らないので非難をうけた人である。其磧自笑が不和の際に、自笑に代つて縦横の奇才を揮つて八文字屋物の著作に従ひ、輕妙の文辭をなした。その作では『世間母親氣質』『鎌倉諸藝袖日記』が最も聞えてゐる。かくて、延享四年に自笑が死に、寶延二年に南嶺が歿して、八文字屋物もつひに寂寥を告げ、たゞ評判記の出版によつて辛うじて命脈を寛政天保に繋いだ。

要するに、八文字屋物は多種多様であつた。或は軍記物實録物の後を追ひ、淨瑠璃の趣をも加味した時代物の類がある。其磧の『國姓爺明朝太平記』の如きは、その最も知られたものである。されどこれは未だ深く稱すべきものではなかつた。特筆すべきは西鶴の好色物を模倣した種類の作であつた。『色三味線』の類がそれである。されど、文辭に西鶴の遒勁もなく、内容にその奇警もない、複雑な脚色と暢達した筆路とが多少優

れたとも、いはばいふべきものがあるのみである。これにつぐものは氣質物であるが、それは嫖客遊女の性格描寫から出でて一般の人物に及ぼしたもの。西鶴の『當世女容氣』も實は當世婦人の特質を寫したものであつた。今や息子から手代役者、商人、母親、長者にも及んだ。いづれも或階級に屬するものの特性を描寫して、その口吻動作を縦横に活躍せしめた。この流行は甚だしく、また遙かに後にまでも續いた。

第三期 文運東漸時代

第一章 時代の概観

元祿文學が近松と西鶴とを擁して京阪の地に光彩を放つたことは、最早昨日の夢と過ぎ去つた。水も動かなければ腐るの道理で、今や京阪の文藝は沈滞の極に達して、さきの千紫萬紅の偉觀は杳としてその影を没した。竹本豊竹二座の操も衰微に歸すれば、八文字屋本も舊套陳腐に陥つた。然るに、江戸は新興の文藝を拉して起たうとする。京阪文運の移植に孜々として力めることも、こゝに數十年漸く蕪雜粗笨を抛つて、始めて文明の華に接しようとする。洒落本の祖たる「遊子方言」また讀本の祖たる「本朝水滸傳」の刊行も實に明和安永の際である。また江戸の淨瑠璃界に福内鬼外を得て、喝采の聲の高く揚つたのもこの頃である。これ實にこの期をば地理上より見て、文運東漸時代と稱する所以である。

もしそれ江戸にその居を移し、江戸にその學を講じた賀茂真淵に至つては、學統を荷田春滿に受け、その遺志を奉じて國學の基礎を大成した。これ即ち前期の事業を繼承

したもので、更にまた次期に於ける宣長篤胤のために、その素をなしたものである。かくの如きは、たゞ國學の上に於いてのみいふべきではない、この期の文藝は一として之を前期に承けて後期に傳へないものはなかつた。前期に於いては、ひたすら性理を明かにし、彝倫を窮めた漢學の後をついで、各方面に研究を廣め、廣めて純文藝としての詩文の學も大に行はれ、支那情調支那趣味の間に唸唱するの徒も、多く出でた。かの詩文を鑑賞するの極、それが稗史小説をも研究し、耽讀し、或は翻譯し、或は翻刻し、更にその趣向と脚色とを我に移さうとして、こゝに次期に於ける讀本を發生するの因をなした。浮世草紙の奇警な觀察と、八文字屋本の暢達した筆致とは、相合してこゝに洒落本の新様を生じ、洒落本は更に次期に於ける人情本に推移しようとする。故に、この期の文藝は、一面からいへば、元祿期の完結と見るべく、他面よりすれば、江戸に於いて發すべき文化文政度の精彩の端を開いたものとも見るべきである。この時代の文藝は、獨立のものとして見るよりは、寧ろ歴史的價值に於いて優つてゐるものである。隨つて、この期に於いては、特筆すべき程の偉大な文人に接する事の出來ないのを遺憾としなければならぬ。眞淵の如き一二のものを除く外は、只功を陳吳として留めたに過ぎなかつた。然し、これは實にまたこの期の特色であつて、已むを得ざるもの、深く遺憾とする

には及ばない。寧ろ最も遺憾とすべきものは却て他に存した趣味の低下といふ事がすなはちそれである。元祿の世は驕奢華美の世であつたが、而も一面國民自覺の世であり、生々躍々の時であつた。剛健明快といふが實に當時の風尙であつた。然るに何事ぞ、明和安永の世は安逸惰弱の世、輕浮柔婉の世である。纖弱淫靡といふ事が、この時代のすべてに通じて最も著しい特色である。當年の生々躍々たる元氣國民の自覺、今はいづこに於いても之を求めることが出来ない。

世をあげて茶事挿花に心をくゞき、豊後節富本節にうき身をやつし、縞縮緬の上着、役者桑の下着、衣類對たけの羽織を着込、紐をさきの方で小さく結んで、駒下駄の齒にかゝるやうにして下げ、腰のものは落しざしに、懐手して市中をぶらつく文金風の髪、結ひぶりや、三日月のやうに細く上下よりすり込んだ、癩肩や、さては駄洒落地口、談言、葉に意氣揚々たるあさましの姿を見たならば、誰かまた輕妙をこれ尙ぶ、黄表紙、猥雜をいとほぬ、菖蕪本酒脱これ足れりとする川柳狂歌が、鬱然雲の如く興つたことを怪しむものがあらうぞ。また誰か江戸文學に於いて結構複雑にして思想高遠な大作雄篇を望むものがあらう。

それにしても、珍らしかつたのは十八大通の豪遊であつた。十八大通とは多く蔵

前なる札差ツカサの徒である。旗本御家人の俸祿たる倉米の請取方から賣買をも受負ひ、更に祿米を抵當に金を貸して高利を貪り、ために巨萬の富を累ねるに至つて、遊興三昧、或は意氣と稱し、或は粹と稱して、通人の名聞を争ふに至つた。中にも、その第一人たる大口屋治兵衛が委こそ、二代目柏筵以來の助六が扮装そのまゝに、大黒を眞向に色ざしの加賀紋に染めさせた黒小袖小口の紋付を着流し、鮫鞘の一腰一印籠、下駄を穿いて大門を入れ、仲の町兩側の茶屋の女房出でて、そりやこそ福神様の御出でと、わやくといふ騒ぎ。これは札差が常に武士に應接するためにおのづから品位が高く、また江戸前の豪放な氣風が存して、かくの如きものを出したのであらうか。利倉屋庄左衛門は銀の針金元結で、藏前本多に髪を結ひ、文魚は落魄の後も人前飾つて、御屋敷に行くふりして丸の内に小便しに行くなど、すべてこれ名聞の沙汰、虚榮の競争、誰かまた元祿期に於ける紀文奈良茂に比すべきものがあらうぞ。戀愛もまた虚榮の競争、遊戯の沙汰、誰かまた近松に於ける相思纏綿未來を契つて、莞爾として死に就くの意氣を討ねべきものがあらうぞ。吉原には揚屋もあらずなり、遊女に太夫の位もあらずなり、世には只淫靡の風のみがひろまり、三笠附冠附の博奕に類する事のみが行はれた。これを一言で言ひあらはすならば、すべてこれ趣味の墮落で、それは悉く當代の俗文學に於いて明かに反

照されてゐる。

學者の如きでさへまたさうであつた。迂遠な理想説を持して堯舜の世を夢みるの徒でなければ、徒らに玩物喪志の輩に過ぎなかつた。「悟窓漫筆」のいふ所をきけば、近年は修養の餘習學者學問して義理を講ずる事は得知らず、唯書畫古器物を好み筆硯文房の具を集めて學者の態を裝飾し、無學不文にて藝苑に濫入して學者文人の名を冒さうとする、典籍も書畫器物と一樣の玩物となり、學問も風流好事となり、今や學者學問を業とせずして、書肆や古物を業とするものが多くなつたと。

風來山人の『飛花落葉』にもまたいふ、孝悌忠信を口に稱し身に行ふ君子ありとも、當世これを稱して野夫といひ、武を知り國家を守る者を人嘲りて新吾左といふ、またこの譏を免れんと思ふたわけは、ぬしと呼び、わつちと稱へ、顔は白きを厭はず、脇差は細きを厭はず、今の浮世に交はらんもの、この境を知らねばならずと。

不眞面目な世、墮落の世、一代趣味の低下は止まる所を知らない。さすがに英明の將軍吉宗は節儉自ら奉じ、尙武の氣風の發揚に力め、財政の整理、府庫の充實に意を專にしたので、質素健實の風も大いに起つたもの、それも一時の現象に過ぎなかつた。されば吉宗が綱紀の振肅もその功や大いに説くに足らず、却て人心の萎靡を來した觀がな

いでもなかつた。享保七年(二三九二)の御觸書中主要なものを挙げると、すべて五、

自今新板書物之儀、儒書佛書神書醫書歌書すべて書物類、其の筋一通り事は格別猥りなる儀異説等を取交へ作り出し候儀堅く可爲無用事。

只今まであり來り候板行物のうち、好色本の類は風俗のためにも宜しからざる儀に候間、段々相改め絶板可仕候。

人々家筋先祖の事杯を彼是相違の儀ども、新作の書物に書きあげては世上に流布致候儀有之候、右の段自今御停止に候、若し右之者有之、其の子孫より訴出候に於ては、愈度御吟味可有之筈に御座候。

何書物によらず、此以後新板のもの、作者開板元の實名奥書に爲致可申事。

權現様の御儀は勿論、總て御當家の御事、板行書本自今無用に可仕候、無據子細有之は奉行所へ訴出で差圖を請け可申事。

これによつて見ると、法令が少しも苛酷であるとはいふことが出来ぬ。當時の淫猥な幾多の書籍に對しては、かゝる制裁こそ寧ろその宜しきを得てゐるともいひ得るのである。しかしながら、事の苟くも將軍家に關するものは斷じて筆にすることを許されず、或は異説などを取り交へて作り出す事を禁じて、思想の自由を拘束するなど、文藝の

發達を待つのではなく、趣味の向上を期するのでもなく、要は單に社會の秩序安寧を保たうとするにある。否、その主とする所は一に爲政者の權威を縮めないやうにしようとするにある。これ實に一代を驅つて因循固陋に陥らしめたのである。この因循固陋とかの趣味の墮落とは相合して、當代の文學をして萎靡不振の状態に至らしめたのである。その墮落より脱し、その固陋を破らうとするも、そこには幕府の壓迫があり、迫害がある、憤懣自ら發して嘲罵の文をなした風來山人に見るべき作のあつたのもこれがためである。白眼世相を遊戲視して、その滑稽洒落を狂歌に發した蜀山人に稱するに足るものあつたのもこれがためである。かくの如く看來れば、文運東漸時代の文學も、また決して之を等閑に附すべきものではない。

第二章 詩文の勃興

「この期の漢學を叙するには、まづ三事項をあげて説かねばならぬ。三事項とは、學派の紛争と、詩文の勃興と、支那小説の流行とが、即ちそれである。

さしにも天下を風靡した徂徠が一たび世を去るや否や、蘭國の徒はつひに朱子學派の論難攻撃の的となつた。そしてその二大學派以外にも、新學説の陸續輩出するものがあつた。されども、その多くは所見を異にして然るのではなくて、たゞ人を以て言ふに過ぎない。井上金蛾がいへるやうに「學問の道同好にして否なるもの、異趣にして佳なる者がある。世人阿黨たゞその己に同じきを稱して、己に同じからざる者は没して説かない。甚しきは彼我を譽む、我も亦いかで彼を稱せざらん、彼我を毀る、我も亦いかで彼を議せざらん」と云ふのであつた。この風一蕩、浮薄日に成り、市井の無頼のやうに目を瞋らし、臂を攘ひ、喜んで人を罵詈する。士たる者の當さに愧づべきものであつた。新學派の主なるものには折衷學派がある。片山兼山及び金蛾の首唱する所であつて、更に山本北山、龜田鵬齋、太田錦城によつて完成された。兼山二三九一—二四四二もと

徂徠の流を汲んで立つたが、疑難を挟み、古註疏によつて經を説いたが必ずしも拘泥しなかつた。金蟻二二九九二―二四四四名は立元、字は純卿、徂徠の學說、仁齋の學說兩つながら學んで共にその意にあはず、別に一派をなした。訓詁は漢唐義理は宋明、また詩は中唐晚唐文は韓柳歐蘇を取つて、大いに江戸の學風を正しうした。その經義は朱熹、王陽明、伊藤仁齋、物徂徠の異同を論じ、その長ずる所のすべてをば混じて一家の言をなさうとしたのである。その著『經義折衷』、『匡企錄』、『讀學則』の説くところ、皆それであつた。

また皆川洪國、吉田篁墩の考證學派がある。洪國二二九九四―二四六七名は愿、字は伯恭、別號は筠齋といひ、京の人であつた。その説く所は、字義を明にしないでは文は作られず、書は解せられぬといふにあつて、象形聲音を研究し、易詩書春秋等を考證して一新機軸を開いた。その後を繼いで立つたのが篁墩である。篁墩二四〇五―二四五八名は坦、字は資坦、はじめ金蟻に學んだが、やがて四子六經を研究し、校勘して、最も精密を極めた。その著『古文尙書孔傳指要』、『論語集解異』等がある。

その他『玄語』、『贅語』、『敢語』の三語を著はし、條理學を説き出して、神儒佛老の以外に一新學說を創めた三浦梅園二二三八三―二四四九名があり、『夢の世』を著はして、宇宙の森羅萬象を説破しようとした山片蟠桃二四〇八―二四八二名があつた。これはたゞ諸學派

の一端を示すに過ぎない。その紛争は寛政異學の禁の出づるまでは停止する所を知らなかつたのである。猶次期のはじめに於いて更に説くであらう。

學派かくの如く相わかれ、各その主張する所を取つて動かす、各方面に於ける研究の進むと共に、詩文の學も大いに起つた。木下順庵の門下多士、濟々桃李を以て滿された中に、専ら心を詩文繪事に潛めたものは、祇園、南海である。

南海二三四五―二四二一名は瑜、字は伯玉といひ、紀州侯の士で、早く木門にあつて聲名あり、十七歳の時、自らその藝を試みるといつて、春分の日、午時より子の初に至るまでに、五言律詩一百篇を賦して、大いに稱せられた。されど、之を疑ふ者があつたので、秋分の日、午漏初下より賦し始めて、夜半に至るまでに百篇をなした。しかも前作と一の同趣同工のものはなかつた。そこで人は稱して今の賈生といふに至つた。著書に『南海詩集』、『詩學逢原』、『詩訣』等がある。その詩に於いて主として唱ふる所は影寫法であつた。順庵門下の會に韻を探り、用字を得て、『擣衣』の詩を賦していふ、『誰家少婦驚秋夢、玉杵夜寒擣練用、夜々鳳城月色高、朝々燕山雪花重』と。座にその題意を失つてゐることを咎める者があつた。南海はいふ、これ顯はさずして擣衣をいふものであると。順庵聞いて、これこそ深く鏡華水月の趣を得たものである、よろしく影寫法の赤幟を驤壇に樹て

よと。南海が主唱はかくして始まつたのである。南海は晩年徂徠の徒が模倣釘銀風を成すを見て、これを嫌ふの餘りに「詩盜判」を作つた。一生つねに他人の詩句を剽竊するを好める者が、冥府に於いて閻羅王のために訊問される状を叙して、大いに時弊を諷つたものである。

げに此の時に當つては、一世の詩風を擧げて、徂徠一派七子の風格であつた。その弊は剽竊雷同を事とするにあつた。南海の憤らなかつたのはこれが爲である。しかも七子の詩風即ち明詩の風格の行はれたのは、その行はるべき理由があつて行はれたのである。されば、南海の如きも、唐を宗とはすれど、また明の格調をも存して居るのであつた。江村北海その著「日本詩史」に於いていへるやう、明詩の近時に行はるゝは氣運の之を然らしめたのである。詩體はつねに氣運に従つて進遷する、而してわが詩史によつて證すれば、我邦の變遷は大方漢土よりおくるゝこと二百年である。わが元祿は明の嘉靖を距ること恰も二百年、七子の詩はまさに行はるべきであつた。されば、さきに那波活所が「備忘録」に於いて、水田善齋が「贈餘雜錄」に於いて、七子に論及するものがあつたが、氣運未だ熟さず、たゞ徂徠の時に至つて熟し、白石滄浪、蛟巖、南海、大抵徂徠と同時、竝に蘭國の餘勇を買ふものではないが、亦明詩の聲格であると。

今や徂徠の後、詩文を以て世に聞えたものの多い中で、服部南郭を以て第一に推すべきである。南郭(二三四三—二四一九)名は元喬、字は子遷といひ、また芙蓉館とも號した。京の人であつたが、若い時分に江戸に下つて、徂徠に就いて學び、後に柳澤公に仕へ、やがて致仕して専ら風流韻事に日を送つた。人の時事を問ふものがあれば、晒つていふ、文士迂濶時務を知らないで空談する、蹇人の道を謀る類であると。また敢て經義を説く事がなかつたが、しかも人は之を信ぜなかつた。南郭はその父元矩の遺風をうけて和歌にも通じ、また繪事にも通じて、畫論の聽くべきものも少なくない。南郭の詩集に四編ある世の人多くは詩文共に第一第二を以て未だしとし、第三第四を以て佳致に至つたとする。南郭は才の人である。故にその律聲動もすれば法度を失つたものがあるとはいへ、その合作に至つては眞に古人に配するに足るといはれた。

同門中、詩を以て稱せられたものに高野蘭亭、安藤東野、梁田蛟巖、秋山玉山がある。蘭亭、名は惟馨、字は子式といひ、譜記に長ずるは瞽者のならひといひながら、よく唐明大家の作を誦誦した。また自ら作す所も殆ど佳境に入り、南郭と聲譽竝び馳せた。東野、名は煥圖、字は東璧といひ、徂徠の一門中に於いて俊才遠く群を抜き、加ふるに刻苦勉勵したので、名聲大いにあがつた。されど咯血の疾に罹り、年僅かに三十七歳で歿した。徂

徠の悲痛、同門の憂愁は筆紙に盡しがたいものがあつた。蛻巖は白石及び南海と相並んで三大家の稱があつた。嘗て小集に於いて、人が「石見國如視」の對句を求めた時に、蛻巖は直ちに朗吟して「竹生島似筍」と應へた。その機才は驚くべきものがあつた。されば、時人は彼れを評して、人はその才の乏しきを憂へ、彼はその才の多きを惜しむといつた。蛻巖はまたその格調を屢變じた、はじめは宋を學び、中年に唐を取り、更に明を範とし、遂に初唐を以て標準となした。玉山は「八島懷古」「觸骸行」及び「富士山記」を以て世に知られてゐる。

先には徂徠あり、今や南海、南郭の徒の相踵いで起つものがある。太平無事の極、その謳歌の聲は、おのづから發して詩文とならざるを得ない。加ふるに二人共に畫才があり、船載の典籍によつて南宗文人の畫風を趁つて以來、その風また大いに盛に、藝苑に立つの士いよゝ多きを加へた。龍草廬といふが京にあつて、書畫會を起し、著作會を起し、或は春初の發會を起した。また嘗て嵯峨の酒舖のために「釀成春夏秋冬酒、醉倒東西南北人」の一聯を作つた。この好事の擧から、娼樓酒舖茶肆などで、或は横匾を出し、或は柱聯を掲げることが始まつたといはれてゐる。支那の俗をうつしたのは、獨り之のみではない、世の趨勢は自然と幾多の詩社を出すに至つた。その中で最も聞えたものは、

龍草廬の幽蘭社、江村北海の賜杖堂、高陽谷の瓊浦芙蓉詩社、片山北海の混沌社、安清河が市隱社、また服南郭の芙蓉社等である。その中でもとりわけて混沌社と幽蘭社とが、その名の著はれたものである。混沌社が嘗て詠史會をなし、一時馳稱してその警句を傳へ、その題を以てその人を稱すること、例へば岡魯菴が「跡留楊柳路傍水、望入芙蓉峯頂烟」の句あるによつて、西行法師の稱を得るが如きものがあつた。幽蘭社には香居敬、大江資衡、蟠君美、李景義等の所謂十才子があつた。

江村北海(二三七三—三四四八)は高祖の專齋より家世々その美を濟し、相繼いで先業を墮すことなく、毎月十三日諸名士及び門人子姪がその賜杖堂に集つて詩を賦することは、專齋の時より北海に至るまで五世、百五十年の久しきに亙つて未だ斷絶せず、當時賜杖堂詩盟會といつて世に誇稱したものである。當時詩文の流行はその極まる所を知らなかつた、されど、倫理をいはず、修養を顧みず、たゞ風流の戲をこれ事として、つひに相率ゐて輕佻浮華に流れやうとした。この北海の如き、資性敦厚加ふるに風雅溫藉を以てし、大阪の片山北海(猷)江戶の入江北海(貞)と共に三都の三北海を以て稱せられた中の第一人に推され、また『日本詩選』正續編『日本詩史』の好著があるけれども、なほ時人は『納錢入選江君錫』といつて諷つた。君錫は北海の字である。蓋し北海の『日本詩選』を著はす

際、好名の徒が詩稿を携へ行きてその採擇を請へば、北海は必ず刻費の資にとて若干錢を取り、僅にその一二首を收めたので、かくいはれたのである。時人また之に對して「待價作文龍子明」といふ語をなした。子明は草廬の字である。その草廬の傳を見れば、如何に輕佻の風が累をなしたかを見ることが出来る。草廬(二三七五—二四五二)名は元亮といひ、伏見の人でもと商賈の出であるが、簿書計算の暇に宇明霞の誨督を受け、唐明の諸家集を學び志を詩歌に留めた。明霞が草廬の經義を研究せざるを見て拒絶するに及び、草廬大いにこれを憤り、未だ嘗て明霞と相見たことはないと稱した。草廬は後に彦根侯に仕へた。その近江にうつる時諸友が送別の詩を編したものを「箱柳編」といふ。侯に従つて京に上つた時にも亦送別の詩があつて、これを編したものを「畫錦集」といふ。また孔文雄と唱和した詩を録したものを「龍孔損虎集」といふ。是等は刊行して公にしたので、心ある者でその誇驕賣名の甚しきを笑はぬものは無かつたといはれてゐる。草廬は致仕の後には京に出でた。草廬の所説は徂徠に左袒すれど、而もまた時流と異なる所がある。唐にあつては李青蓮、岑嘉州を推し、明に於いては劉青田、謝四溟を尙んで別に一機軸を出した。草廬は人の需に應じて文を作る時は、まづ謝儀の多少を定めて後に起稿した。故に、その速に成る事を欲するものは、必ずまづ財幣を贈つ

た。さればこそ「待價作文」の時評も起つたのである。されど、晩年には深くその汚名を慙ちて需に應ぜず、人を誡めて、文墨の瓊末に従事するなく、大いに意を經術に留めよといふに至つた。

草廬の名の世に藉甚せる時、長崎に高陽谷があつた。賜谷(二三七九—二四二六)名は舜字は君秉といひ、釋大潮に就いて詩を學び、詞壇の盟主を期した。賜谷は嘗て草廬を見て大いにその才を推稱し、草廬もまた賜谷を當今第一の人と稱美した。これは實は相謀つて互にその聲價を賣らうとするのであつた。賜谷はます／＼その聲譽を大にしようと思ひ、清國の商賈に賂して沈歸愚に書を送り、また吳中子に詩を贈らうとした。清商沈氏の答書及び七子の和韻を偽造して賜谷に致した。賜谷は欺かれたとは知る由がなく、再三拜詭し朝夕展玩してゐたが、後數年沈氏詩鈔の舶載するに及び、その事は遂に暴露した。この笑ふべき一事は、當時文人の心情のいかに陋劣であり、また自己の聲譽に對して如何に營々としてゐたかを知るに足りる。

かゝる中に於いて、桂山彩巖の如きは大いに特筆すべきものである。彩巖(二三三八—二四〇九)は名を義樹、又は君華といひ、江戸の人である。林整宇の門から出でて幕府に仕へ、御書物奉行となつた。宏覽多識、しかも退讓を守つた。室鳩巢はかつて彩巖を

稱して、その行敦篤にして立誠、その材浩濬にして雄峭であるといつた。梁田蛻巖も亦彩巖に書を贈つて、その門戸を持して文壇の盟主となり、江左の文柄を司るべきことを勸めた。されども彩巖は遂に起たなかつた。その歿するに臨んで、遺言していふやう、「われ徳學なく、また官績もなし、墓碣碑銘を修めて虚譽する事なかれ」と。

詩文の流行は更に進んで小説の講究を促すに至つた。その最も小説稗史に通曉して、これが先鞭を附けたものは、岡島冠山である。冠山(二三三四—二三八八)名は瑛、字は玉成、長崎の人、華音に通じ、通事として萩侯に仕へたが、その賤役であるを慙ちて辭し、専ら性理の學を修めて、その名漸く聞え始め、京に江戸に浪華に帷を垂れて講じ、從遊するものが頗る多かつた。稗官の學を始めて唱へたのは冠山である。その頃この學を以て知られた者には、晁世美あり、陶冕があり、秦熙載があつたけれども、皆冠山の風を追つたのであつた。冠山の著に、『唐話纂要』、『唐譯便覽』、『通俗元明軍記』、『通俗明清軍談』、『小説讀法』等がある。冠山また羅貫中の『水滸傳』を校定し、國譯を施して世に行はうとしたが、その刻の未だ成らぬ中に歿した。享保十三年(一三九八)その初版が出来上つて、第一回より第十回に至るまでとあつたが、これこそ實にわが邦に於いて稗史を刻する事の始であつた。

岡白駒がまた冠山について世に知られてゐる。白駒(二三五二—二四二七)字は千里、號は龍洲、はじめは醫を以て世に立つたが、後に儒にうつり、京に於いてその名を專にした。その著書も甚だおほく、『詩經毛傳補義』、『左傳麟』、『荀子麟』、『史記麟』、『小説奇言』、『小説粹言』、『小説精言』等がある。或はいふ、白駒は常に人後にあるを忌み、みづから詩を以て量るに、服部南郭、祇園南海、梁田蛻巖の右に出づることは難いと考へて、また詩を賦する事がなかつたと。その『左傳』、『荀子』等の麟を著したのは、當時の學界の趨勢を顧みて、大いに名を成しやうと思つた故であるといはれてゐる。されど、識者はその臆斷の多きを笑ひ、却て傳奇小説に通ずる事を認めたのである。

この支那小説の講究は俗譯翻案を頻出せしめ、その結果は次ぎの化政時代に入つて讀本の流行を來すに至つた。馬琴が筆硯を以て縦横の才を揮ふことを得たのは實にこの二人の賜ともいはねばならぬ。

第三章 眞淵と蘆庵

賀茂眞淵(二三五七—二四二九)は遠江國敷智郡岡部郷の人で、通稱は莊助又參四といひ、諱は政信といつて、岡部新宮の神官の子である。父の命によつて、濱松の本陣梅谷甚三郎の家を嗣いだすが、天成の偉才は到底空しく一旅舎の主人で甘んずることが出来なかつた。こゝに於いて、その妻は早くも夫の意中を推察して、終身の策を決し、名を後代に揚げるやうにと勧めた。眞淵は遂に意を決して京に奔つた。時は享保十八年で、三十七歳であつた。眞淵が國學に意を傾けるに至つたのは、敬神の念の篤い父と歌の道に暗くない母との感化によるとはいはれてゐるが、またその友の杉浦國顯及び森暉昌に負ふところが多かつたのである。この二人は共に荷田春滿の門弟であつたので、眞淵はこの二友を通じて春滿を見、またその學説をも聞くことが出来たのであつたが、京に上るに及んで直ちに春滿の門に入つた。春滿はいちはやくも眞淵の才力の俊秀なるを見て、おのれの志を繼がしめるに足るを知り、その蘊蓄をあげて之に授けた。禮儀式典に關するものは養子春滿に傳へ、『記』『紀』『萬葉』の研究及び語學に關するすべては

眞淵に教へたのである。然るに春滿は程なく世を去つた。眞淵が春滿に就いて學んだのはたゞ四年に過ぎなかつた。されど、その後年の事業は實にその間に涵養せられたといはねばならぬ。かくて眞淵は春滿の歿後間もなく江戸に出で、村田春道の家にあつて潛心古學の研鑽に力めた。かゝる中に、醫師大野古道まづ名簿をおくり、尋いで加藤枝直（まゐ）に知られ、後にはその家に迎へられた。枝直は幕府の與力である、眞淵の住所がその所管内に屬するため、最初はその正邪を探りに行つたのであつたが、その説に服して交情日にまして篤きを加へたのである。かくて眞淵の名は漸く江戸に聞えはじめた。延享三年在滿の推舉によつて田安侯宗武に仕へた。これぞ眞淵の雲蒸龍變すべき機會の來たもので、爾來何等後顧の憂もなく、よく眞技倆を發揮することを得た。幾多の研究はかくの如くにして成ることが出来た。その仕官の年に『祝詞解』成り、寛延二年に『萬葉解』成り、寶曆七年に『冠辭考』成り、十年に『萬葉考』が成つた。この年致仕して閑散の身となり、十三年に近畿の旅程に上つた。眞淵が伊勢の松阪に本居宣長（のりなが）を見て師弟の誼を結んだのは、この途上であつた。あくる年明和元年に濱町に移り住み、自ら居を縣居（アオダマ）と號した。庭を野邊または畑につくり、處もいさゝか片ほとりであつたので、かく號したのである。この年に『歌意考』二年に『國意考』五年に『祝詞考』六年に『語

意考」成り、その他幾多の著を残して七十三歳の高齡を以て歿した。

眞淵の著書は大方上代の歌謡に關する研究である。そもく、和歌の復興または古學の興隆は先進の主唱に係るとはいへど、その功を收めたのは一に眞淵の力に待つものが多かつた。されば眞淵自からも「契沖はよく開墾せしも樹藝を終へず、わが師の大人春滿は樹藝せられしも未だ收穫を終へずして逝けり」といつてゐる。收穫の功は蓋し自らを以て擬したのである。本居宣長はまた眞淵を評して、「この大人の起らざる以前、學問は『古今』以後のみにて『萬葉集』は心も及ばぬものとして顧みず、然るをその古言をおのがものとして『萬葉』ぶりの歌を詠み出で古ぶりの文をさへ書き得るに至りしは、専らこの大人の教の功なり」といつてゐる。

眞淵が國學に於いて最も力を傾注したのは、わが國民的性情の闡明である。漢學は我邦に渡來して既に千有餘年を過ぎた。その所説こそは、人爲の極形式を尙ぶ風となつたので、わが國の天地のまに／＼治めようとするのとは全然相反してゐる。されば漢學の行はれるにつれて、雄渾素朴な風俗は次第に輕浮文弱と化し去つた。そしてその雄渾な精神の失せはてたことが自然に和歌の上に現はれて、丈夫ぶりを失つて手弱女ぶりとなつた。和歌の頽廢と漢學思想の傳播とは、相俟つて世は末となつた。あは

れ古に歸れ、板の屋根、土の垣、ゆふの麻の衣、葛卷の太刀とやうにして、天皇御自ら弓矢を携へて獵し給ふ程にこそあるべけれといふのは、眞淵の理想であつた。眞淵は斯の如くにして、古を以て今に優れりとし、今日の文明を棄てて遠き神世の昔にあこがれたのである。その所説の如何に老莊の言と相似たるの甚しきぞ。また何ぞ徂徠等の古文辭學派のいふ所と吻合することの多きぞ。眞淵が未だ郷里にあつた頃、古文辭派の渡邊蒙闇に就いて學んだといふのも、多少の所縁がないとは思はれない。

わが道を知り、また支那思想を受けない以前の古のわが國情を知るには、如何すべきであらう。上古の和歌、就中『記』『紀』『萬葉』の詠によるに過ぎた策はあるまい。古歌に明かなれば古意は明かである。然るに古歌を明かにしようとするには、まづ古語に通曉せねばならぬ。眞淵が『萬葉考』『祝詞考』などの註疏は、かくして出でたのである。その著書の大半が上代歌謡の研究にあるのもこの故である。その中にも、『萬葉』の研究は最も髓腦に入り、終に『萬葉解』『萬葉考』の大作をなしたのである。眞淵が上代和歌を以て古道闡明の手段となしたのは、その獨特の歌論に出でたのである。歌とは人の誠のおのづからに謠ひ出されたもの、その眞情の流露と形式の自然とは、上代の和歌に於いてのみ見るべきである、かの古今以後の和歌に至つては技巧を求め、粉黛の美を求めて、

詞花言葉の殿となつたといふのは眞淵が上代の和歌に對する意見であつた。かくの如き意見を有する眞淵の詠歌は、どんなものであつたらうか。その高弟たる加藤千蔭のいふ如く、眞淵の歌風は變遷して三時期を劃してゐる。千蔭はいふ、初の程は物學びたまへる荷田の春滿宿禰の歌にかよひて、華やきたよわき様なりしを、中頃より自らの一の姿となりて、雅にして調高く、しかも雄々しきすぢを詠み出され、齡の末に至りては、いたく思ひあがりて、設けず飾らず、誰も心の及び難き節をのみ作られき」と。即ち第一期は華麗の風體で、範を「古今」以後に採れるもの、第二期は雄大崇高の體たとへば

見わたせば天の香山畝傍山争ひ立てる春かすみかな

大比叡や小比叡の雲のめぐり來て夕立すなり粟津野の原

鳩鳥の葛飾早稻の新しぼりくみつゝ居れば月傾きぬ

の如く、よく「萬葉」の堂に入りて、更にまた典雅の加はるものがあつた。第三期に至つては、つひに角を矯めんとして牛を殺すが如く、詞彩の洗煉なく、たゞ無理に古語を綴り合せたやうなもので、興味いとゞ索然たるものが多くあつた。吾人は「徒らに太空に雲の梯たてて昇り難きやうに覺ゆる」といつた村田春海の言を首肯せざるを得ない。

この三期を通じて、眞淵が歌壇に於いてその覇を稱するに足るのは、その長歌を以て

雄大な思想を詠じ出した點である。これ實に他の隨逐を許さざる所である。眞淵の

歌文を集めたものに「賀茂翁家集」また「縣居家集」がある。眞淵の門下三百有餘人。その中にも本居宣長荒木田久老加藤千蔭村田春海加藤美樹榊取魚彦村田春郷栗田土満小野古道加藤常樹日下部高豊三島自寛等所謂縣門の十二大家、鶴殿餘野子進藤筑波子油谷倭文子の所謂三才女、これらは世にその名のかくれぬものである。これらについては、便宜上その活動の最も盛んであつた次期に於いて更に説くこととしよう。

さらば師範家の基礎鞏固である京都の地は當時は如何であつたらう。そこにはさすがに四天王と世に稱せられたものがあつた。僧澄月同しく慈延小澤蘆庵及び伴蒿蹊がそれである。

澄月二二三三五―二四五九は天台宗の僧で、叡山に上つて修學したが、後に志を變じて武者小路實岳の門に入つて歌道を究めた。その歌風は二條家の法式を重んじ、「草庵集」を以て和歌中興の龜鑑なりといつて之を推稱した。されば「萬葉」の素朴な格調はもとよりその意を得ざる所であつて、隨つて萬葉家を論難し、延いては契沖をも攻撃して、斯道の魔障「餘材」に過ぎたるはなしとまでも極言した。著はす所に「澄月千首」「垂雲軒和歌集」がある。

慈延(生死未詳)は大愚また吐屑庵と號した。はやくから冷泉爲村の門に入つて歌道を學んでその堂に入つた。澄月と所見を同じうし、契沖を罵つて、「契沖といふもので、歌よみの風卑しく悪しさまになりしが歎かはし」といつてゐる。この二人は共に才藻の見るべき所はあるけれど、なほ未だ舊派の系統を脱するに至らない。小澤蘆庵に至つては、その詩才といひ、その風骨といひ、そしてまた歌壇有数の硬骨漢であるといひ、まことに四天王中の白眉であつた。

蘆庵(二三八三—二四六一)は名を玄中といひ、もと尾州成瀬家の臣で、京都の留守居役であつたが、後に致仕して洛東岡崎の地に隱遁した。冷泉爲村の門に學んだが、その天品は遂にその法式のもとに踰踏すべきものではなかつた。嘗て爲村にむかつて、君が百歳の後には我は御家の弟子ではないといつたことがあつたが、果して破門をされるに至つた。或はいふ、これは爲村が蘆庵の偉才を察して、拘束するに忍びず、寧ろ蘆庵の爲を計つてなしたのであると。かくて、彼は進んで自己獨特の歌論を説き、自己獨特の歌風を詠み出し、いつしか四天王の雄と仰がれた。天明八年に火災にかゝつて、太秦にうつり住んだ頃が、その詠の最も圓熟渾成の域に入つた時である。されば、頼山陽は「杜詩以夔州爲上乘、蘆庵翁和歌爲當代第一、而其避災寓太秦時稱最深妙、故太秦者蘆庵之夔

州也」と評した。蘆庵の性行は一面には方正嚴肅、そして他の一面には豪放磊落であつた。赤貧に處して而も金錢を口にしなかつた、また富豪三井某が禮に恃れるのを責めて毫も假す所のなかつた、或はその家に蒲生君平を宿して優遇の至らざる所のなかつたなどは、いづれもその一斑を説明するに足りるものである。

蘆庵が歌學の著に「塵ひぢ」「蘆かび」或「問」「古今六義諸説」「ふりわけ髪」「ふりわけ髪自注」がある。その歌學説は、一は師範家の餘弊に對し、一は眞淵派の萬葉家に對する反抗から起つてゐる。師範家の病弊は今こゝに事新しく臚列するまでもない。彼等が和歌の精神本領を没却するのを見ては、眞淵は自然を説き眞情を説いた。そして眞淵は堂上派の歌の輕佻な風を破るに、高古壯大を以てしようとした。蘆庵は堂上派の頑冥を破るに、清新と自由とを以てしようとした。眞淵は「萬葉」の自然眞情を説いて而も耳遠い古語を用ゐたが、彼れが國學上の見地はこゝに至らざるを得なかつたのである。蘆庵は何等國學上の拘束を受けない、こゝに於てか極力眞淵の撞着矛盾を難じた。蘆庵は歌といふものについてさふ。

歌はこの國のおのづからなる道なれば詠まむするやう、賢からむとも思はず、け高からむとも思はず、面白からむとも、優しからむとも、珍しからむとも、すべて求めて

思はず、たと今思へる事を我いはるゝ詞をもて理の聞ゆる様にいひ出づる、これを歌とはいふ也。

と。げに「我いはるゝ詞をもて」といふ、これが眞淵の所説とは全然相反するものである。人情は古今に通じて一般なりと雖、言語は時世のうつるに従ふ。かく變り行く中に、古今に通じてうつらざる詞あり、また變ずる詞あり、變ずる詞を強ひて殘さむとするは、塵塚の中にくさぐさの古物あり、扉の破れたる、笏の折れたる、香のかけたるなどやうの物、拾ひあげつゝ拭き磨きなどして、あゝ珍しと遊びあへるが如し。古語を末代に傳へむと思ふ心はやさしけれども、傳ふべき古語あり、傳ふべからざる古語あり。

是に於いて、蘆庵はたゞこと歌といふものを唱へ始めた。それは心を求めないで、思ひいた所を、詞を飾らずに詠するのである。

古は大根はじかみにらなすびひるほし瓜も歌にこそよめ

言の葉は人の心の聲なれば思ひをのぶる外なかりけり

詞の雅俗は深く咎むべき所でない、その分つべきは情の雅俗である、その感想をあらはす誠實の有無である。かくして、かの所謂同情、新情の説は起り来る。

天地はすべて有情、萬物はすべて同情、これ歌のよく人を感ぜしむる所以である。誠の人情を以て天地萬物の上を思ひやるその聲が、おのづと發して歌となるのである。故に海士の漁り、山人の木樵、田夫の田植、秋田もる身の上、鳥の妻ごひ、草木の花さき、果實などの上をも思ひやらねばならぬのである。この人情や、古今東西同一軌に出づるとなれど、その水は古への水にあらざるやうに、決して陳腐に陥るものではない、人情は時々新しきものである。これその新情説である。この同情、新情の論と、たゞこと歌の説とは、やがて後の香川景樹を起たしめた。

この歌論を唱へた蘆庵みづからの詠は、これを『六帖詠草』に於いて見ることが出来る。作らず飾らず、ひたすら誠を現さうとして、題詠をば捨てて顧みず、すべて同情の聲、感想の響であつた。たゞ惜しむらくは、狂熱に乏しくて、淡々として水の如くであつたことである。しかし、そこにまた一味の掬すべきもの、あつたことを看過してはならない。宣長は嘗ていつた「都に歌人蘆庵あり、東に文人春海あり、わがくはだて及ぶべきにあらず」と。知識階級の人の蘆庵を見ることは、正にかくの如きものがあつた。次の歌、

大井川月と花とのおぼる夜にひとり霞まぬ波の音かな

世に傳へて絶唱と稱せられてゐる。

伴蒿蹊二三九三―二四六六名は資芳といひ、初は有賀長伯に、後は武者小路實岳の門に入つて歌道を究め、やがて一家の風をなした。方外の友の六如上人が贈つた詩にいふ、「老來幾部著書成、祇道屏居遂懶情、最是紙田閑不得、長遭筆未四時耕」と。蒿蹊大いに喜び、これぞわが實録であるといつて、その語をとつて閑田と號した。ひとり和歌に巧みなばかりではなく、また和文にも秀で、「近世畸人傳」「閑田耕筆」「閑田次筆」「閑田遺稿」「閑田文章」等の著がある。歌論の書には「國家八論評」及び「國歌或問」がある。眞情のまゝを美しき辭もてつゞけむは天に背かずと説き、また「古今集」を以て準據とすべき事を説いた。以上四天王を見るに、おの／＼その優れた所がある。評する者はいふ、澄月は老輩にして先達蘆庵は才氣秀發、古體今體自由にて詠歌の上手であり、大愚は新しく面白くよみて歌學に漢學を兼ねた、蒿蹊は澹泊を專一にして言外の餘情を志す高上の風體である。蓋し要旨を得た言であらう。

茲に四天王を結ぶに臨んで、溯つて筆を慈延と蘆庵の師であつた冷泉爲村に及ぼさざるを得ない。爲村二三六二―二四三四は凡庸な二條家中に於いては稀に見るの偉才であつて、高雅な風姿の唱すべきものも少くなかつた。歌論の書に「樵夫物語」といふ

のがある。樵夫と老翁との問答に擬して、歌道を説いたものであるが、さほど新しい意見のあらはれてゐるものではない。しかし爲村はかつていつた「心正しくて詠み出づる歌は正風に候。事に物に、歌に心をよせぬれば、自然に歌三昧になつて、餘念なく候。心正しければ身の禍もなく候。歌よむ時ばかり正しくする事にては無く候」と。またいつた「己が心より觀念し出だして實意實景より風情を得て、言葉つゞき優美に、心新らしく、たけもある歌の直に聞ゆるを正風と申すにて候」と。さすがに蘆庵の師たるもの言たる事が首肯される。爲村は門葉が頗る廣く、いづれの國にも弟子のない所はないといふ程であつた。その門下には、さきの二人の外に萩原宗固といふがあつて、「一葉抄」を著はし、中原廣通といふがあつて、「大澤隨筆」を著はし、阿闍梨法師惠日寂明といふがあつて、「歌道根源問答」を著してゐる。

第四章 俳諧の中興

さきに其角によつて起された江戸座は、輕快洒落な江戸人士の氣風に投ずる所があつたが、その風やゝ嵩じて洒落風となり、化鳥風となつた。洒落風は享保に入つて水間沾徳がこれを率ゐ、化鳥風は之に對抗して立羽不角がこれを率ゐたのである。また別に五色墨といふのがあつた、これは以上の二風に對して起つたもので、中川風葉松木蓮之、大場咫尺、長谷川素丸、佐久間長水等が互判回吟の歌仙五軸を催したのに創つて、大坂の松木淡々も之に加はり、大いに幽玄の風體を鼓吹しようとするのであつたが、これまた遂に前の二者と同様に、徒に奇智險怪人を驚かさうとするの極端に類するものとなつた。

されば蕉風の骨髓は今は何處に求めることが出來よう。げに入り易いものは俳諧の道であつて、また到り難いものは俳諧の道である。僅に十七字の小詩形に盛るに、日常鄙近の事を以てするが故に、高遠の思想をいふの要なく、また高雅を要するといふのでもない。亘爾波を知らぬ者どもも、競ふこと愈多くして愈、眞の詩の精神を忘れ、本領

を逸する。俳諧運座の催は頻繁となり、添削加點を以て口を糊する宗匠の徒も數は加はつて行つた。安永の際、江戸に於いては已に二三百を算するに至つた。そして、それらの輩は、多くは幫間の徒に過ぎなかつた。その説く所が固陋であつて、その詠する所が陳套であることは、また言を俟たぬ所である。

かく俗了し墮落した俳壇の趨勢は、天明にまで及んだ。天明に於いて六俳客の起つて中興の旗幟を樹つるまで續いた。六俳客とは誰々か。三浦栲良、谷口蕪村、大島蓼太、加舎白雄、加藤曉臺、高桑關更がそれである。おもふに、中興の事は、蕪村と曉臺と共に京にあつて、力を合はせて斯道の廓清を計らうとしたのに、關更が之に結合し、白雄と蓼太とが江戸にあつて遙に之に鼓應したのにあつた。その風格は蕪村に擬するものがあるけれども、まづその運動に先鞭を附けたものは栲良であつた。

栲良(二三八四—二四四〇)はもと伊勢風の出である。伊勢風はさきに涼菟に起り、乙由に傳はつたものであるが、その遺響を失つて陳套を事としてゐた。この時に當つて、栲良は冠附の宗匠から起つて俳諧に名を成し、伊勢に無爲庵を立ててつひに伊勢風の餘弊を一蹴し去つた。さばれ栲良の句はたゞ一段の清新を認め得るに過ぎない。かれはもとより蕪村と比肩すべき者ではない。他の五俳客とて、いかでか蕪村と同列

中において説くことが出来よう。まづ蕪村に就いて特筆せねばならぬ。

蕪村(二三七六一二四四六)は名を寅、字を春星といひ攝津の毛野村に生れ、のちに天王寺村に移住した。谷口の姓を與謝と改めたのは、後年丹後の與謝の海邊に住ひ、その風光を愛したからである。二十歳を過ぐる頃江戸に出でて俳諧を早野巴人に學んだ。巴人の歿後東北に行脚し、爾後信濃から奈良、吉野、更に播磨、讃岐、また九州と、足跡殆んど全國に遍き程であつた。五十歳に至つて始めて京都に庵を結び、五十五歳に當る明和七年に至つて京都の俳諧點者の一人となつた。蕪村はまた繪畫にも長じてゐる。所謂文人畫である。その飄逸な畫才は、池大雅と相並んで勝劣なきものであつた。蓋し蕪村自身が、吾に師なし、古今の名畫を以て師となすといつた如く、元明諸大家の畫風を研究して新に一家を成したのである。世の人或はいふ、用筆傳彩全然明人であると。これその俳句の風體に於いて漢意を見、また漢詩文の句法語格を取ることの多かつたのと同じ軌であつた。蕪村はまた俳畫といふものをも始めた。省筆の略畫、芭蕉以下の俳人を描いて躍如たるものがあつた。その形態を顧みない體は、その疎放磊落な俳風と同一轍に出づるものであつた。

蕪村はかつて洛西の別業に於いて、その弟子春泥、舍召波に會した時、俳諧に就いて説

いていふ、「俳諧は俗諺を用ひて俗を離るゝを尙ぶ。俗を離れて俗を用ふる、離俗の法最も難し。かの何がしの禪師が隻手の聲を聞けといふもの、即ち俳諧禪にして、離俗の則なり」と。またいふ、自然に化して俗を離るゝの捷徑は詩を語るにある、なほ繪畫の俗を去るに、多く書卷を読めば書卷の氣上升し、市俗の氣下降するが如きものであると。またいふ俳諧は門戸なし俳諧の門を以て門とする、畫論にいふ所の諸名家門戸を分つ事なくして門戸自らその中に存するものであると。またいふ「友とするは其角を尋ね、嵐雪を訪ひ、素堂を偈ひ、鬼貫に伴ふ、日々この四老に會して、わづかに市井名利の域を離れ、林園に遊び、山水にうたげし酒を酌みて談笑し、句を得る事は専ら不用意を費ふ」と。

この俳諧の意見を以て見れば蕪村がいかに俗俳諧者流と異なるかを知ることが出来る。蕪村はつねに俳諧禪を唱へたのである。それは俳諧の自在にある、師の句法に泥まず、時に變じ時に化するにある、されど、まづ蕉翁の寂契を慕ひ、古に歸らん事を思ふ、これ虚に似て内に應ずるものである、稱して俳諧禪といひ、傳法の法といふがこれである。蕪村は蕉翁の古にかへらん事を唱へるけれども、時代の趨勢は殆ど異なる方面に向はしめた。かくてこそ蕪村の眞意は達し得られるのであつた。蕪村の俳風を以て、芭蕉の俳風と比較して見れば、その態度に於いて、芭蕉の主觀的であるに對して、蕪村

は客觀的であつた。その題材に於いて芭蕉は自然から取つたものゝ多きに反して、蕪村は人事から取つたものが多きを占めてゐる。その趣味に於いて芭蕉は閑寂を事とするに反して、蕪村は活動を事としてゐる。即ち蕪村は、芭蕉を待つて始めて文藝の位置に立つことの出来た俳諧の未だ足らぬ積極的方面を補つて、こゝに眞の俳諧を渾成したのである。これがまた天明調の特色であつた。

蕪村は複雑な人事の活動を見て、客觀的にその委曲を盡さうとした。されば時間的關係をも詠じて、

御手討の夫婦なりしを更衣コロモカへ

の如き、一小説を讀むの感あるものさへあつた。かくの如き時間的經過を描き出すに際し、その十七字の小詩形は遂に多くの歴史的事實を捉へ、また多くの典故の據るべきものを取つた。詩の「王在靈沼於切魚躍」を引いては、

名月や神泉苑の魚躍る

といひ、陶淵明の「春水滿四澤夏雲多奇峯」によつては、

雲の峯四澤の水の潤れてより

といひ、「伊勢物語」によつては、

蟲啼くや河内通ひの小提燈

といひ、「枕草紙」によつては、

短夜を眠らで守るや翁丸

といふなど、一々擧ぐるに遑のない程である。限りある十七詩形の中に豊富な思想を盛らうとするには、勢ひ簡潔な漢語を使用しなければならぬ、また句法をば漢詩に取らなければならぬ。そこで蕪村は、

祇や鑑や髭に落花をひねりけり

月に對す君に投網の水煙り

これまた一には當時詩文の流行のおのづから然らしめたもののあることを知らねばならぬ。その編著に『新花摘』、『玉藻集』、『昔を今』、『一夜四喰』等があり、後人の編に『蕪翁句集』、『蕪村句文集』がある。また『蕪村七部集』とて、『其雪影』、『明鴉』、『一夜四喰』、『花鳥篇』、『桃李』、『續明鴉』、『五車反古』を輯集したものもある。

蕪村はもと巴人の後をついで二世夜半亭と稱したが、高井几童は更にその後を承けて三世夜半亭と稱した。几童には『井華集』があるが、苦心の吟誦すべきものが少くなかつた。

こゝに蕪村を叙し去るに臨んで、しばらく筆を六仙客以外に轉じて、蕪村の先蹤をなし、天明調の趨勢を導いた炭太祇に就いて一言を費さねばならぬ。

太祇(二三六九—二四三一)はもと江戸の人で、後に京都に移つて終生をそこに過した。その句作にあつては、苦心の極、俳諧三昧に入つて、家を出ないことが七日乃至十日の久しきに及んだといはれてゐる。嘗てその俳諧三昧に入つた折の事とか、時雨の中のかゝり湯に佗びゐた時、人より沸した風呂を荷ひよこして贈り物とせられたのに飛び込み、思ふ存分に浴して、さて吟するやう「頭巾脱いで戴くやこのぬくい物」と。脱俗の態度は自然に發してこの清新の調を成したのである。主とする所は人事の方面であつた。

盗人に鐘つく寺や冬木立

剃て住む法師が母の碇哉

の如きは、その一例である。太祇は一の新技巧を工夫した。人の會話をそのままに句中に詠み入れる事がそれである。

な折りそと折りてくれけり園の梅

怖すなり年暮るゝよと後から

かくの如きは當時また川柳に於いても見る著しい現象であつた。これは想ふに複雑な人事を叙するには最も都合がよかつたからである。太祇は「鬼貫句選」の撰者であつたが、蕪村も亦鬼貫を推して四老の一となした。二者の自然に契合する所があつたからであるが、實に時代の風潮の然らしめた所といはねばならぬ。

曉臺(二三九二—二四五二)は名古屋の人で、暮雨庵龍門等の別號がある。壯年の頃は江戸にも住み、また京都にも住んだが、遂に京都に居を卜し、蕪村と共に俳諧中興に力を盡した。その詠には洗煉の妙、蕪村に亞ぐべきものがある。

蘭更(二三八七—二四五九)も亦京にあつて、京都東山雙林寺中に芭蕉堂を結んで閑棲した。その風體は平淡の趣に拘すべきものがある。

蓼太(二三七八—二四四七)に至つては、更に溫雅の極、凡俗にすぐるものも少くなかつた。かれは江戸の人で、御用縫物師であつて、雪中庵二世更登の門に入つて俳諧を學び、後に雪中庵三世と稱した。その門葉は頗る廣く、門人三千餘人に過ぎ、文臺を許せる高足四十人以上もあつた。著書も亦甚だ多く、二百餘編に及び、中にも「附合小鑑」「發句小鑑」「天狗問答」など、夙に世に普及せるものであつた。蓼太はまた蕪村の風調を模倣する所があつたが、恃む所は才であつたので、その詠はやゝともすると理窟に陥り、説明に

流れ、或は俗氣に堪へざるものがある。然し、これは一面に於いてその句の人口に膾炙される所以である。

世の中は三日見ぬ間の櫻かな

五月雨やある夜ひそかに窓の月

むつとして歸れば門の柳かな

の如きは、人のよく誦んずる所である。

白雄(二三九九—二四五)は信濃上田の藩士で、春秋庵と號した。江戸に出でて白井鳥醉の門に遊んだ。その詠する所は、時に織巧に陥るものがあるとはいへ、流石に清新の趣が認められる。しかし、白雄の俳諧史上に於ける功績は、その創作の方面ではなくて、後進を誘掖する所のあつたことである。その著の『俳諧寂菜』といふのは、平易な俳論として世に知られ、一時その道の指南車となつたものである。

ひとり『俳諧寂菜』ばかりではなく、當時俳諧をば漸く批評の立場から見、學術の立場から見て研究しようとする風を生じた。即ち『俳諧古選』を著はした三宅嘯山、また『蕉門俳語録』を著はした五升庵蝶夢の如きは、その一例である。俳諧の道は、かの歌學が累をなした如く、また種々の法式方則をも生み出すに至つたのである。中興の業はさしも一

時榮えたもの、梶良歿し、蕪村去り、夢太白雄、曉臺、蘭更等また相踵いで逝いて以來、俳壇の趨勞は日に非にして、卑近平易な俳論の流行と相俟つて、すべてを俗化しようとするに至つた。

以上俳句の方面は略之を盡したと信ずる。されどつひに叙せざるべからざるものがある。横井也有によつて代表される俳文が即ちそれである。これこそ當時俳諧文學中に於いて、蕪村の俳句と共に最も誇るに足る作品の一である。

也有(二三六二—二四四三)はもと野有といひ、また蘿隱、半掃庵、紫江、知雨亭の號がある。名古屋藩譜代の重臣、御番頭御用人の要職に就いたが、やがて隱居して、悠々自適、日々吟詠にいそしむに至つた。はじめ漢學を小出侗齋から學んで造詣するところがあつたが、俳諧をば同藩の先輩で且つ芭蕉の門人であつた山本荷兮にまなび、後には支考の門人を師とした。也有はまた和歌狂歌に達し、和歌には暮水、狂歌には蠅丸を以て世に聞えてゐる。著書に『蘿葉集』、『蘿の落葉』、『峨洋篇』、『俳諧夢之蹤』等がある。

也有は温厚圓滿の人であつた。遯高隱君子と稱せられ、或は恭儉和慎、適の五徳を具せる賢者と稱せられた。されど、徒に嚴正のみで事に當るのではなく、滑稽の奇才の躍然たるものがあつた。或時美人と鬼との畫に題して、美人の傍に「もあり」と書し、鬼の上に

「また傍に「もあり」と書し更に「百合の花」とつけ加へ、「姫もありまた鬼もあり百合の花」として落老を墮若せしめた有名の話もある。也有は俳諧を以て一つの遊戯と視た。いはく「風雅を以て家業を妨ぐべからず家業を以て風雅を妨ぐべしせぬも其の日の俳諧にして障るも其の夜の俳諧なり」と。またいはく、「仁義道德は別に師あり、狐狸の輩に欺かれて俳諧と混すべからず」と。これ實に俳諧を以て生命とした芭蕉の態度と全く異なるものである。またいふ「いか程雅語艶語を御つかひ候逆も根が俗談の俳諧に馬子の摺小木のと申してはやさしからず候それをかき交てわがせこが虱つぶすの、いもの禪洗ふのと申候ては何とやら不都合に聞え申候」と。この俳諧を俗談といふ主義は之を蕪村に比較すると亦全く異なるところである。

也有の遊戯主義とその天賦の滑稽の才とを最もよく發揮したのは俳句の方面ではなくて、『鶉衣』によつて知られた俳文である。俳文ははじめ芭蕉によつて基礎をなし、許六支考があつて之を鞏固にし、こゝに也有が出でて大成するに至つたのである。芭蕉自らもいふ、われは俳諧文とて書いた事はない、今多く狂文を見て俳諧文と思ふのは謬見である、われは『源氏物語』『狭衣物語』『土佐日記』等皆俳諧文であると思ふと。されば芭蕉の俳文は氣品の高いことからいふと優秀なものがあるけれど、寧ろ雅文に近い一種

の混淆文にすぎないものが多くあつた。たゞその中に施された滑稽は許六支考に至つて大いにその趣を加へ、また俗語漢語雅語のすべてに互つて語彙を豊富にして、所謂俳文の一體を成した。それが也有に至つては更に縦横の才を揮ひ、恰も囊中ものを搜るが如き状がある。一體俳文とは俳人の感興を隨筆的にあらはしたもので、いはゞ俳句をば散文體にいひあらためたものである。俳人が古今の一大事變をも日常卑近の一瑣事をも同一様に見なし、遊治郎の愚言をも聖賢の箴言をもひとしなみにいひなす、脱俗超世の態度は、おのづから俗中の雅を最もよく現はすに適する文體を生じたのである。也有がいふ、

只和漢の故事古語を知り、俗の諺にも入りわたり、その影を用ゐてあらはならず、長きを縮め、堅きをこなし、俗にならず、雅に過ぎず、主意よく本末を貫きたるをこそ、調ひたる文章とはいはめ

と。也有の『鶉衣』前後續遺の四卷は、この意見を殆ど的確に具體的に現はしたものと云つてよい。その取る所の題目は大方卑近のものであつて、而も必ず中に一種の見解を藏してゐる。されど、その見解の多くは世故人情に通達せる餘りに出でたものであつて、人生の缺陷を認めるとはいへど、敢て之を抉出しようとするのではなく、たゞ平然と

してこゝに矛盾に對する笑を洩らし、また滑稽の境に遊ぼうとするのである。その淺くとも和漢に互つた學識は、これを現はすに無上の便宜をなし、その君子と呼ばれた人となりは、よく滑稽をして賤俗に陥らしめなかつたのである。

『鶉衣』は蜀山人の手によつて刊行されたものである。蜀山人の序によると、安永の初年、隅田川のほとり、長樂寺に遊びて、也有の「借物辯」を見て大いに感じ、更にその『鶉衣』を見るに及んで、とみに上梓の企をなしたのである。そして拾遺篇に序したものは六樹園である。蜀山人も、六樹園も、生前に於いて也有と知合ひではない、俳文に於いて私淑したのである。されば、後に流行せる狂文も、實に也有が後塵に立つものであつた。

第五章 川柳の消長

滑稽と洒落と諷刺とが滔々として風をなした當代の思想を、最も明かに言ひあらはしたものは川柳である。この新文學の起つたのは江戸の地である。輕快洒脫な江戸人士の氣象は、遂に之を生ずる事なくては止まなかつたのである。今こゝにその發達の跡を辿らうとするには、まづしばし、山崎宗鑑の古に溯らねばならぬ。

宗鑑の頃、二句のみの附合ツケアヒをなすものがあり、また附句ツケクのみで意味の明瞭なものをも出した。『犬筑波集』にいふ、

きりたくもありきりたくもなし

盗人を捕へて見ればわが子なり

と。『油糟』の如きも、『犬筑波集』の前句に附句を試みたものであつた。その風が延いて前句附マエクツケとなつて京坂に榮え、やがて貞享元祿に至つて江戸に盛になつた。前句附とは、宗匠が下の句即ち後句を出して上の句即ち前句をつけさせるのである。之に應ずる者は十六銅を出して入花料とする。それがやがて宗匠の口餌と化する。當時前句附

の宗匠は未だ專業の者なく、俳諧師が之を兼ねてゐた。元祿六年の「咲くやこの花」の點者には、池西言水、小西來山等があり、別本には青木鷺水、瓜生、晚山、椎本才麿があつた。春臺の「獨語」には前句附が流弊を生じた狀を詳かに叙してゐる。

前句附の法は、宗匠から下の句を出し、多くの人に上の句を附けさせて、點に第一第二の品を命じ、甲乙の次第に隨つて賞を行ふのである。その賞は布帛又は器物など若干の直ある物を出し、その品物を望まざる者には、その代價に相當する金銭を出すのである。この賞を得ようとするものが貴賤上下となく句を附けて點錢を費すところは、やがて博奕の類であつた。そして世俗の之を好むものが、ますます多くなるほどに、下の句に上の句を附けるのも猶わづらはしいといつて、宗匠から上の句の初五文字を出して、次の七文字五文字を諸人に附けさせる事になつた。冠附とも笠附ともいふのがこれである。

いつの間に 片しは失せて籬の後家

さまざまに うその口きく大晦日

の如きはその一例である。「獨語」には記されてゐないが、また春附といふものもあつた。これは宗匠が末の五を出して、上の五七を附けさせるのである。

道樂な息子に嫁を 取つて見る

の如きがそれである。褒美を取らうとする事が一層烈しく成れば成るほど、する事はいよく賤くなつて、寛永の頃からは冠の五文字を三ツ出して、三ツ冠に各々七文字五文字を附けさせて勝負を分ける事が行はれた。これが三笠附である。これではいよいよ博奕に近いものであつたが、その後は更に五文字の冠をも出さず、下の七文字五文字の詞をも止めて、唯數の文字を封じて外からその數をはかり、札を入れて、その數の當つたものを勝として、金銭を興へるやうになつた。かくては、全く博奕であるけれど、なほ本の名を存して三笠附といつてゐた。この三笠附が盛になつて、賤しい者は勿論士君子でも之に心を傾けて多くの財を費し、身を失ひ、家を亡すものさへも數知らぬ程であつた。されば享保のはじめに、町奉行から嚴禁の命が下つた。爾來これに關する布達が頻りに出でて、多い時には、一年の間に三四回にも及んだ。かうして三笠附は漸くその影を收めたが、寶曆の頃に成つて、また前句附の流行を來たした。江戸座の俳諧が流行して、かの洒落風、化鳥風、五色墨の徒が謎めいた句を吟じ、また滑稽洒落を盡してよみ放つたのが、なほ易きに移つて前句附の再興となつたのであつた。柄井川柳はこれ等の點者中の錚々たる者であつた。

川柳二三七八―二四五〇名は正道といひ、通稱は八右衛門と呼び、綠亭とも號した。淺草阿部川町の名主であつた。寶曆七年に萬句合の興行をなして以來、年々の例となり、また月次の千句合などをも興行した。寶曆の末、集るところの句一萬六千中、秀逸四百四五十を選んで細字に認め、大半紙五枚に摺つて發行した。その細字摺りが曆に似てゐるといつて、世に曆摺または曆板ともいはれてゐる。曆摺中前句がなくても一句だけで句意の解されるものを集めて一帖となし、『いもせ川柳摺』第一篇と號した。その時は明和二年(二四二二)であつた。おもふに古昔の摺は柳で作つたので、その名から思ひついて、この中にうまいものがあるとの意を含めたのであらう。これよりさきに、四時庵紀逸といふものがあつて、萬句を興行した折りにも、高點を附けた句を集めて、『俳諧武玉川』といひ、相續いで十篇を出版した。『柳摺』の體裁は蓋し之を模倣したのである。こゝに於いて、前句附の點者であつた川柳は、前句を離れて附句を獨立させたのである。前句附が獨立すべき趨勢は古くからあつた。元祿の頃から前句に七七の短句または五七五の長句をおくことは漸次に少なくなつて、

きびしかりけりきびしかりけり

日の本は空までとゞく假名遣

の如く、たゞ七音を繰返すが如き類が却て多くなつたのであつた。そして、この繰返しの如きは、附句にとつては寧ろ取り去るとも妨のないもので、附句は殆どすでに獨立の狀にあつたのである。川柳はこの趨勢によつて、俳句の形式を假つて俳句以外の世態人情を詠じようとするのである。世は程なくその風靡する所となつた。その句を川柳點の句といひ、通常略して川柳といふ。川柳が寛政二年に歿するまでに、『柳摺』は版を重ねて二十三篇に至つた。その子二世川柳をつぎ、二世の弟三世を嗣ぎ、二世の門人風梳庵賤丸四世をついだ。我が川柳は轉じて次期の化政時代に入つて、斯界はいよいよ隆盛を極め、『柳摺』の刊行はますます多く成つた。さばれ、四世に至つて、風體の革新を謀つて、『柳摺』といふ名をも改めて、『俳風狂句』と稱した。その趣意は、未だ全く前句附の域から離れてしまはなかつた川柳をして、獨立の地位を占めさせようとしたのであつた。されど、如何せん、その末がいよいよ廣く成つて、その風體は却て日に非なるものとなつた。

さて川柳のその後はどうであつたか。四世の後をついで五世となつた者は水谷綠亭である。綠亭は井上文雄・加藤千浪と交りが深く、歌學にも通じてゐた。その頃、内には天保の飢饉があり、外には黒船の騒亂があり、勤儉の令は頻りに出でた。五世はその

間にあつて柳風式法を定めた。その主なるものを擧げると、

政事に係りたる事は何事によらず句作選みなど致すまじき事、

近世の貴顯官員の實名など句中に取結びたる風調堅く引墨致すまじき事、

句選の規則は天朝を尊敬し敬神愛國を旨とし昔の貴人忠孝道德五常の教導、技藝の名譽、奇特の句體を尊み高番に据うべき事、右は自然善行の道、句案に浮み、勸懲の一端にもなるべきが故也。

かくて川柳はすでにその精神に於いて亡び盡した。阿世の極は、つひに川柳の川柳たる所以をも失はうとするに至つた。されど、表裏明暗の差はます／＼甚しく、卑猥口にすべからざるものが却つてその數を加へた。さる間に、その子が六世をついだ、かくて七世となり八世となつて、已に明治の人となつた。これ等はすべて形骸を相承するに過ぎなかつた。故に川柳を知らうとする者は、しばらく四世以下を顧みずともよい。要するに、川柳は初代に於いて最もよくその特色を發揮したのである。その不羈な點に於いて、川柳は遂に俳諧にまさつてゐる。言辭の選擇は勿論、切字また季の法則もなく、語數も時には過不及を許し、形式も亦すべて自由である。剩へ人生の事であつて、苟くも川柳の題材とならぬはなく、和歌の優美以外、俳諧の洒脫以外、所謂人生の隱微、か

くれた人生裏面の美は、その闡明する所となつた。戯場といひ遊廓といひ蔭間、後家、下女、居候など、和歌にも俳諧にも洩れてゐるが、川柳に於いては此の上もない好材料となるのであつた。初代川柳は、その『柳樽』第十六篇に於いていふ、「前句にかゝはらず、古代時代事趣向よろしければ、高番の手柄あり、すべて戀句世話事、賣色、下女様の句に新しき趣向むすべば、手柄多し、味ひて考ふべし」と。四世川柳また『柳樽』第十二篇に於いていふ、「高き殿上人の上品より、武士の四角なる町人の丸き、丁稚の買ひ喰ひ、居候の氣がねを始め、傾城藝者、後家娘、おかこに、下女に、夜鷹まで、何んでもかんでも選り取りや、柳の縁が十九文横町のその裏店のうがちまで、餘さず、漏さず、途方のなき穴まで」と。そのうがちや、その穴や、また滑稽や、やがて江戸氣質の表彰である。警拔にして寸鐵よく、人生の缺陷世態の眞相を活寫せることや、諷刺の極めて峻鋭なことが、その特質である。徒らに卑俗を以てこれを棄つべきでない。

賣据と唐様で書く三代目

吉原があかるくなれば家が闇

仲人は雨までほめて歸るなり

人魂のいちけて飛ぶはかゝり人

など滑稽の中に眞理あり、眞情あり、笑ひの中にまた涙の籠れるのが、即ち川柳の川柳として大いに稱すべき點である。

かの五世川柳が、口には卑俗を避けるといひながら、

徳に入る門戸を叩く手習ひ子

未廣の皇國仁智を磨き骨

の如く、却て卑俗に陥つて知らざるこそ大いに笑ふべきものである。

この川柳を發生せしめた滑稽洒落の情調は、地口・口合・語呂合の流行と共に、やがて洒落本・黄表紙となり、狂歌・狂文となつた。されば川柳は即ちこれら洒落本・狂歌の素を成したものともしふべきである。

第六章 狂歌狂文の隆盛

さきに生白庵行風や油煙齋貞柳を出した上方の狂歌も、文運の東漸と共に今は江戸に移つた。しかも狂歌が文藝上に價値のあるものと認められたのは、江戸の地に移つてからである。輕快と機智と滑稽とは、實に江戸の人の特性である。詞句の上にも滑稽を求めてゐた貞柳等の狂歌ならば、兎も角、今は漸く進んで人生の矛盾社會の裏面にも眼を注ぐに至つては、その奇想を天外より拉し來る江戸子の氣風を俟たねばならなかつた。まして鼓腹擊壤たゞ泰平の甘きに酔ふ江戸の春には、不平もなく、煩悶もなく、耳目に觸れるもの、片つ端から混ぜ返し、洒落のめし、嚴肅なるべき人生を茶にして、人をして願を解かせないでは止まなかつた。かうして地と時とを得て、ともすれば和歌の餘興俳諧の餘技と見られ勝ちであつたものを、ば全然獨立の文學とは成し了つたのである。これが魁をなしたものは、唐衣橋洲にして、朱樂菅江これを承け、太田蜀山に至つて所謂天明調の風體を完成し得たのである。橋洲がいふやう「かく世にひるこれるは實に赤良菅江が動にして、予は只陳涉が旗上げのみなり」と。赤良とは蜀山の初號で